
虹色の電撃姫～いやだからオレは……～

芦田貴彦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虹色の電撃姫〜いやだからオレは……〜

【Nコード】

N8324W

【作者名】

芦田貴彦

【あらすじ】

とあるおとぎ話に登場する英雄の少女。強力な魔法と剣技を持つて世界を救ったとされるらしい。しかしまあ、おとぎ話。実際の話なわけがないのだ。魔法やら魔王やら、そんなのがいたわけがない……と思っていたオレですが、考えを変えざるをえなくなりました。なんの因果か、魔法アタリマエの世界に強制参加させられて、あげくなんか知らないけどそっちの世界でオレは、その英雄様の体で戦う羽目になってしまった。しかも英雄様の体といっても、なんだかんだで十歳程度の女の子という始末……。そんな中、これは口酸っ

ぱく言っておきたい。いやだからオレは男だつての！ 注・魔法ア
タリマエの世界といつても、現実世界の裏側という意味合いです。

序章（前書き）

自分の処女作であります。生でもいいので（と書いておいてなんですが、出来れば、生は……）温かい目で見えていただいたら幸いです。

序章

とあるおとぎ話に、こんな話がある。

はるか昔、突然世界に魔物と呼ばれる人外の凶悪な生き物たちが現れた。人々は魔物たちの強さに圧倒され、なす術なく滅びの一途をたどっていた。

しかし、人類は生き残った。魔物たちに対抗する力、『魔法』を手に入れたのである。魔法は、人類存続の切り札としてただちに体系化された。魔法を操るもの、『魔法使い』が世の中に当たり前のように現れ始めてから、人類の魔物への反攻が始まった。

人類は徐々に魔物を圧倒し始め、少しずつ自分たちの土地を取り戻していった。

だがあと少しというところで、人類は再び足を止めることになる。

魔物たちの王たる存在、『魔王』と呼ばれるものが現れたのだ。

魔王は自らが君臨する世界、魔界から次々と強力な魔物たちを呼び寄せ、自らも人間たちの世界を支配せんと殺戮を繰り返した。瞬間に人類は危機に陥り、もはや絶滅も時間の問題であった。

しかし人類は、その危機をも乗り越えた。

『英雄』と称される一人の少女が、悪辣な魔王を滅ぼしたのである。

少女は、稀代の魔法使いであり、天才的な剣士でもあった。

その魔法は、異界の扉をも操り、

その両手の剣は、嵐のように敵を切り刻んだ。

魔王と互角に渡り合えたのは、彼女くらいなものであった。

彼女は別世界の王と死闘を繰り広げ、ついに打ち破ったのである。
……しかし魔王と激戦を繰り広げた彼女は、皆のところへ戻る間もなく、決戦の場で命を落とした。最後に魔界への扉を封印するという大魔法を行使して…。

最後にその英雄の名をお教えしよう。

彼女の名は、フルミナ・レーゲンという――

＋＋＋＋

「グガアアアー！！！」

民家ほどもある異形の生物が大音量で吠える。

「っ、うるせえな！」

その足元で、一人の赤髪の少年が舌打ちしつつ、手に持った細身の槍を異形な生物の足元に突き刺す。すると異形な生物は悲鳴らしき雄叫びを上げ、後ろに退く。

「へへん、どんなもんだって――」

「悪いが踏むぞ」

赤髪の少年が自慢げに声を上げようとした後ろから、銀髪の青年が少年の背を踏み台にして高く飛翔する。

「っ、いつてーな！」

赤髪の少年は下から抗議の声を上げるが、青年は何事もなかったかのように少年の声を聞き流す。

「……さすがに頭には届かないか……」

青年は冷静に異形の生物を眺め、持っていた人の背ほどもある大剣を構える。

「はあっ！」

そして掛け声とともに大剣を振り下ろす。大剣は深々と異形の生物

の腹部を切り裂き、そこから黒っぽい体液が噴き出した。青年は大剣を振り下ろした反動をうまく使いもう一太刀浴びせた後、異形の生物を踏み台にし、少年の元まで戻ってきた。

「なにすんだよ！」

帰ってきたところで、少年は青年に責め寄る。青年は素知らぬ顔で、「そう怒るなつて。ほらみろ、お前のおかげで大きな傷を負わせることができたぞ？」

「そーいう問題じゃねえよ！」

即座に少年が言い返す。と、そこで二人は異形の生物の様子がおかしいことに気が付いた。

「さて、きたぞ」

青年が小さく笑みで口元をゆがめる。少年はあたりを見回し、岩のような大柄の少年を見つけると、手招きした。

「よし来い、出番だぜ！」

大柄の少年は一度うなずき、片手に壁のような重厚な盾を持ちながら少年たちの前に躍り出て、盾を構えた。

「グガアアアアー……！！」

異形の生物は口を開け一度上を向いた。すると口の端から炎が漏れる。どうやらブレスを吐くつもりようだ。

そして彼らはそれを待っていた。

「頼むぜ旦那」

「……まか、せろ」

青年が盾の陰に隠れる。赤髪の少年もそれに続く。青年は小さく息を吐くと、近くの建物を見上げた。

「……さあて、おいしいところを持っていくんだ。ちゃんと決めてくれよ」

「会長、敵がブレスの体勢になりました」

「そのようだね」

グラウンドで暴れる異形の生物を見下ろす校舎の屋上。そこには四人の人が戦況を見守っていた。そのなかで会長と呼ばれた全身黒一色の青年が「さて」と言つて空を見上げる。時間的には深夜をまわっている、月と星がきれいに見えた。

「うーん。今回はなかなかかったね。もうちょっと早めに終わると思つて、アニメの録画してないのになあー」

ふう、とため息をつく。すると会長の横にいる、彼女らが通う高校の制服を着た青色の長い髪を持つ女性が、

「大丈夫です。別に見なくても死んだりしませんから」

若干とげを感じる口調で言った。会長は心外とばかりに肩をすくめて、

「いやー、わかってないね我らが副会長さん。アニメにはね、男のロマンが詰まっているのだよ。そして僕みたいなコアなファンは独自にMPなるものを持つて。それがなくなると、生命の危機を迎えちゃうのさ」

「MPとは？」

「萌えポイント」

「……」

「……っあ、ちよつ、それで殴られると、い、いい痛い、かな？」
会長は彼女の手から（いつの間にか）出てきた白い剣（ハリセンとも言いますな。……でも、普通のハリセンには金属光沢なんて、ないよなあ）を見て、冷や汗を出し始めた。

副会長の女性は小さくため息をついて、さっとハリセンをしまう。

……というか消した。

「ふう……。まあそれはさておき。…ここが勝負どころだ。ここで確実に仕留めたい」

一度大きく息を吐いたが、その後会長はさつきとは違うまじめな表情で言う。

「先ほども言ったように、あれはブレスの後、体内の熱を放出するために首のあたりにあるえらを開く。そこがやつの弱点部位なんだ。かなり弱っている今なら、そこを的確に切り付ければ一撃で倒すことも可能だと思う。かなり高い位置にあるから、こうして上から奇襲をかける形になっているけど、君なら成功すると思うよ」

会長は屋上のへり近くに立っている、見た目小学生に見える——副会長と同じデザインの制服を着ているが——小柄な少女に向かっていった。その少女は、月の光を受けその光の加減で虹色に輝く不思議な金髪をしていた。その髪を肩甲骨のあたりで揺らしている少女は、レモン色の瞳で屋上から異形の生物を見下ろしながら、両手に持った二振りの剣を握りしめた。

…そのほおに、汗が一滴流れ落ちる。

「……大丈夫？」

と、小柄な少女のすぐ後ろから不安そうな声がもれる。小柄な少女がちらと背後を見ると、そこには淡い亜麻色の髪を長いポニーテールしている少女がいた。ポニーテールの少女は、小柄な少女がやるうとしていることを、本心ではやめさせたいと思っているのか、中途半端に片手を小柄な少女のほうにのばしている。しかしその様子を見て小柄な少女は逆に決心がついたようだ。小さく息を吐いて、

「……大丈夫だ。心配すんな」

小さな見た目同様に幼い声で、可憐な見た目に反し男勝りな口調で

話す。そのときグラウンドで異形の生物が熱線にも似たプレスを、大柄の少年が構える盾に向かって勢いよく放った。思わず顔をしかめたくなる熱風が校舎の屋上までふぶく。

だがプレスはすぐに止み、首元のえらが大きく開いた。

「今だ、フルミナ君!!」

会長が言い放つ。

「言われなくてもっ!」

小柄な少女―フルミナは言うや否や屋上のへりを力強く踏み切る。

「!?!」

突然の上から奇襲に、異形の生物は慌てえらを閉じようとする。だが、遅い。

「はああああああつ!!」

小さな英雄が、闇夜に輝く双剣の高速の二連撃で、的確に異形の生物の首をえらの口から切り落とした。異形の生物は、声を上げる暇もないまま首から上がずれ、頭が落下し始める。

同時に頭は、端から小さな粒子になり消えつつあった。残された胴体も同様に切られたところから光の粒子に変わる。

「よし、決まった!」

フルミナは、空中で勝ち鬨をあげる。

だが、ふと気づくことがあった。

いま、彼女は異形の生物の正面で自由落下している。彼女にとっては校舎ほどの高さから落下しても、彼女の持つ力のおかげ（あと、地獄のような理不尽な訓練のおかげ）で体勢を立て直し、着地することが可能なのでたいしたことはない。

問題は落下している場所だった。

異形の生物は決定的な傷を負い、消滅しつつあった。だが、その消滅は一瞬のことではない。早いペースではあるが、一瞬ではないのだ。

グラと、異形の生物が前のめりになり、力なく倒れ始めた。他ならぬフルミナのほうに向かって。

「……え？」

言わせてもらえば、絶好のタイミングであった。

これならちょうどフルミナが着地したのと同じくらいに、地面に倒れ伏すことになりそうだ。

……もう一度言おう。彼らの消滅は一瞬ではない。

そして、消えるまではちゃんとした質量があるわけで。それはつまり――

「って、やべえつぶされる!？」

フルミナの額に冷や汗がうまれる。

「どど、どうしょ――」

その瞬間、フルミナは横から風のように割り込んできた何かに吹き飛ばされた。

「全く、お主は相変わらず詰めが甘いというか、間抜けであるな」

……と、思っただけにかふさふさしたものの背に乗せられていた。フルミナは、それがよく知ったものであることに気がつく、ふて腐れたような顔をして、

「……なんだよ、今回は運が悪かったただけだろあれは」

「運なものか。何も考えず切り付けたお主が悪いわ」

「なにを――」とフルミナは、自分を背負っているものに文句を言おうとしたところ、そいつは背負った時と同じように、無遠慮にフルミナを異形の生物から離れたところにおろした。……というか落とした。

「ひぐつ。つつ、……おい！」

フルミナはしりもちをついたような体勢で、そばにいる落とした当人を見上げた。

「ん、ああ悪いな。なにぶん我も急には止まれぬのだ」

悪びれた様子なしにそいつはしらつと答え、大きな振動を立てながら倒れ伏す異形の生物を眺めた。

フルミナの視線の先にいたのは、かなり大きな獅子であった。白と黒の美しい毛並みをしたその獅子が、フルミナを眺めながら口を開く。

「まあ、せっかく助けてやったのだ。礼を言え、とまでは言わぬ代わりに許せ」

獅子の口から流暢な人語が吐き出される。フルミナはそれに驚きもせず、ううう……とうなりながら獅子をにらむ。

「おい、大丈夫うー？」

とそこで、場違いなほどのんびりとした声が一人と一匹にかかる。

フルミナと獅子は同時に声のしたほうを振り返った。

「ああはい、大丈夫ですよ。……この白黒に振り落とされた以外は」

「あれくらい受け身が取れて当然だ」

「……あのなあー」

「あははー、だいじょうぶそうだねえー」

声の主はフルミナと同じ制服を着た少女だった。だが、彼女で目が行くのはそこではない。

彼女は車いすに乗っていた。そしてまぶたは優しく閉じられているが、まるで見えているかのように迷いなくフルミナたちのところへ

向かっている。

「さっきね、かいちよーさんから『今日はお疲れ様。僕は一足先に帰らせてもらうよ。アニメの時間が迫ってて厳しめだからね。みんなも消滅を確認したら帰っていいよ。話は明日の放課後にしよう』って言われたんだよー」

「かー、マジかよそれ。テキトーすぎじゃね？」

車いすの少女の後ろから、いつの間にか集まっていた赤髪の少年が頭をぼりぼりかきながら不満そうに言う。

「ま、それがあのダメ男だ」

赤髪の少年の言葉に、ため息半分に銀髪の青年が答える。

「……さて、消滅は確認したんだしよ、オイラ達も帰ろうぜ？」

そう言って、一足先に赤髪の少年が踵を返し、グラウンドの先にある正門へと歩き始める。

それを皮切りに、皆そろそろと正門を目指す。

「私たちも帰ろう？」

ポニーテールの少女がフルミナに言う。

「……ああ、そうだな」

フルミナはふと夜空を見ながらつぶやいた。

「……こんなことがしょっちゅう起きているのに、普通の奴は気が付かないんだよな」

いつからだろうか。

こんな普通の奴が気付かないことに、気付くようになったのは。そんなに昔の話ではない。むしろつい最近の話だ。

フルミナはグラウンドの先にある建物——自分たちが通っている古宮高校を眺めた。

……まだ、ここに入學して一学期たってないんだよな。

「？ どうしたの？」

立ち止まって動こうとしないフルミナにポニーテイルの少女が不審げに声をかける。フルミナは小さく首を振って言う。

「いや、なんでもない。さあ、帰るか」

フルミナ……いや、宝条雷牙宝条雷牙がこの世界に入り込んだきつかけは、
今からほんの二か月前のことだ――

？

序章（後書き）

誤字、脱字、修正が必要であろうところは、是非指摘してください。
な。

11/19 最後の文を一月から二月に変更。

日常乖離のきっかけ 1（前書き）

ちよつと主人公、不遇が続きます

日常乖離のきっかけ 1

「あゝ、ダリィ…」

夕方の土手を、一人の少年が両手をズボンのポケットに突っ込みながら歩く。

「今日も一日ロクなことがなかったな…」

五月某日、高校生活を送るようになってから一か月ほどたった平日。今日もまた学校をさぼって、一日無為に過ごした。あつた出来事と言えば、つい先ほど同じような年頃の野郎とケンカしたくらいか。

「ん？」

オレはふと正面を見て表情を曇らせた。目線の先には見知った高校の制服を着た男子生徒らがいた。楽しげに談笑している。

「……、もうそんな時間か」

ゲーセンで時間をつぶしていたら、どうやら下校時刻と重なったらしい。

オレは素知らぬ顔で男子生徒らの横を通り過ぎようとした。その際にちらと生徒らの顔を見て、オレは軽く舌打ちをした。

「…よりにもよってクラスメイトかよ。」

生徒らの顔をオレは知っていた。……もちろん、向こうも。

「…おい、さっきのつて宝条、だよな」

「ああ、だよな…」

オレが離れた後、背後からそう声が聞こえた。オレはそのまま歩き続け、やつらが見えなくなったところで立ち止まった。おもむろに携帯を取り出し、時間を確認する。

「…はあ、ダリィ…」

小さくため息をつき、オレは再び歩き出した。

+++++

オレの名前は宝条雷牙。：アホみたいな名前だが、本名。自分で言うのもなんだが、世間一般に言うところの『不良』だ。ロクに学校にも行かず、ゲーセンで時間をつぶすようなことばかりしているやつを不良というなら、まさしくオレはそれに当てはまる。

両親はだいぶ前に離婚。母方に引き取られたが、当の本人は子供——オレがいることを否定し、新たな男を捕まえてどこかへ消えてしまった。父も母もどちらも遊び人で、親戚筋はオレの両親を毛嫌いしているらしく、半ば絶縁関係でみな近くにはいない。オレ自身もこのように不良少年なので、喜び勇んでオレを引き取るうとする者はいなかった。

つまり、オレは一人浮いている、あるいは『存在しない人物』として血縁関係筋には認識されているようなのである。まあ、別にオレはそれでもかまわない。両親が残した小さな貸家——（どうなっているのかよくわからないが、オレが居座り続けてもなんの警告もない）で普通に生活しているし、なにより……もう慣れた。

一人で生きていかれる。

戸籍とかはあるのだろうか、『存在しない人物』として扱われ、無駄に生きている。

将来なんてどうでもいい。

だから、将来の道を作る土台になるだろう学校ですらも意味を感じ

じられない。

それがオレ、宝条雷牙だ。

まさしく『不良』人間といえるだろう。誰も近づきもしないろくでなしの人間。

だが、世の中『例外』というものもあるようだ。

「雷牙！」

住宅街を歩いていると、後ろからオレを呼ぶ声がした。

「あんた今日も学校さぼったでしょ！」

オレが振り返る前に、声の主はオレの肩をぐいとかんだ。オレはため息をつきつつ、そいつを振り返った。

「悪いかよ」

「悪いに決まってるでしょ！」

振り返った先には、学校帰りだろう、制服姿にスクールバッグをもったオレと同じ年頃の女の子がいた。自慢の長いポニーテールを不満げに揺らし、同じく不機嫌そうな表情でオレをにらんでいる。

コイツの名前は日向楓^{ひなた}。子供のころからずっと隣に住んでいる、いわば幼馴染の女の子だ。昔から真面目な奴で、しかも長年一緒にいるせいか物怖じせず、ことあるごとにオレにこうして忠告をする。

「…放せよ」

オレは面倒臭そうに楓に言った。すると楓は力強く首を横に振った。長いポニーテールが大きく揺れる。

「いいえ、放さないわよ。アンタがきちんと学校に行くって言うてくれるまではね！……って」

きつい口調で責めたてていた楓が、オレの首筋を指さして言葉のんだ。

「アンタここ、血が出ているじゃない」

「ん？ ……あ」

示された個所に軽く触れると、ぬるつとした感触と軽い痛みが走った。おそらく先ほどケンカした際に作ったものだろう。

…心配そうにこちらを見上げる楓が目に残り、オレは顔をそらした。

「…ほつとけ」

「放っておけるわけじゃないでしょう！ なに、またケンカでもしたの？ …大丈夫？」

責めるような口調の中に、『心配』の感情が混じる。

「お前には、…関係ないだろ」

その感情がいやにうつとうしく感じて、オレは楓を突き放すように言い放った。しかし楓はオレから離れるどころか、さらに近づいてポケットからハンカチを取り出した。

「関係ないことないでしょう。何年一緒にいると思ってんのよ。ああもつ、ちょっと動かないで。止血だけでも…」

「…ほつとけよ」

「だから動かないでって言ってるでしょ。放っておくとばい菌が—

—

「ほつとけつつてんだろ！！」

「！？」

楓はびくつと体を震わせうつむき、ゆっくりとオレから身を離れた。

「…ちっ」

オレは何とも言えない心境を覚え、舌打ちを残してその場を去ろうと――

「…なんで、なの？」

ふと、足を止める。

「どうしてそんなに、変わっちゃったの…」

楓の小さな声が聞こえて、

「確かに、おじさんおばさんはひどい人だった。それが雷牙の負担になっているんだと思う。一人苦しんでいるのになって、思う。…けど――」

そこで楓が顔を上げた。いつも強気な目が、オレをとらえる。

「あんたが変わる必要ないじゃない!!」

「…っ」

オレは言葉を失った。
だって…

「昔は、あんなに格好いい男の子だったのに」

楓の目に、涙が見えたから。

「…雷牙の、ばかっ」

涙をためた目でオレをにらみ、楓はオレの前から走り去った。

「……っ」

ダンッ

楓が見えなくなつて、オレは思い切りすぐ横のブロック塀を殴りつけた。

「…最悪だ」

そのまま、ずるずるとブロック塀に身を預け、オレは地面に腰を下ろした。

「……いつてえ」

殴りつけた拳がジンジンと痛む。見ると少し血がにじんでいた。ついでに思い出したかのように首筋の傷も痛みだし、もう一度オレはつぶやいた。

「……いつてえ」

+++++

翌朝、いつも起こしに来ていた楓は結局来なかった。オレはあまり寝付けず重い頭をかきながら、ゆっくりと体を起こした。

「……くそ」

鈍く走る頭痛に顔をしかめ、オレは洗面台に向かう。蛇口から出た冷たい水を乱暴に顔にかける。しかし、頭痛は治らなかった。

「……なんだよ、ちくしょう」

顔を洗って少しだけ目が覚めたせいかな、昨日のことが鮮明に思い出されてしまった。

『……雷牙の、ばかっ』

目に涙を浮かべてにらむ楓の顔を。

「……」

オレは少しの間ぼうつと蛇口から出る水流を眺めていたが、小さくため息をつき蛇口を閉め、服を着がえに自室に戻った。

+++++

ピンポン

インターホンが鳴ったのは、オレが外出しようとしていた矢先だった。

「……!?」

訪問者の顔を見ずに玄関ドアを開けて、オレは驚いた。

日常乖離のきっかけ 2

「ちょっといいかしら、雷牙君？」

玄関先にいたのは、楓の母親だった。

「仕事先にちょっと無理言つて、少しでも時間をもらったの」

「時間がないから入ることまではしないわ」と言つて、楓の母親は玄関以降入ろうとはしない。だが、突然の来訪にオレは驚き、気を遣うことができなかった。

「……おばさん、何の用ですか」

「うん。楓のことでちょっと、ね」

それを聞き、オレは少し顔をしかめる。昨日の今日だ。楓のこととなると昨日のあれしかない。

「……あの子ね。昨日私が帰るまで、……ううん、帰ってからも、ずっと泣いていたのよ。電気もついていない、暗い自室で」

「……」

オレは何も言わず、楓の母親が続ける話を聞いた。

「今までにないことだったから心配になつてね。知っているでしょう雷牙君も。楓はどんなに悲しいこと、苦しいことがあつても、簡単には他人に見せない子だつてこと。最初は学校がつらくなつたのになつて思つたの。あの子、生徒会に入つたつて言つていたから、それが原因かなつて。……でも、すぐには言つてくれなかった。ようやく話してくれたと思つたころには、もう日が変わりそうだったわ」

やれやれといった感じに、楓の母親は首を振った。

「あの子があそこまで悲しみに浸っていた原因。ぼつぼつと語ってくれたの」

楓の母親はゆっくりとオレの目を見てきた。

「『雷牙が変わっちゃった』てね」

だから、その時のオレの動揺は気づかれたのかもしれない。

「雷牙君。最近学校に行かなくなったみたいね。…どうして学校、行かないの？」

「……」

オレは楓の母親の目から黙って目をそらした。それを見て、楓の母親は小さくため息をついた。

「うん。雷牙君も大変なのわかる。自分ひとりで生きていこうとする苦しみに耐えるのに精いっぱいなのかもしれない。……でも、それは違うのよ」

楓の母親が、首を横に振る。

「あなたは一人じゃない。楓がいるし、私も……いや、私たち家族が……、」

あなたを実の家族のように思っているわ」

「……！」

楓の母親の言葉に、オレははっと目を見開いた。

「だからね、一人で抱え込まないで。あなたも私たちの家族。悩んでいることがあったら、何でも話してちょうだい。家族なのだから、ね？」

優しい口調で楓の母親は言う。オレはその言葉にいたたまれなくなつて、さらに顔をそむけた。楓の母親は顔をそむけるオレを見た後、自身の腕時計を確認した。

「……そろそろ私も仕事に行くわね。……雷牙君、今日は私のほう

で楓を慰めるわ。でも、夜になっても、明日になってもいいから、雷牙君自身が楓に謝ってあげてね」

「それじゃ」と言い残し、楓の母親は玄関から出て行った。オレはその足音が消えるまで、しばらく動かずに立っていた。

「……家族、か」

オレはぼそりとつぶやいて、片手で頭に触れる。

まだ頭痛は引いていない。

＋＋＋＋

結局その後外出したのは、夕方になってからだだった。昼食も食べる気になれず、ベッドで浅い眠りを繰り返していた。外出しようと思いついたのは、さすがに腹が減ったからだというのもあるが、それだけではない。

オレはしきりに時計を確認する。もう下校時間だ。

そう、オレは楓を待っていた。

高校に行く気などなかったが、楓たちの家族に強く推され、半ば無理矢理に通わされた高校。何度か楓に引つ張られ歩かされたその通学路に、オレはいた。

時刻は五時半ごろ。ちらほらと見知った制服が横を通り過ぎる中、目当ての姿は見えない。

「生徒会に入ってたって言っていたな」

十分ほど待つても来ない楓を待ちながら、ふと考える。

「もしかしたら、遅くなるのかも……」

さすがにこれ以上何もせずただ突っ立って待つのは嫌だと思ったオレは、近くのファストフード店に目を向けた。あそこなら、外の様

子を見ながら座ることができる。道のわきですつと立つておくよりは何倍もいい。そう思ったオレは、一度楓が来ていないかを確認すると、店へ足を運んだ。

「ちよつと待ちな」

ちよつと店内に差し掛かろうとしたところで後ろから声が聞こえ、肩をつかまれる感覚。

「ああ？」

聞いたことのない声で、しかも明らかに穏やかではない言動。オレは少し身を固めながら振り返った。

「少し面を貸してもらおうか」

見るとオレより2、3ほど年上そうな男がいた。俳優になつても通うしそうな出で立ちをしたその男が、オレの肩をつかんでいた。そしてその男の後ろにもう一人。

「よう、昨日ぶりだな」

見覚えのあるツンツン頭の男が、見下ろすような口調でそう言った。昨日、オレの首筋に傷をつけたやつだった。

オレはツンツン頭から視線を、肩をつかんでいる男に移す。

「嫌だね。離せよ」

オレは肩の手を振り払おうとした。しかし思いのほか、男の力は強かった。振り払えない。

「……ちつ」

オレは舌打ちをして、再度振り払おうと男の腕に手をかけたところで――。

「ぐはぁっ」

ツンツン頭の男の蹴りが勢いよく腹に突き刺さった。それだけで体

がぐらつく。

「馬鹿野郎、人目があるだろうが。少し我慢しろよ」

オレから手を離れた俳優男がツンツン頭の男をいさめる。そして俳優男は言いながらオレの髪を無造作に握った。

「つてえな、離せよ！」

オレは俳優男に怒鳴ったが、男はそのまま歩き出した。なす術なくオレは男に連れて行かれ、すぐ近くのビルとビルとの狭く暗い空間に突き飛ばされた。

「何すんだよ！」

しりもちをついたオレは、座ったまま男たちをにらんだ。表通りに出る道を阻むように並んで立っている二人は、怒鳴るオレを見下ろす。

「へへ、昨日は世話になったな」

ツンツン頭の男が汚い笑みを浮かべ、一歩前に出てきた。対して俳優男は腕を組み、傍観する姿勢を取っていた。

「昨日は油断して後れを取っちゃったが、今日はそんなことはしねえよ」

「デメエら、……なめてんじゃねえぞ」

オレはゆっくりと立ち上がって、拳を握りしめる。

…俳優男は少し遠い。しかも力量がわからない。たいしてあのツンツン頭の男は比較的近いし、なにより昨日ケンカしたがたいしたことなかった。…だったら先にこのツンツン頭を――

ドコッ！！

音がしたのはオレの背後からだった。音とともに頭部に鈍い痛みが走り、一瞬で意識が遠のきそうになった。

「なっ、……な」

「おいおい、頭はやめとけよ。死んだらヤベエだろうが」

「おお、そうだな」

声は後ろから聞こえてきた。痛む頭を片手で支えながら振り返ると、さつきとは別の二人の男がいた。一人は片手に鉄パイプを持っていて、おそらくそれで頭を打たれたのだろう。血が流れてくるのを感じながら、オレは後の二人をにらみつけた。

「てめえに恨みは別にねえよ俺は。けどまあ、仲間がやられたなんて言われりゃ、黙ってはいられないんでねえ」

鉄パイプを持った男がにやにやと笑いながら言う。

……つまりこいつらは、ツンツン頭の男の報復に手を貸しているということか。……倍返しにもほどがあるぜ。

「お、まえらあ……っ」

「おー、しぶといねえ」

頭を打たれてもまだ意識のあるオレに向かって鉄パイプを持った男がそういうと、俳優男以外が下品に笑った。

しかし、その笑い声もほどなく終わった。

「んじゃ、そろそろ。……死ねやコラア……!」

次に飛んできたのはツンツン頭の男の右のボディブローだった。

「がはっ!」

あっけなくオレは地面に膝をついた。そこから前のめりに倒れようと――

「オラア、まだまだ終わらねえぞ!」

そこに誰ともわからない蹴りが飛んできた。オレは声も上げることができず、地面に転がった。

……そこからは一方的な展開だった。蹴られ殴られ、最終的には何

をさせているかもわからないくらい意識がはつきりしなくなった。やがて痛みも感じなくなり、男たちの声も聞こえなくなった。それは男たちの気が済んだからなのか、単にオレが聞こえなくらいダメになったのか。それも分からない。

もしかしたら、オレは死ぬのかもしれない。そう思った。

でも、それでもいいとも思った。

こんな死に方をするのはかなり不本意だが、別に生きていても何もすることはない。

もともと『存在しない人物』だったのだ。たとえここで死んでもあるべき姿に戻るだけではないか。死んでも誰も悲しまない……。

いや、本当にそうなのか？

本当に誰も悲しまないのか。

声をかけてくれた人がいたのではないか。

オレのことを家族だと言ってくれた人がいたのではないか。

ずっとオレに接してくれて、オレのために泣いてくれるやつがいるのではないか。

オレは今、何をしている。

今日はやることがあって、ここまで出できたはずだろ。

そうだ、ここで寝ている時間はない。

オレはあいつに、
楓に謝りに来たんだ！

日常乖離のきっかけ 3

「……っ」

最初に気付いたのは、俳優男だった。

「おお、こいつ動こうとしてるぞ」

雷牙の手が動くのを見たツンツン頭が、笑いながら言う。それをきいて、その場にいた男たちがぞろぞろと雷牙に近づいた。

「……っ馬鹿、離れろ！」

俳優男がとっさに怒鳴る。しかし、遅かった。

「へ、あっ——」

次の瞬間には、雷牙の周りにいた男たちは、弾かれたようにビルにたたきつけられていた。

「っが！…な、なにがあったんだ！？」

飛ばされた男たちは、困惑した様子であたりを見回した。唯一離れていて飛ばされなかった俳優男は、驚きの表情を浮かべていた。

「……こいつ。……まさか」

「ひいつ」

そのときツンツン頭が悲鳴を上げた。

血を流しながらゆっくりと立ち上がった雷牙から、薄く白いオーラが出ているのを見てしまったのだ。

雷牙は一步ツンツン頭のほうに近づいた。血を流し、うつむいていて表情が見えない雷牙の様子は、白いオーラと相まってツンツン頭にとっては逆に恐怖を増幅させることになったようだ。

「ひいー！　ば、化け物！？」

ツンツン頭の男は、一人一目散に表通りに走って行った。それに我先にと口々に悲鳴を上げながら残り二人の男たちが続く。暗い空間に残ったのは、俳優男と、白いオーラをまとった雷牙だけになった。

「……」

雷牙が俳優男のほうを向く。俳優男は小さく舌打ちをして一步前に出て拳を固める。

「……久しぶりだな。魔法使いとの戦闘は」

俳優男が小さくつぶやく。

「見たところかなりの魔力だが、ムラが多いな。まだまだ素人か。

……だが、悪いな」

と、俳優男が自信ありげにつぶやくと、みるみるうちに俳優男の髪と目が銀色に変化し始めた。

「なにぶんこつちも久しぶりなんでね、手加減ができないのさ」

それと同時に、俳優男の拳が白いオーラをまとい始めた。

「殺さないようにはするが、もし最悪な事態になったら……恨んでくれるなよ」

俳優男が腰を下げ、右拳をためる。

「……いくぞ！」

俳優男が雷牙に向かって一步踏み出した瞬間、

キュインッ！！

「っ！？」

俳優男の足元で何かがはじけた。俳優男は強引に踏み出そうとしていた足の軌道を変える。悪くなった体のバランスをすぐに修正しながら、俳優男は足元を見た。

「…これは」

先ほど足を踏み出そうとしていたアスファルトが、小さくえぐれていた。

そして、謎の光の残滓が漂っていた。

「攻撃魔法か。……いったい誰が―」

「あんた、雷牙になにしてるのよ!」

そのとき、表通りのほうから少女の声が響いた。俳優男は突然の聞き覚えのない声に驚き、思わず顔を上げ声のしたほうを眺めた。

「今警察も呼んだ。もう逃げ場はないわ」

俳優男の視線の先にいたのは、楓だった。

学校帰りであろう楓は制服姿で、かばんを足元に置き、両手には代わりに謎の長い杖のようなものを持っていた。

そして驚くことに、本来の黒髪と違い、彼女の髪の色は淡い亜麻色に輝いていた。

「…!？」

もちろん俳優男は楓のことは知らない。

しかし俳優男は、楓の姿を見るなり驚きの表情を見せた。

「…」

「…」

俳優男と楓は目を合わせたまま動かない。にらみ合い、言葉を発さ

ない。

「……あんたは」

と、ふいに俳優男が二人の間の沈黙を破った。

「あんたは、古宮の生徒だな。…しかもその腕章、生徒会か」

「……そうよ。そういうあなたは一体誰？ あなたも魔法が使えるようだけど」

突然の俳優男の質問に、まじめに答えるか悩んだ楓だったが、隠しても無駄だと思い素直に言った。だが、警戒は解かない。俳優男の背後で今にも倒れそうになっているが、謎の白いオーラを放っている雷牙をしきりに見ながら、俳優男をにらみつづけた。

「確かに、俺も魔法が使える。まあ、お前とは系統が違うがな。

それより、こいつもお前らのトコの生徒会役員か？」

俳優男は後ろの雷牙を軽く一瞥しながら言った。それに楓は首を横に振る。

「いえ、雷牙は生徒会役員ではないわ。……あんたは、私たちの生徒会を知ってるの？」

逆に尋ねる。すると俳優男はすこし口元に笑みを浮かべて、

「まあ、多少な。……黒塚のやつは元気にしてるか？」

「……あんた、会長の知り合いなの？」

楓が眉をひそめる。

「会長……、あいつが、ね。……当然と言えば当然か」

懐かしそうに口元に笑みを浮かべる俳優男の様子に、楓は苛立たしげに、

「何一人で納得してるのかしら？ ……いや、いいわ」

そういつて楓は小さくうつむく。

「それよりも今は……」と楓は顔を上げ、一度雷牙を眺めて、

「今はあんたが許せない！」

言い放ち、勢いよく長杖を横に振った。すると長杖の先から小さな光の球が生まれ、そのまま俳優男のほうに弾丸のように飛んで行った。俳優男はサイドステップでそれをかわす。

「あんたが悪いんじゃない！」

怒鳴りながら楓は何度も光弾を俳優男に放つ。しかし俳優男は冷静にすべてをかわして見せる。

「雷牙は何も悪いことをしてない。全部あんたが悪いのに、どうして雷牙が痛めつけられないといけないの!？」

楓の怒りの言葉に、俳優男は眉をひそめた。

「……どういうことだ？」

思ったことをそのまま口に出す。

「……どういうこと、ですって？」

すると俳優男の言葉に、楓は光弾を放つのをやめ、ぐぐつと長杖を強く握りしめた。怒りのあまり、押し殺したような口調になる。

「……よく言うわね。もう善悪の区別もないわけ？ 自分がやったことを棚に上げて、気に入らない指摘をされたからやり返して。あんた最低だわ」

「だから何のことだ」

「とどける気？ ……もしかしてわからないの？ じゃあいいわ教えてあげる」

楓が、持っていた長杖の頭を俳優男の顔に向ける。

「あんたがやったのはカツアゲって言って、それはれっきとした犯罪なのよ！」

「……なに？」

俳優男は楓の言葉を聞き、声のトーンを落としてつぶやいた。そのとき後ろから何か音がした。白いオーラが消え、支えを失った人形のように雷牙が倒れた音であった。

「っ、雷牙!？」

それを見た楓は、俳優男の存在を無視してまっすぐに雷牙のほうへ駆け寄った。俳優男は横を通り過ぎる楓には目もくれず、何か考え込むように楓たちに背を向けてうつむく。雷牙のそばに駆け寄った楓はすぐさま雷牙を抱きかかえ、血が流れる頭へと軽く手を添える。すると楓の掌が淡く光を放ち始めた。それと同時に、流れ出る血の量がわずかに減っていった。

「……本当か、その話」

俳優男が確認しようとする言葉に、楓は顔を向けて言った。
「当たり前でしょう! あんた、常識くらい学びなさい——」

「そっちの話じゃない!」

楓が言い終わらないうちに少し声を強め俳優男が言った。楓は気圧され言葉をのんだ。

「……カツアゲをした、というのは本当なのか」

その様子が背中越しに分かったのか、俳優男は一度落ち着くために軽く目を閉じた。口調は声を強める前に戻っていた。

楓はその質問に眉をひそめた。……なんとなくだが、俳優男が嘘を

ついているようには見えなかったからだ。

そういえばと、楓は少し思ひ出す。この狭い空間に躍り出る前に、数人の男たちが慌てて逃げ出すのを見た気がする。そのとき不審には思ったが、直後に雷牙の痛々しい姿が狭い空間の奥にあるのが目に留まり、怒りにその疑惑は吹き飛んでしまった。もしかしたらこの男と、その逃げ出していった奴らは仲間だったのではないだろうか。

さらに楓ははつとなった。今日学校でカツアゲの被害にあった生徒から犯人の特徴を聞いていたことを思い出したからだ。

……この人、聞いていた特徴と違う…。

「……ええ、本当よ。アンタの仲間か知らないけど、カツアゲをしたってのはホント。なんなら、被害受けた子を連れてきてもいいわよ」

楓は強く拒絶する姿勢を少し緩め、しかしすべては信用していないと言っかのように硬い口調で答えた。

「……そいつの特徴は、わかるか？」

俳優男はつぶやくように聞く。もしかしたらある程度予想をしているようだ。

「……金髪をむやみに立てた細身の男だって聞いたわ」

「……そうか」

俳優男の予想は当たっていたのか、強く握りしめられている拳からは押し殺した怒りが見て取れた。

その時少しの間静かであった空間に、遠くからパトカーのサイレンの音が響いてきた。

「……いまさら言っても遅いのだろうが……」

徐々に大きくなるサイレンを聞きながら、俳優男は楓に聞こえるように言った。

「……すまなかった」

そう言い残し、俳優男はその場で大きく跳躍した。

「あ、こら待ちなさい！」

楓は倒れた雷牙を抱きかかえつつ、俳優男に向かって言い放った。だが俳優男はビルの間を三角飛びの要領で登って行き、楓が言い終わる前にはビルの陰に隠れてしまった。

パトカーと救急車が到着したのは、それから間もなくであった。

日常乖離のきっかけ 3（後書き）

ようやくと魔法登場という感じです。

俳優男さん、早く名前を呼ばせてあげたいですね。

ま、彼にはもう少し待っていただきましよう。

す、すみませんが、十歳程度の女の子はもう少し待ってくださいな。

日常乖離のきっかけ 4

「……」

オレはゆっくりとまぶたを開けた。あたりは暗闇に包まれていてあまり視界は良くなかったが、窓から差し込む薄い光が、多少オレに周りの景色を見させてくれた。……まったく見覚えのない景色だったが。

「……ここは？」

オレは体を起こしてもつとあたりを確認しようとしたが、予想外に体が重く全く動かない。

「……いつつ」

不意に頭のあたりにピキッと痛みが走った。そのせいか、寝起きでおぼろげな意識が少し覚醒した。先ほどよりも情報が頭に入ってくる。暗闇だからよくわからないが、おそらく白一色であるう壁。飾り気

のない空間。かすかににおう消毒の香り――。

「……病院、か」

オレは力んでいた体の力を抜き、ベッドに体を預けた。よく見ると外は夜なのか、淡い月の光が病室に差し込んでいる。おぼろげに見える天井を仰ぎ見ながら、オレは気を失う前の記憶をたどる。

「……頭を打たれたせいがよく覚えてないな」

オレが思い出せたのは、不良たちに一斉にフクロにされたところまでだった。それ以上先――誰が駆けつけて、誰が病院に連れてきたのかは分からない。

「……ん？」

そういえばと、オレはふと気になることを思い出した。

「……なんか、楓の声がしたような……？」

かすみがかつてはつきりとしなない記憶の中、気のせいかもしれないが、オレは楓の声を聴いたような気がした。

……もしかして、あの場に楓がいたのか？

「……」

オレは小さくため息をついた。もし、いたのだとしたら、また心配をかけてしまったことになる。謝る理由が増えるわけだ。

「……ん？」

と、オレは何か物音がするのに気が付いた。空気の流れる音というか、むしろこれは呼吸の音――

「……まさか」

つぶやき、かろうじて動く頭を動かして、自分の寝ているベッドのわきを見る。そこには……。

「……まったく、お前は」

オレは再びため息をついた。目線の先には、幼少のころからずっと見てきたよく知った女の子、楓がいた。ベッドのわきにある小さな丸い椅子に座り、ベッドに伏せるようにしている。……おそらくずっとそこにいたのであろう、眠っている彼女は制服姿であった。

「……ごめんな、楓」

ぼそっと、オレはつぶやく。

「お前はいつもオレを心配してくれてるけど、……オレにはそんな価値なんて――」

「……ん、……らい、が？」

と、楓は身じろぎしたと思ったら、うつすらと目を開けた。オレは聞かれたかと思い一瞬びくつとしたが、表には出さないように努力した。

「……よ、よう」

「……っ、目が覚めたのね！ 大丈夫、雷牙？」

しばらくは眠たげに眼をこすっていた楓だったが、オレの顔を見るや急に顔色を変えた。最初はうれしそうに、そしてすぐに心配そうな顔になる。

「……別に、なんともない、……でもないか。体がさっぱり動かない。あと、なんか体がすごくだるいわ」

どうせ楓は大丈夫と言っても嘘だと気づくだろう。そう思い、オレは正直に言うことにした。変にはぐらかすと、逆効果なのは長い付き合いで分かっている。……分かったた、はずなんだがな。

「それはそうでしょう、いきなりあんなに魔力を解放するから……」

「……は？ なんていった？」

「えっ、ああ、いえこっちの話！」

少しぼうつとしていたのと、楓自身の声が小さかったのもあって、オレは楓の言葉がよく聞き取れなかった。なんか、魔法とか聞こえたような気がしたが。聞き返すと、楓は慌てて首を振った。……？

「……お医者さんの話では、二週間は絶対安静だって」

「……だろうなあ」

オレは自分の体の感覚を調べるように目をつぶった。全身に力が入らない。それに加え、気にすると急に全身が鈍く痛み出した。動けないから見ることはできないが、さぞ色々な個所が青くなっている

ことだろう。

オレは目を開け、うつむき何も言わずオレのベッドを見つめている
楓の横顔を盗み見た。そこには、何かを期待するような高揚感と、
何かにおびえるような不安感の入り混じった、読みにくい表情が張
り付いていた。オレはその横顔を不審げに眺めたが、すぐに目をそ
らし暗い天井を眺め始めた。

そのまま何も会話がない時間が過ぎて行った。……だが、

「……あ」

「え？」

「……いや」

最初に沈黙を破ったのはオレだった。でも、ためらってしまい一度
口をつぐんだ。このままうやむやにしようかとも思ったが、どうし
ても楓に聞いておきたいことがあった。

オレは一度楓の顔を見た。楓はオレの言葉を待っているようだ。ば
つちり目があった。オレはふいとそっぽを向いて、

「……何も、聞かないのかよ」

「え？ 聞くって？」

聞き返してきた楓に、オレは苛立たしげにため息をついた。もし体
が動いて入れば、頭をかきむしっていたことだろう。

「だから……。…オレが何をやってたのか、聞かないのかよ」

「……」

……すぐに返事は返ってこなかった。だが、それがオレには少しあ
りがたかった。言った後に後悔したが、実際に聞かれたらどう言う
つもりだ。

といっても別に悩むほどでもないかもしれない。……だってオレはただケンカを――

「……人助け、してたんだよね」

……楓のその言葉に、思わずオレは小さく息をのんだ。そしてよくわからない素振りを出来るだけ作りつつ――出来たかどうかは保証できないが――オレは反応した。

「お前、何言って……」

だが、楓のほうは確固たる情報源を持っていたようだ。

「その場に偶然鉢合わせた友人から聞いたの。昨日不良に絡まれてた人が、雷牙に助けられてたって」

「……」

オレは黙る。野次馬がいたことは知っていたが、まさかその中に楓の友人がいたとは……。

「……だから、さ。雷牙は別に悪いことをしようとしてケンカしたわけじゃ、ないんだよね？」

優しい声で楓が言う。オレは少し間をおいて、

「……結局ケンカしたのには変わりないだろ」

少々ひねくれた返事を返す。なぜ素直に認められないのか。……そりゃ、オレにも分からない。

すると楓はうつむいて、

「……うん、そうだね。ケンカはよくないよね」

ちいさく、悲しむ声がもれる。だが、次の瞬間にはその声は一変し

た。

「……でもさ。それでも人助けよ。確かにケン力はよくないけどさ、そうでもないと思われなかったんでしょ？」

「……。なんでオレが助けようとしたって思うんだよ。ただ単にケン力がしたかっただけで、そこにたまたまあいつがいただけかもしれないだろ」

優しく問いかける楓に、オレはあくまでぶっきらぼうに答えた。

すると、ゆるぎない確信を持った様子で楓は言った。

「そんなの決まってるじゃない。……雷牙は優しいからだよ」

「はあ？」

オレは思わず楓を振り返る。

「な、何言ってるんだよお前。オレが優しいとか、何を根拠にそんな……」

「だって、雷牙はその人のこと放っておけなかったんでしょ？ わざわざけがまで負って、その人を何の見返りも求めずに帰したんでしょ？ ……雷牙は昔からそうだった。いつも誰かをかばってけがをするよね」

「……あのね、雷牙」と楓はオレから目を離して虚空を見上げた。

「実は私、その話を聞いてすごくうれしかったの。やっぱり雷牙は雷牙なんだ、ってね。変わったと思ったけど、全然変わってない。それがうれしくて……」

とそこで小さな嗚咽が楓の口から洩れた。オレは慌てる。

「お、おい……」

「……ごめん」

楓はそういつて流れていた涙をぬぐった。そして明るい声とともに立ち上がった。

「……さて、もう遅くなるから私帰るね。大けが負ってるんだから、雷牙も無理して起きてちゃだめよ？」

そういつて足元にあったバッグを持ち上げ、おやすみと言って踵を返す。

「……楓」

オレが呼び止めると、楓はスライドドアに手をかけたまま振り返った。

「なに？」

「あー、……えっと」

オレはすぐに言葉が出ずに、目を泳がせた。そして一度小さく深呼吸して、

「……その、悪かったな。昨日怒鳴ったりして」

すると楓は最初驚いた顔をして、

「……早く傷を治して学校に行ってくれたら、許してあげる」

次の瞬間には満面の笑みを浮かべた。その頬が少し赤くなっていたように見えたのは、オレの気のせいかな。

「はあ？ お、おいちよつと待て。それとこれとは話が――」

「じゃあね、雷牙。おやすみなさい」

「あ、おい！」

そう言い残して、楓は病室を去った。一人オレが取り残される。

「……はあ」

オレはため息をつきつつ、力なく頭をまくらにうずめた。そしてぼつりと、

「……学校、か」

＋＋＋

病院に搬送された翌日の朝、医者には二週間ほど様子を見ましようと言われた。楓から聞いていたので、改めて聞いた形だった。

だが、入院して四日。いつものように診に来た医者に、あと数日で退院出来るでしょうと言われた。おいなんだそれは、とオレは思ったが、それは医者のもうも同じだったらしい。予想外にオレの回復が早かったとのこと。

奇妙なことはもう二つある。

一つは、楓の見舞いに気が付けなかったことだ。

というのも、楓は律儀に夕方には必ず見舞いに来ているのだが、どうも楓がくると眠くなるのだ。さっきまで寝ていて、眠気がないときにも関わらず、だ。

しかも楓は決まって窓際に一回立つ。窓の外を覗き込むようにするのだが、いつも何をやっているのか見当もつかない。なにかをつぶやいているようにも見えるのだが、定かではない。

そういえば窓際に立たれた後に、決まって眠くなっていたような気がする。とりあえずばっちり寝顔を見られているのは、恥ずかしい限りだ。

もう一方のほうは奇妙というか、むしろ驚いたという方が正しい。

……オレの病室を、あの俳優男が訪ねてきたのだ。

日常乖離のきっかけ 4（後書き）

楓さんオンステージ……

日常乖離のきっかけ 5

……俳優男がオレの元を訪ねてきたのは、入院してから三日後のことだった。

「なっ……」

軽いノックの後に入ってきたそいつに、オレは目を疑った。

「……お前っ」

オレはベッドから跳ね起きようとした。だが、直後に走った痛みに軽い眩暈を覚えた。残念ながらベッドから体を起こすのが精いっぱいであった。

「……。何しにきやがった、てめえ」

片手で頭を支えつつ、オレは俳優男をにらみつけた。

「……」

俳優男は感情の読めない目で、じっとオレを見つめる。が、その直後オレはさっきとは違う理由で目を疑うことになる。

「……すまなかった」

なんと俳優男が頭を下げたのだ。

「なっ。……は、え？」

突然のことに、オレはただただ驚くばかりだった。

「い、一体どういうことだ？」

オレはとりあえず思いついた言葉をそのまま投げかける。すると俳優男は頭を上げ、

「お前にそのけがを負わせたことに対する謝罪だ」

「はあ？」

ますます意味が分からないーいや、意味は分かるが理由が分からない。

「……なにかたくらんでいるのか？」

すぐには信用できず、オレは再びにらみつける。すると俳優男は軽く手を横に広げおどけて見せる。

「別に何もたくらんではないさ。ただ単に落ち度がこちらにあると思つての謝罪だ」

「落ち度……？」

「そうだ」

俳優男は軽くうなずき、口を開いた。

「前にお前を連れ込んだのは、……ツンツン頭がお前にやられたと言つていたからだ。……が、実はそれだけじゃなかったようだな。

聞くところによると、あのツンツン頭がカツアゲしてたところにお前が出くわしたそうじゃないか。しかも手を最初にあげたのはあいつの方らしいな。お前はただ不運な友人をかばっただけ。それだけ聞けばどちらに落ち度があるか、なんて明らかだろう？ それを知らずに俺はお前を殴り飛ばすのに手を貸してしまった。……いまさ謝つても遅いだろうがな、……すまないとは思つてる。今なら二三発食らつても文句は言わねえよ」

そういつて自分の頬を指でぽんぽんとたたいた。殴りたければ殴れ、と言つているのだろう。

それにオレは……。

「……ふーん、そうかよ。ま、友人じゃなかったんだけどな」

そういつて再びベッドに横になった。俳優男は予想外とばかりに目を丸めた。

「……殴らないのか？」

「殴るわけないだろ」

聞いてくる俳優男にオレは面倒臭そうに答えた。

「わざわざ謝りに来たやつを、どうして殴らなきゃならないんだよ。逆にこっちが悪者になるだろうが。……オレもかっとなって殴り返したのも事実だし、もっと穏便に片づける方法もあったかもしれないのに、ケンカに持ち込んだのはオレのほうも一緒だ。無理に殴る権利はオレにはないよ」

……お前らが起こしてくれたきっかけのおかげで、少し歩き出す気持ちになれたのだ。こうなったことは正直憎らしいが、けがの功名でもある。そこには、……少し感謝してるかもしれんしな。

……そんなことを心の端で思いつつも口には出さず、もう言うことではないとばかりに、オレは寝返りを打って俳優男に背を向けた。
と――、

「っはははははは！」

突然俳優男が笑い出した。何事！ とオレが振り返ると、俳優男は面白そうにオレを見ていた。

「ははは。っお前、面白いやつだな！」

「な、なんだよ面白いつて!？」

「言葉通りの意味だよ」

「はあ？」

俳優男がくくつと笑う中、オレはただ首をかしげるばかりであった。

「……お前、名前は？」

ひとしきり笑った後、オレに向かってそう言った。

「ん、オレの名前？」

オレは脈絡のない問いに不審げに聞き返した。俳優男は気を悪くした風はなく、むしろ小馬鹿にするような様子で、

「そうだよ。まさか、自分の名前も分からないほど頭がダメになっただけじゃないだろ？」

「んなわけねえよ！……オレの名前は宝条雷牙だ」

「雷牙……。またアレな名前だな」

「うっせ」

「ははは、三割ほど冗談だ」

「それはマジと言っても差しつかえないだろ！」

ははは、と俳優男は再度笑った。

「……俺の名前は氷室勲也だ」

そしておもむろに自分も名乗る。そして小さく肩をすくめて、

「……まあ、これで俺の要件は済んだわけだ。そろそろおいとまさせてもらうぜ。……じゃあな、雷牙。早く治って彼女を安心させてやれよ」

「はい！？ か、彼女ってなん——」

「……またな」

「あ、おいちよつと待つ——」

オレが止めるのも聞かず、俳優男——勲也はあっさりと病室を後にした。

「……なんなんだ、あいつ？」

若干呆れ気味にオレはつぶやく。昨日まで目の敵だったのにここに来てこれだ。そりゃ複雑な気分にもなる。

「…………ん？」

ふとオレは勲也の言葉を思い出し、首をかしげる。

「…………またな、て言っただかあいつ？」

またな…………。…………次にどこかで会うときのセリフだ。

…………まあ、確かにいつか会うときもあるだろう。

しかしそれでもわざわざ『またな』なんて表現をするか？ これじやまるで近いうちに必ず会うみたいじゃないか。

「…………なんなんだよホントに」

オレはただ、答えの出ない問いに早々に白旗を上げ、ため息をついた。

とりあえず、これらが入院中オレの気になったことだ。あとは至って暇な入院生活であった。

そうして搬送からちょうど一週間で、オレは晴れて退院の日を迎えた。一週間たつても変わってない―むしろ誰かさん（大方お隣のお節介さんだろうが。いや、それ以外は考えたくないな…………）が掃除してきれいになっていた我が家を見て、オレはむしろかゆい思いをしながら、「ただいま」と小さくつぶやいた。

家に入っただけですぐに自室に向かう。そして自室のクローゼットをおもむろに開けた。

目当ての服を探す。

そして見つけた時に、久しく着ていないその服が全然傷んでいないことに軽く皮肉気に口元をゆがませた。小さな高揚感とともに少し大きな不安感がつる。

明日は、これを着てみるか。

その視線の先には、古宮高校の男子制服が掛けてあった。

日常乖離のきっかけ 5（後書き）

次回はついに学校に行けそうです。

日常乖離のきっかけ 6

……世の中には、いい予感と悪い予感がある。『なんか今日調子いいかも』とか『この試合、勝てるかもしれない』とか、そういうのをいい予感とするなら、その逆――まったく自分に利益のない負の要素を含むのが悪い予感だ。

そう、例えば――

+++++

「……」

オレはちらりとあたりを見回した。すると何人かの生徒と目が合うが、どれも長くはもたない。目があったと思ったら、向こうがささっと目をそらすのだ。

「……はあ」

オレは小さくないため息をついた。オレが今いるのは、古宮高校一年二組の教室。念のため頭に包帯をしたまま退院した翌日――つまり今日、オレは意を決して一か月ほど離れていた学校に足を向けたのだ。楓は子供のように喜んだが、その様子に小さく笑みを浮かべつつオレはある予感を感じていた。

……絶対に歓迎はされないよな……。

言うまでもなく悪い予感であるそれは、オレの中では予感と言いつつ確信に近かったのかもしれない。

悪い予感も確信も（確信のほうは当たり前だが）よく当たるものだ。現に……

「……明らかに敵意の的だよな」

オレはほおづえをつきつつ、今度は窓の外を眺め始めた。視覚を使わなくなった分、クラスメイト達の声が少しだけ聞こえるようになった。

なんで――、いまさら……、てかあの包帯なに――……。

決して良好とは言えないつぶやきが耳に入る。まだ朝のホームルームも始まってはいないが、早くも来たことに後悔し始める。楓はなにか生徒会に用があるとかで教室にはいないが、このまま黙って帰ってしまおうかと思いだした。

そして本気に机の横にかけた自分のバッグに手をかけたその時――、

「君が宝条雷牙君だよな」

バッグを取るために頭を下げていたその頭上から名前を呼ばれた。一応呼ばれたので無視することもできず、オレは顔を上げ声の主を見た。

見覚えのない、細身の男子生徒であった。その後ろには、生徒会室に行ったはずの楓が立っていた。

「……なんだよ？」

オレは警戒しながら細身の男子をにらんだ。よく見たら三年生ということを示すネクタイをしている。

「いや、ちょっと日向君の話を聞いてね。突然で悪いんだけど、今日の昼休憩、生徒会室にきてくれないかい？」

しかし細身の男子は特に気にした風もなくそう言った。

「はあ？　なんで」

あまり機嫌がよくなかったオレは、とげとげしく聞き返す。

「なんでも、だよ」

「あ、でもそうだなー」と少し思案気に目を泳がせた後、オレの耳元でささやいた。

「しいて言うなら、日向君のためだよ」

「なに？」

オレは予想外の応えに、細身の男子を凝視した。その様子に満足したのか、細身の男子はくるっと背を向けて教室から立ち去ろうとする。

「それじゃ、待ってるよ」

「おい、待て！」

オレの制止の声を聞き流して、そのまま立ち去って行った。オレは突き出した手を、所在なさそうにだらんと下げた。

「何か言われた？」

楓が不思議そうに尋ねる。「いや」とオレは小さく首を振った。

そして――

「……なあ、楓」

オレは細身の男子が去って言った方向を眺めながら言う。

「昼、生徒会室に案内してくれ」

+++++

生徒会室。

それはこの学校をより良くしようと立候補した生徒会役員が、活動する場所。

はつきり言っただけにはさっぱり縁がない場所でもあった。

「てか、ここまで来たのは初めてだぜ」

『生徒会室』と書かれたドアを眺めながら、オレはつぶやいた。

「普通の人にはあまり縁がないからね。それに雷牙はずっと休んでいたから、余計に近づく機会はなかったしね」

「ちよつと待ってて」と言い残して、楓はドアを開け中に入ってしまった。オレは何気なしにあたりを見回した。昼休憩の真っ只中なのに妙に静かな気がした。

今朝のこともあり、気が気でない。楓のためとは、一体なんなのかな……。

「……雷牙、入ってもいいよ」

オレが必死に呼ばれた理由を考えていると、答えが出ぬ間に再びドアが開いた。

オレはごくつとつばを飲み込んで、ゆっくりと半開きのドアに手をかけた。

「……」

そうして恐る恐る室内に入る。最初に見えたのは、ドアのほうを空けたコの字型に並べられた長机だった。そしてその長机に設けられているパイプ椅子に数人の生徒が座っているのが見て取れた。

最後にオレの、机を挟んだ真向かいで、ゆったりと椅子に腰掛けて

いる今朝の細身の男子と目が合おうとしたその時――、

「っ、お主は!？」

オレの斜め横から驚きの声が上がった。こっちもびっくりして、無意識にそちらに目を向けると、

「……っ、どわぁっ!？」

予想外のものを見てしまい、オレは腰を抜かすことになった。

「な、なな、な――」

オレは言葉にならない声をあげつつ、腰を抜かした原因を指さした。そして一言、

「な、なんでライオンがいるんだよっ!！」

悲鳴にも似た声を張り上げた。

生徒会室には、なんと大きな獅子が鎮座していたのだ。白と黒の毛並みが美しいが、そんなことオレにはどうでもよかった。オレは部屋の端までしりもちをついたまま後ずさりして、震えだす。

「……どうしたんだい、レオン？」

オレとは反対に、獅子にかなり近いところにいる細身の男子は、平然とした様子で獅子に話しかけた。オレはたまらず怒鳴る。

「なに平然としてんだよ!」

すると、次の瞬間オレはさらに目を疑うことになる。

「……そうか、なるほどの。そういつことが」

「うわっ、しゃべった!？」

さらに驚くべきことに、獅子がはつきりと言葉を話したのだ。
な、なな、なにがどうなってんだー!？

「……。ああ、済まない。この獅子はレオンといってね。人語を話すんだ」

「はあ!？」

細身の男子が口元に笑みを浮かべながら放った言葉に、オレは混乱した。今にも泣きそうになる。

それを察したのか、細身の男子はあははと笑いながら、
「心配しなくてもいいよ。こいつは賢いから、君を取って食ったりしない。もちろん僕たちもね。だから安心していいよ」

にこやかに言うが、到底オレはそんな言葉じゃ納得はできなかった。

な、なにこれ!　しゃべるライオンとか……。ありえねえ。夢か、夢を見てるのかオレ!？

「ら、雷牙大丈夫？」

パニックを起こし、かくかくと震えるオレの元に楓がやってくる。
そして、

「大丈夫だよ雷牙。急にびっくりしたかもしれないけど、大丈夫。大丈夫だから……」

優しくそう言って、そっとオレを抱きしめた。

「……か、楓」

オレはすうつと落ち着いていくのを感じた。楓のやわらかな感触と甘い匂いに、優しく包まれる安心感を覚えた。

と、同時に一気に昇る血の流れ。顔が真っ赤になるのを感じた。

「か、楓っ！ は、はは、離れる！」

「……落ち着いた？」

「おお、落ち着いたから、早く！！」

よかった。と楓はオレから離れた。その顔はオレと同様赤く染まっていた。やはり楓も恥ずかしかったのだ。

「お前っ、何恥ずかしいことしてんだよ！」

「し、知らないわよ。雷牙があんまりにも取り乱してたから、つい……」

「ついて……、お前なあっ」

「はいはい、君たちがそういう関係なのは分かったから」

パンパンと手を叩く音と同時に、細身の男子がため息交じりに声をかける。オレははあ？ と眉をひそめて、

「なんだよ『そういう関係』ってのは！」

「……あはは」

「笑ってごまかすな！！」

「……紅汰君みたいな感じの子だねえー」

「はあ？ なんで？」

オレと細身の男子が言い合っていると、別の席に座っていた車椅子の少女と、机に脚を乗っけている活発そうな少年——紅汰と呼ばれていた——が口をはさむ。リボンとネクタイの色からして、二人は二年生のようだ。

「……会長、いい加減本題に入らないと昼休憩が終わってしまいま

す」

それでもオレたちが言い合っていると、細身の男子のすぐ後ろに立っていた長髪の女生徒がぴしゃりと言い放った。お、この人は三年生か。

「ああ、そうだね。つい楽しんじゃったよ」

そう言って細身の男子はふう、と息を吐いて改めてオレのほうに視線を向けた。

「……さっきは済まないね。紹介が遅れたが、僕がこの古宮高校生徒会の会長の黒塚鎌だ。よろしくね」

「か、会長だったのかよ……」

オレはほほを引きつらせる。まじかよ……。

「そう、会長さ。……本来はここから始める予定だったのだけどね。うちのレオンが驚かせてしまったみたいで——」

「そう、それだよ！ なんなんだあれ！？」

オレはビシッと獅子を指さす。それが不愉快だったのか、レオンと呼ばれた獅子はふんと鼻を鳴らして、

「……まったく相変わらず礼儀がなっていない小僧だ」

「っ、しゃ、しゃべるとかどうなってるんだよ！！」

出来るだけ獅子——レオンから体を離すようにしながら、オレは黒塚に怒鳴った。黒塚は、ん？ と不思議そうにオレを眺めて、

「こういうのは初めてかい？」

と、にこやかに言った。

「当たり前だろー！！」

オレは間髪入れずに言い返す。すると黒塚は、「だよねー」と肩を

ひそめた。そしてゆっくりと、しりもちをついているオレのほうへ寄ってきた。

「……でも、君にはこれから『こういうこと』に慣れていってほしいんだ」

そう言って手を差し伸べる。オレは何度か黒塚の手と顔を見比べ、やがておずおずとその手を借りて立ち上がる。

「……こういうことに、慣れる……？」

オレは不審げに眉をひそめた。黒塚はオレが立ったとわかると、くるりと背を向け、

「宝条君。……君は、『魔法』の存在を信じるかい？」

日常乖離のきっかけ 6（後書き）

生徒会の面々がちらほらと出てきました。

ちなみにこの話は、中途半端に書いて少し（そう、あまり多くないので）いつストックが切れるのか……）ためていたものをちよつとずつ分けて投稿しているのです。それゆえに言えるのですが、

主人公のTSが迫ってきましたよー！。

日常乖離のきっかけ 7

「……は？」

オレは我が耳を疑った。

……魔法？　なんだそれは。そりゃ、魔法は知っている。ファンタジーなどでよく出るあれのことだろう。でも、なんで今それが？
「まあ、それが普通の反応だろうね。魔法なんて、こいつ何言ってるんだ、ってね。」

じゃあさ、フルミナ・レーゲンの話について、どう思う？」

「フルミナ・レーゲン、……確かなんかのおとぎ話の英雄様じゃなかったっけ？」

ますます話が読めなくなった。一体この会長は何がしたいのか……。
「……おとぎ話、ね。確かに世間では有名な話だね。『おとぎ話』として」

「……あんたは何が言いたいんだよ」

オレは読めない黒塚の言動に警戒する。

「そうだねえ、僕が言いたいのは……」

と、そこで黒塚は言葉を切り、オレのほうを向いた。その顔にはさつきまでの柔和な感じの中に、真剣みを帯びた表情が見て取れた。そしてその表情のまま言った。

「……君には、今君が持っているその価値観はごみのようなものと、認識してほしいんだ」

「……なんだって？」

オレがそう聞き返すと、「つまりは、だ」と黒塚は右手の人差し指

を立てた。

「君は魔法なんて存在しないし、フルミナ・レーゲンの話も作り話だ。そう思っているんだろうけど、実際はそんなことはないってことさ。魔法もフルミナ・レーゲンも、どちらも存在するんだ」

「まあ、フルミナ・レーゲンは歴史上の人物だけだね」と軽い口調で付け足す。オレはいよいよ警戒を強めた。

「なんだよ、新手の宗教勧誘か？ 意味が分かんねえよ」

オレは黒塚をにらみつけた。しかし当の本人はその反応が予想できたのか、ふうと小さくため息をついた。

「……こればかりは実物を見てもらった方が早いかな。……うーん、そうだなー。じゃあ、日向君」

「あ、はい」

黒塚は楓のほうに、少し含み笑いをしながら話を振った。

「簡単なものでいいから、宝条君に見せてあげてくれ」

「分かりました」

「か、楓……？」

オレは黒塚の言葉にうなづいた楓をまじまじと見た。簡単なものを見せるって、それは一体……。

「……ごめんね雷牙。今まで隠してて。……私もこの四月からなんだけどー」

と、小さな声で楓が何かをつぶやき始めた。

「……えっ」

すると同時に、楓の髪の色がみるみる淡い亜麻色に変化し始めた。

「な、なんだよそれ……」

「魔法だよ」

愕然とするオレに向かって、ごく自然に黒塚が言い放った。

「僕たち生徒会役員はみんな魔法が使えるんだよ。そして日向君には魔法使いの才能があったからね。この四月から役員になってもらったんだ」

「……黙っててごめんね、雷牙」

黒塚のほうに向いていた視線を、楓の声を聞き、彼女のほうに戻してみると、

「これが魔法。私は光属性が得意らしいわ」

髪が完全に淡い亜麻色に変化し、謎の光の球を手のひらに乗せた楓がそこにはいた。

「……」

オレは言葉をなくし、ただ口をあぐりと開けて、楓の髪と謎の光弾を見比べた。

「どうだい？ 少しは信じてくれるかい？」

ふふふ、と小さく笑いながら黒塚がオレを見てきた。

……なんだよこれ。魔法が存在する上に楓が魔法使いだって？
信じられない。……信じられないが――、

「……分かった。一応今はそういうことにしといてやる。そのライオンも、なんかの魔法とやらなんだろう？ ……で、なんでオレがここに呼ばれたんだよ」

オレは一度目をつむって冷静になった。観念したわけではないが、一応ここは（自分の精神の為にも）納得することにした。

「うーん、レオンは魔法で動いてるわけじゃないんだけどね。まあ、それは追々」

黒塚は苦笑いしながら、がさごと部屋の端にある机の引き出しをあさり始めた。

「えーっと、封印はしてあるはずんだけどーっと、あったあった」
「……お主、扱いが雑であるぞ」

奇妙な小箱を取り出した黒塚に向かってしゃべる獅子——レオンが呆れ気味にうめいた。

「いいじゃないか、封印はしてあったんだから。……いいのかい？」

「……確信はないが、私の勘が正しければおそらく」
「それで十分さ」

レオンとなにやら会話（慣れないな、だってライオンがしゃべってるんだぞ？）をしていた黒塚は口元をほころばせてオレの元に来た。

「一応魔法があると認識してくれた宝条君に、これを見てもらいたいんだ」

そう言っただけで黒塚はなにかつぶやいた後、ぱかっと小箱を開けた。
小箱の中には……、

「……ブレスレット……？」

虹色の不思議な石をかたどったシルバーのブレスレットが丁寧に入っていた。

「……これが、どうしたって？」

「手に取ってはめてみてくれないかい？」

なにやら貴重な品物な雰囲気にはたじろいたが、黒塚はさらっとそんなことを言ってきた。

「これを、オレが？」

「そう」

「……」

あまり手にしたことのない装飾品にオレは、手にはめるんだよな、腕時計みたいに、とか考えながらブレスレットに手を伸ばす。

そして、

触れた。

その時だった。

『やっと、見つけたよ』

声が、聞こえた。

「えっ、あ——」

オレは手を止めてあたりをうかがおうと思ったが、できなかった。オレの手がオレの抑制を聞かず、独りでに動いたのだ。そしてオレの腕は、ブレスレットをきつちりと腕にはめた。

瞬間——

ブワッ！

「のわっ」

ブレスレットがまばゆい光を放ち始めた。

「雷牙っ」

楓が叫びながらオレの腕を取ろうとしたが、何かに押されているかのように腕で顔をかばい、ずるずると後ろにすべっていった。

「……どうやら、当たりだったみたいだね！」

黒塚が同じく腕で顔をかばいつつも、口元に笑みを浮かべてつぶやいた。

「ちょっ、これどうなって——」

そこでブレスレットはより一層強く輝きだした。一瞬でオレの視界は光で埋め尽くされる。

同時に、ふわりと浮かんでいるような感覚に飲み込まれた。

「……っ——」

次には声が出なくなった。

意識が無理やりに体から引きはがされる感覚を味わう。

突然のことで、オレは何も考えられなかった。

一体何が起きたのか、

オレはどうなるのか、

分からなかった。

ただ、

声が聞こえた。

『君に私の力をあげたい』

女の子の声。

『……約束を、守ってね』

聞いたことがない声であったが、

その声はとても優しく

夢げであった。

+++++

……どれくらい目をつむっていただろう。

「……………」

だれともわからないうめき声が聞こえ、オレは恐る恐る片目を開けた。

見えたのはさつきまでと一緒の生徒会室。

違うのは軒並み椅子と机が吹っ飛んでいたのと、

それぞれ座っていた先輩方が立ち上がっていることであつた。

一番近くにいたのは、黒塚であつた。

彼は何かに耐える状況になつていたらしく、大きく足を広げ腰を落とし、どつしりと構えていた。

そのせいだろうか、彼の胸がすぐ近くにあつて……。

……。

……おい待て。

なんかおかしくないか？

なんであんなに前傾で腰を低くしてんのに、目の前が奴の胸なんだ？

オレは今立っているはずである。

それはオレの足の感覚がそう伝えてくれている。

現にいま確認したって――、

「……ん？」

オレは自らの足元を見て眉をひそめた。

あれ？　なんか、床近くない？

しかも今オレが踏んでるのって、制服のズボンじゃない？　素足見えてるし。

「……ん、……んー？」

オレは首をかしげる。

声が、なんか変だ。普通にしゃべってるはずなのにいやに高い。こ

れじゃあ、女の子の声だ。しかも年齢が低い、おそらく小学生くらいの声だ。

「……ふう、あー魔封具念のため携帯しててよかった……」

え、
頭上？

あ

オレと黒塚は同時に間抜けな声を出した。

同時にオレは我が目を疑つた。

なんだこの身長差。大人と子供くらい差があるぞ。なんで？

「う、これはっ……」

と、オレを見て（見下ろして）黒塚は口を半開きにして震えだした。

そして――

「お、おお、お待ち帰iiiiiiii!!!」

「ぎゃあ——！！！」

抱きついてきやがった！

「なんという、なんというミラクルっ」

「は、放せつ!!」

オレは全力で黒塚を引きはがしつつ叫んだ。てか、なんで声が女の子なんだよ!? そんなつもりはないのに。

「つつがあ!!」

気合とともに一気に両手を突きだすと、黒塚の顔が離れると同時に、オレ自身の両腕が見えた。

……いや、長袖の袖が余りに余って腕は見えず、幽霊みたいな格好になっていた。

「ちよつ、なんだこれ!?!」

オレは思わず叫ぶ。その叫び声もまた、可愛い女の子の声だったと、

ズガンッ

「あうっ」

すさまじい音とともに黒塚から力が抜ける。そしてずるずると床に倒れた。

「まったく、落ち着いてください会長」

声の主は三年の長髪の女生徒だった。その手には光沢を発する(?!?)ハリセンが握られていた。

あ、いやそれ……、

「安心してください、何度使用しても錆びない特殊金属ですから」

「オレが心配してんのはそこじゃねえ!」

思わず怒鳴る。すさまじい音がしたと思ったら、金属だったのかよ。

「ああ、会長のことですか。心配せずとも、しばらくしたら復活しますよ」

「……復活すんのかよ、あんな音出して」

てか、なに慣れたふうな口調なの？　もしかして日常茶飯事なのか？

「……ところで、あなたのお名前は宝条雷牙でよろしいですか？」

改まって、長髪の女生徒がオレを見下ろして（背高いなー）言った。オレは首をかしげながらも一応うなづいた。

「あ、ああそうだけど……」

「え、本当に？」

横から、信じられないことでも聞いたかのような声が割り込んできた。声のほうに顔を向けてみると、そこには目を丸くしている楓がたたずんδει――、

……なんだって……？

オレは楓の姿を見て驚愕した。だって……。

「……なんかお前、でかくない？」

そう、オレから見た楓の大きさが明らかに違ったからだ。

本来、オレの頭一つ分くらい下のはずの楓の身長は、今はまったくの逆立場になっている。

その大きくなった楓はおろろと手を動かしながら、

「いや、私が大きくなったんじゃないくて、雷牙が小さくなったんだよ！」

なんてことを言ってきた。

「はぁ？ オレが小さくなっ……ただ……て……」

楓のその発言に鼻で笑いつつ、楓から視線を外すと、オレの視線は『あるもの』に釘付けになった。途端に声が尻すばみになる。

オレの視線の先には、どこから持ってきたのか全身を映せる縦長の鏡が置いてあった。その隣には三年の長髪の女生徒がいたのだが、それには一切目がいかなかった。

鏡には基本、目の前にあるものを映す性質がある。

今はオレが目の前にいるわけだから、その性質からすると当然オレが映っているはずだ。

……なのに、今映っているのは――、

「……だ、誰だよ。こいつ……？」

映っていたのは、……可愛らしい少女だった。

見たところ、十代前半、下手をすれば十にも満たないと思われる少女である。

鏡の中の、蛍光灯の光の加減で虹色に光る不思議な金髪をした少女は、なぜか全くその丈に会っていない制服の長袖シャツを着ており、そのシャツは膝のあたりまでだらしなく垂れていた。その下からすらりと細くきれいな足がのぞいている。

その少女が、

鏡の中から、

オレを見つめていた。

全くオレと同じポーズで。

オレはあたりを見回し、その少女の姿を探した。

するとどうしたことか、鏡の中の少女も同様に鏡の中を見回した。

再び目が合う。その顔はオレと同じく混乱に満ちているようだった。

オレはがっと思をつかむ。同じ動きを少女もする。

そこで

ある仮説が、オレの中に湧き上がる。

言っておくが、最悪の仮説だ。

「……なあ楓」

オレは楓に、顔をひきつらせながら、つぶやく。

「……これって………オレ？」

楓の返答は、

「……うん」

オレにとって最悪の仮説を証明するものであった。

日常乖離のきっかけ 7（後書き）

TS、ついにしてくれました。

これは新ヒロイン誕生と、言えるのでしょうか……？

え、オンナノコ？ 魔法？ チョット待て！ 1

「……君が付けてくれたブレスレットは、実は特殊なものでね」

愕然と鏡を見ているオレの横で、頭を押さえつつも平然とした様子で黒塚が立ち上がる。

「何が特殊なのかというと、使用者を選別するんだよ」

「……」

「……選別、ですか？」

オレが鏡に釘付けで反応しないことを悟り、代わりに楓が黒塚の相手をする。

黒塚は楓の問いかけにうなづいて、

「そう。まあ選別するといっても、そのものによつて方式はずいぶんと変わるけどね。……それが見つかった当初は、僕は『一定以上の魔力を有するもの』を選別しているのかと思ったんだ。だってそれは——」

かの英雄、フルミナ・レーゲンのものだから。

「まじでかつ！？」

反応したのは、オレを呆然と眺めていた活発そうな少年——紅汰であった。

その反応に黒塚は意外そうな顔をして、

「おや、言つてなかったかな君には？」

「君には！？ え、オイラだけ？ ……そうなのか歩美？」

「え、あゝ……。……そういえばあの時、紅汰君はいなかったねえ

「……」
「なんでえ！？ 『あの時』てのはあつ！！」

あはは、と車いすの少女――歩美は笑う。他の役員たちも（といってもオレは話が読めなかった。楓も同じらしい。てか、オレはそれどころではなかった）『あー……』と気まずそうな顔をする。

「まあまあ。……とにかくそのブレスレットはフルミナ・レーゲンのものなんだ。それはレオンが保証してくれるよ。なにせレオンは、実際にフルミナ・レーゲンを見たことがあるらしいからね」

「……まあ、肝心のところには鉢合わせなかったがな……」

皮肉気にレオンはつぶやく。そして、ふっと鼻を鳴らすとオレのほうを向いて言った。

「……宝条雷牙」

「っ！？」

未だにライオンが目前で話すという非常識に慣れないオレは、蛇にいらまれたカエルのごとく固まった。

それにレオンは一瞬不快そうな顔をした後、毅然とした態度で、

「はつきりと言わせてもらおう。……そのブレスレットは、『お主だから』反応したのだ」

「……オレ、だから……？」

うまく言葉を飲み込めないまま、オレは聞き返した。

「『一定以上の魔力を有するもの』……。それは大きな間違いだ。

現にお主は、それなりな魔力を有しているようだが、お主を遥かに凌ぐ魔力の保持者でも其れを発動させることは出来なかった。……

当然だ。条件はそんなことではなかったのだからな」

淡々と、レオンは言う。

「そやつの発動条件は……、『使用者が宝条雷牙であること』だ」

……オレははつきり言っただけの意味が分からなかった。

発動条件が『オレだから』――

「……なんだよ、なんでそんなこと分かるんだ？　てか、なんでオレなんだよ？」

「それが小娘……フルミナ・レーゲンの望みだからだ」

「……意味わからねえ？　フルミナ・レーゲンはおとぎ話の……いや、現実だっけ言っただけだ。でも、遥か昔の人物だろう？　それがなんでオレを条件にしてるんだよ？」

至極当然の疑問だった。オレは一度もフルミナ・レーゲンに会ったことがない。当然だ。だってついさっきまで、オレはおとぎ話と想っていたくらいだ。実際におとぎ話の人物に会ったことがあるとか、そんなの信じられるわけがない。

「……いずれ分かる。その時を待つのだな」

そう言っただけは終わったとばかりに、レオンはそっぽをむいた。オレは反論するどころか、頭の整理も口々にできていなかった。

だって、色々なことが立て続けに起こって、正直夢を見ているみたいだ。

いや、夢なのかもしれない……。現実のオレは、今頃どっかの授業中に寝ているんじゃないかなー、なんて……。

「……いてっ！」

思わず声が出る。無意識にほほをつねっていたようだ。

……あれ、痛い？

「……（萌え）、つごほん。……ところでレオン。宝条君のこの姿はもしかしくなくても……」

黒塚が呆然とするオレを見ながら（その顔はなぜか緩んでいる）、レオンに問いかける。

するとレオンはしれつと答えた。

「ああ、間違いなく幼少の小娘だろう。顔の雰囲気と同じだ。おおかた、小僧の魔力が小娘の魔力と釣り合うのが、この程度の年齢だったのだろう」

「なるほど。ナイスだよ宝条君、絶妙な魔力加減だね！」

ぐっと、黒塚がオレに向けて親指を立ててくる。オレは生気のない顔でそれを見つめる。

「……なあ、楓」

オレはぎぎぎと錆びた機械みたいにぎこちなく楓のほうを振り返る。

「はは、……これって全部、夢……だよな？ いや、夢だろう！

夢と言ってくれ！！」

徐々に悲壮感を漂わせながら楓に助けを乞う。

だが……。

「……言いくいけど。すべて現実なんだよ、雷牙……」
申し訳なさそうに楓は言ってくれやがった。

「そこは夢落ちだろおー……」

がくつと肩を落とし、オレは床にへたり込んだ。無意識に女の子座りになったが、オレは気が付かないくらい疲弊していた。

「なんだよ、それ……。いきなり変なしゃべるライオンとかいるし、魔法があるとか言われるし、あげくオレ女の子になっちゃうし——」

……ん？ 女の子……？

「……おい待て。ちょっと待て。……オレ、元の姿に戻るのか！？」

がばつと顔を上げて、オレは近くにいた黒塚を見上げた。すると黒塚は他人事のように、

「んー、別にそのままでもいいじゃないかい？ 可愛いし」

「真面目に答える！！」

「えー、そこは『可愛い』って言われたことに恥ずかしがってほしかったなー。顔を赤らめて『な、何言ってるのよ！？ ほ、ほめてもなにも出ないわよっ！』ってさ。せつかく絵にかいたようなツンデレボイスなんだから」

「殴るぞてめえ！！」

「……ははは」

「だから笑ってごまかすなっのー！」

「んもー、仕方ないなあ」

「あー、その顔（二重の意味で）死ぬほど殴りたいっ！！」

オレが今にもかみつく勢いで怒鳴ると、「まあ、いいか」と黒塚はつぶやいた。

そしておもむろに例のブレスレット——今はしっかりとオレの腕にはめられている——を指さした。

「戻るよ。簡単なことさ。そのブレスレットを反応させている魔力の流れを切れればいいんだよ。本来は君じゃ制御できないような魔力の流れだけど、今は魔封具を付けさせてもらってるからね、君でも十分可能はずだ」

「そ、そうか」

オレは握りしめていた拳を緩め、ふう、とオレは安堵のため息をつく。一応戻る手段はあるみたいだ。さて、それじゃさっそくこの姿からおさらば――

そこでふと『肝心なこと』に気が付く。

……平然と聞き流してたけど……

「……魔力の流れって……なに？ どう制御するの？」

え、オンナノコ？ 魔法？ チョット待て！ 1（後書き）

愉快的生徒会だなー。
いいかどうかは別として。

え、オンナノコ？ 魔法？ チョット待て！ 2

「……魔力の流れって……なに？ どう制御するの？」

「ま、そういうことだね」

分かりきっていた質問だったのだろう、黒塚が肩をひそめた。

「魔力制御なんて一般の人が知るわけないよね。……こればかりは感覚的なことだから、なんとも言えないし。慣れるのが一番早いよ」

「……慣れるのにどれくらいかかるんだ？」

恐る恐るオレは尋ねる。すると黒塚は少し考える素振りを見せた。

「うーん、どうかなあ……。瑞希君、君は慣れるのにどのくらいかった？」

「……二日くらいかと」

と、三年生の長髪の女生徒が答えた。

「夏目君は？」

「えー、どうだったかな。……知らね。一週間くらいじゃねーか？ オイラ魔力制御は得意じゃねーし」

紅汰が少し考えた後、投げやりに答えた。

「弥栄君は？」

「えー、そうですねー。わたしは半日で慣れましたけど」

「え、マジで！？ 早くねお前？」

「うん、『あの頃は』ねー」

あはは、と歩美は困ったように笑った。その言葉に紅汰は「うっ」と言葉を詰まらせた。

「……すまねえ」

そして紅汰は申し訳なさそうに歩美に謝った。歩美は気にしていないという風に朗らかに笑った。

「うーん、じゃあ山城君は？」

そう言つて黒塚は今まで一言も発していない、大柄の男子生徒に声をかけた。

大柄の生徒は思案するように身をよじらせた後、

「五日、ほど」

重みのある声で言つた。

「なるほどねー。そして確か日向君は三日だったよね？」

「あ、はい。そのくらいです」

「……だつてさ宝条君。平均すると三、四日くらいかな？」

実に軽い口調で黒塚は言つた。しかしそれはオレにとっては死刑宣告とも同然であり……、

「……嘘、だろ……。……じゃあ、その間ずっとオレはこの格好なのか？」

わなわなと震えながらオレは黒塚にすがる思いで聞いた。黒塚は苦笑いしながら、

「うーん、まあ自由に制御できるように慣れるまでつてことだから、ずっとその姿でいる必要はないけど。……不完全な状態で魔力制御しても、かえつて危険だからねー。『その姿のままのほうが望ましい』……てとこかな？」

「……まじかよ……」

再び、がくつとオレは肩を落とした。その肩にほんと黒塚が手を置いてきた。

「慣れたらすぐだから。それに、君に魔力の才能があつたら、弥栄君みたく半日で慣れることができるかもしれないよ？」

「……ほんとか？」

「………ウン、キットネ！」

「……てめえ、絶対無理とか思ってるだろ」

恨めしそうにオレは呻いた。あははー、と白々しい笑いを黒塚は返してきた。

するとそこでなにか閃いたのか、黒塚はにやりと小さく口元をゆがめた。

「あー、そういえばもつと手っ取り早い方法があるかなー」

「っ、ホントか!？」

残念ながらオレは黒塚の『にやり』に気付かず話に食いつく。黒塚は一度うなづいて、

「当たり前のことだけだね、今君が魔力をブレスレットに流してる……まあ、君の場合無意識だからブレスレットに吸われてるって言うてもいいかな？ とにかく、そうやって魔力は循環してる。そういうことなら、一度ブレスレットに干渉されないように取っちゃえばいいよね」

「おお、確かに」

そう言つてオレはさっそくブレスレットに手をかける。………なにかブレスレットを覆うように変な装飾がいつの間にか付けられているが、それごとオレは取り外そうとしたところ、

「………ただし」

黒塚がオレの行動を遮るように言葉を発した。

「取り外すには、まずそのブレスレットを覆っている魔封具を取ら

ないといけないんだよね。さっきブレスレットが反応した時に慌て僕が付けたんだけど、魔封具ってどんなものだと思う？」

黒塚が質問してくる。オレは一度ブレスレットから軽く手を離して、少し思案。

「……『魔封具』、だろ？ 聞いた感じだと、魔力を封じる、みたいな感じか？」

「そんな感じだね。正確には、魔力の流れを制限するものなんだけど。……さて、じゃあその魔封具。どうして僕は『慌てて』それを付けたと思う？」

「そりゃー……魔力の流れが強かったから……？」

「何で魔力の流れが強いといけないのかな？」

「……知らねえよ。分かるわけないだろ。オレは今まで魔力なんてかけらも——」

「答えは、君の体が持たないからだよ」

オレの声を遮って、やや真剣に黒塚は言った。

「おそらくそのブレスレットには、膨大な魔力が溜め込まれてる。

その魔力が制御できないまま一気に君に流れようとしたんだよ。多すぎる魔力は人体には害だからね、そうだなー」

そう言つて黒塚は宙を眺めた後、さらっと言った。

「……魔封具取っちゃったら、今の君じゃ消し飛んじやつてたね！」

「消し飛ぶつて……そんなアホな……」

「冗談じゃないよ？ 現にその山城君は、一回それで死の淵まで行ったんだから」

黒塚の言葉に、山城は小さくうなづいた。ついでに、歩美の顔を少

し苦しげにゆがむ。

「……嘘は言っていないぜ一年。詳しくは言わねえが、堅治のやつは膨大な魔力にやられて死にかけたことがある。なんとか今は生きてるけどな。……代償はでかいんだよ」

黒塚に賛同するように紅汰が言った。その表情には、一切の冗談は含まれていないようだった。

上級生たちが真面目に、黒塚の言葉は真実であると物語っていた。

……じゃあ、本当にこいつを取ったら、オレは消し飛ぶのか……？

「……まあ、消し飛ぶかどうかやってみたければ、どうぞお試しあれ。取れるものなら、取ってみるといい。……でも、生きてたらかなりの魔力を得ることが出来るだろうけどね。……『生きてたら』の話だけど」

オレの迷いを読み取ったのか、とどめとばかりに黒塚が皮肉たつぷりに言い放った。

オレはちらと魔封具を横目で見たが、やがて視線を外し、ついでに近づけていた手も離れた。

「……そんなこと言われたら、取れないだろうが……」

オレはため息をついてブレスレットを取ることを断念した。

「あはは、分かってくれて助かるよ」

「……てか、そうと分かってたんなら、変に期待させるなよ」

「後学のためだよ」

恨めしそうにオレは黒塚をにらむが、彼は全く気にしていないようにあっけらかんと言った。

と、そこで昼休みの終わりを告げる予鈴が鳴った。

え、オンナノコ？ 魔法？ チョット待て！ 2（後書き）

変に伏線張ろうとするから、後々厳しくなるんですね。わかります。

……わかっている、つもりなん……です……けどね。

え、オンナノコ？ 魔法？ チョット待て！ 3

「おっと、いったん集まりはここで終了だね。続きは放課後にしようか」

黒塚はそう言つて一足先に生徒会室から出ようとする。オレはその黒塚の背中に呼びかける。

「あ、おい待て。オレは一体どうしたらいいんだよ！ このままじや授業どころか、部屋からも出られねえぞ！？」

そう言つてオレはばんばんと薄い胸をたたいた。今のオレの服装は――服装と言つのもおこがましいが――制服の長袖シャツ一枚である。これで平然と歩く勇氣はオレにはない。ほしくもないが……。

黒塚は少し首を傾げた後、

「うーん、……まあ放課後には戻るから」

「投げるなーっ！！」

さつさと部屋を後にした。

くそっ、あの野郎いつかつぶしてやる……っ！

「……お気の毒ですが、放課後までここで待つていただくのが最良かと」

と、黒塚から瑞希と呼ばれた三年生が冷静に言った。オレは苦い顔をする。

「いや、でも……」

「んー、まあ水穂先輩が言つんなら仕方ねえよな。あきらめろ一年」
やれやれと肩をすばめながら紅汰は言い、

「ま、これからよろしくな。んじゃ、お先――」

そそくさと部屋を出て行った。

「くっそー、人の気も知らないで……」

オレは紅汰が出て行ったドアに恨み言をぶつけた。

「……ごめんねえ、わたしたちも授業があるから。ちゃんと放課後には相手をするからね」

「……ごめん、失礼する」

「ちょ、アンタらまで……」

歩美の車いすを山城が押す。二人は申し訳なさそうな顔をしながらも、やっぱり部屋を後にした。

「……雷牙」

そこでぼそつとつぶやいたのは楓だった。呆然とドアを眺めていたオレは、すぐるように楓を振り返った。

「な、なんとかならないか楓！？ てか、お前も魔法が使えるんだろ？ 教えてくれ！ どうやって魔力を制御してるんだ！？」

それに楓は非常に困った顔をする。

「えー……、うーん。……私もまだまだ初心者だから、自分がどうやって制御しているのかよく分からないというか、言葉にできないの。なんとなくこんな感じかな、みたいなものだから、教えるまではちょっと……」

その言葉に、オレも非常に困った顔をする。

「そうか……。あ、じゃああの三年生の先輩はどうだ？ 確か水穂とか呼ばれてた女の先輩……て、いねーし！？」

はつと気が付いて先ほどまで例の三年生の女の先輩——水穂が苗字かな——がいた場所を振り返ったオレは、そこに誰もいないことに驚愕した。

「あ、水穂先輩ならさつき出て行っただけ……」

「忍者かあの人は!？」

いや、女だからくノ一か？

……ではなく。足音一つたてなかったことに、オレはそう評価した。

と、そこで壁に掛けてある時計に目がいった。そこには、午後の授業がもうあと二、三分で始まるということが示されていた。

オレは、おろおろとオレを気遣って部屋から出ようとしないうちに、腹をくくった。

「……あーもう、仕方ないから放課後まで待つ! ……だから授業に行つて来いよ楓」

「え、でも……」

「オレのことはいいから! どうせオレはこつから動けん。いまさら授業サボっても変わりはないし。でも、お前はそうじゃないだろ。だから行つて来いよ。オレのことは適当に頭が痛むから病院に行つたとか言っておいてくれ」

そう言つと、楓は申し訳なさそうな顔をしながら踵を返した。

「……ごめんね雷牙。放課後、すぐ来るから!」

頭だけこちらに向けてそう言つた後、楓は早足で部屋を出て行つた。生徒会室に、半裸の少女―不本意ながらオレ―だけが残された。

……いや、オレだけではなかった。

「……つくづく、妙な縁であるな」

「っ!？」

オレは声のした方を、ぱつと振り向いた。

「お前、いたのかよっ。……そういえば、お前も出られないよなここから。出たら大騒ぎだろうし」

声の主——人語を話す獅子、レオンを見ながら、オレは身を縮めた。

「……そんなに警戒をするな、といっても無駄なのだろうがな」

オレの様子に、レオンはため息交じりにつぶやいた。

「まあよい。一応言っておくが、お主をどうこうするつもりはさらさらないぞ」

「……………」

オレはじつとレオンを見つめる。レオンは余裕さえ感じられる様子でオレを見つめ返してきた。

……その威圧感に耐えられずに、オレは恐る恐る口を開いた。

「……お前は、一体なんなの？ やっぱりなんかの魔法なのか？」

「……『なにか』か」

また面倒な質問だ、とでも言いたそうに、レオンは眉をひそめた。

「……お主が考えている魔法とやらが、なにを示しているのかは知らんが、我は魔法で動いているわけではない。まあ、それに近い存在と言えるかもしれんがな」

……………。

「……はい？」

さっぱりわからない。

「……余計なことを言ってしまったようであるな」

はあ、とため息交じりにレオンは仕切りなおした。

「簡潔に言っと、我は聖獣の一種だ。主らの魔力を媒介にして、召喚されそして具現化した、主らとは異なる存在である」

「……召喚、ね」

オレは思わずつぶやいた。

「……なあ。これ、本気で夢じゃないんだよね？」

オレは往生際悪く、尋ねる。レオンもオレの気持を察したのか、

「……気持ちはわかるが、慣れる。これは夢ではない。こういう世界に、お主は足を踏み入れたのだ」

ばつさりとオレの希望を切り捨てた。オレは、がくつと肩を落とす。勢いで顔もうつむく。

しかし、

「……まあいいよ。……さすがにもう、この世界に実は魔法があるっていうのは納得した。お前みたいなのもいるってこともな。でもさ——」

ばんつ、と（薄い）胸をたたきながらオレは勢いよく顔を上げて訴えた。

「なんでオレはこんな格好にならずにちやいけないんだよ!？」

こんな格好というのは、もちろんこの女の子の状態のことだ。どうやらレオン曰く、フルミナ・レーゲンのものらしいが、こればかりは納得いかない。無理やりに女装させられた気分だ! いや、女装なんてレベルではないけども。

オレの訴えなんて気にも留めていなさそうな様子のレオンは、

「……異なる身体の割には、ずいぶんと馴染んでおるようだし、拒絶反応も見られない。別に何も問題ないであろう」

「大あたりだっ！！」

「それよりも小僧」

そう言つてレオンは、部屋の隅のロッカーのほうに顎をしゃくつた。

「その恰好ではあまりに見苦しい。あの中にあるものにでも着がえておけ」

「み、見苦しいってなあ……っ」

言いつつオレは、自分の今の格好を見下ろす。

男物の制服のカッターシャツ一枚。そして、さっきから床に座りっぱなしで、冷たくなっているであろうきれいで小さな足が、その先からちょこんと見えている。

さらには、時折ヒートアップしたせいか、上からも下からもボタンが外れている。

……………。

「……………そうですね、アナタサマの言うとおりですね」

いくら子供の体とはいえ、そこは異性の半裸姿。オレは真っ赤になりながら立ち上がり、誰の視線もあるわけではないのに（レオンははなっから向こうむいていたし、……あるとしたら、オレ自身？）両手で必死にはだけたシャツを寄せ、体を隠した。そして、いそいそとレオンの言ったロッカーへと向かった。

え、オンナノコ？ 魔法？ チョット待て！ 3（後書き）

部屋にライオンと二人（？）って、怖いなー。ただのライオンじゃないけど。

そして、ストックが、少なく………なって………きた。

え、オンナノコ？ 魔法？ チョット待て！ 4

「……………」

ぎい、と金属製のロッカーを開け中を見たオレは、正直に眉を寄せた。

「……………なあ、聞いてもいいか？」

「なんだ」

「……………これ、なに？」

「見ればわかるであろう、服だ」

「いや、そりゃ服なんだろうけどさ。じゃ、言い方変えよう、………
なんでこんなもんがあんの？」

ロッカーの中には、様々なもののほかに、確かに服が一着掛けてあった。その正式名称があるのか、オレは知らないけれども、この服がこういう言われ方をしているのは、聞いたことがある。

『ゴスロリ衣装』と

「知らぬ。意気揚々と黒塚の道化が持っていたのは知っておるが」

「なんでこんなもん持つてんだよあいつ!？」

「知りたければ本人に聞けばよいであろう」

「うわー聞いたいてなんだが、なんか知りたくねえ!!」

「いいから、今はそれを着ておれ」

「いやいや、こんなもん見たことねえし! 着方なんか分からねえよ! おまけにサイズだつて……」

そう言いつつも、これしかなさそうなので必死に着ようと試みた。
なんとか着れたところで、オレは一言、

「うわっ、サイズぴつたりなんだけど、なんで!? こわっ」

初めての着心地に、少し興奮。ついでに黒塚に恐怖。

……まさかこうなることを予測……してないわな、あいつも驚いていたし。え……じゃあ、何……。

「……どうでもいいが、話をしてもいいか？」

「え？」

ふんわりした袖やスカートを、物珍しく眺めていたオレはレオンの声に視線を移した。

「改めて言うが、その姿はフルミナ・レーゲンのものだ。故にお主にもその力が使えてもなんら不思議はない」

そう言つてレオンはおもむろに、ふうつと息を吐いた。

すると口元に小さな透明な結晶が現れた。その結晶はレオンの意志に沿うように、視線の先にいるオレの元にやってきた。

「それは、お主の属性の適性をはかるものだ。火なら赤、風なら緑という感じで各々色の光を発してくれる。……軽く手のひらを当て

てみるがよい」

「属性の適性……、そういえば楓の奴は光がどうか言っていたな。もしかして、それか？」

「そうだ。早く触れてみるといい」

オレはごくつと唾を飲み込んで、ゆっくりと属性の適性を調べてくれるという結晶に触れた。

さて、オレの適性とやらは一体なんなのか。

いや、オレの適性じゃないか。どちらかというと、フルミナ・レーゲンの……。

「……なんだ、これ？」

くじを引く前のような緊張を解いて、オレは結果をだした結晶を見ると、ぽつんとつぶやいた。

「おい、結局これはなんなんだ？」

驚くことに、結晶は虹色に輝き、かと思ったら薄紫色に変わったりと、はた目には結果がよく分からない状態であった。

「これ、まさかの失敗とかなのか？」

結晶を指さしながらオレはレオンに聞いた。

するとレオンは首を横に振った。心なしか、その顔には、予想を裏切らなかったという喜びのようなものが見てとれる気がする。

「失敗などではない。それがお主の適性なのだ」

レオンが操作したのか、結晶はオレの元を離れレオンの近くに浮遊

し始めた。

オレは肩をすくめて、

「適性って言ったって、それじゃあなにが適性なのか分からないだろうよ。まさか、虹色ってことは、まさか全属性にオレは適性あるってか？」

そんな反則あるわけない、と思ったオレは冗談半分でそう言う。

しかしレオンは真顔で、

「その、まさかだ」

そう言うてのけた。

オレはあっさり反則……なのか知らないが、それがまかり通ったことに、感動よりも先に複雑そうに眉をひそめた。

「……はあ。やっぱりそれって、すごいことなのか？」

そもそもの基準を知らないの、オレはレオンに確認をとってみた。レオンは小さくうなづいて、

「非常に稀有……いや、唯一と言ってもいいのかもしれない。三色や四色を操る者はいるのだが、全色操れるのは、我が見てきた中ではあるが、お主のその身体の持ち主……フルミナ・レーゲンだけであろうな」

「へ、へえ。さすがは英雄様だな。……あ、それじゃあ、あの薄紫色はなんなんだ？ 一色だけ個別で現れたやつ。まさか、あれがオレ自身の適性ってやつ？」

オレは小さな体になった自分を見下ろしたあと、不意に出てきた疑問をひっさげ顔を上げた。

「そうだな。正確に言うなら、フルミナの力をともに引き出せる

のがその属性、というところだな」

「ふーん。……でもさ、一応オレ自身はその属性なわけだな。ちなみに、薄紫色って何属性？」

オレの属性、というところに期待を持って聞いてみる。

さて、薄紫とはなんであろうか。

「薄紫は雷であるな」

「へー、雷かあ、雷ねえ……。……それって、名前で決めたわけじゃ、ないよな？」

一応、といった感じでオレは尋ねる。

オレの名前が雷牙だから雷とかだったら、あまりに安易すぎる……。

「そんなわけがないであろう。名前ではなく、ちゃんとお主の天性の適性をみているわけなのだからな」

「そ、そうだよな」

あはは、とオレは軽い笑い声を出した。生徒会室に乾いた小さな女の子の笑い声がひびく。

「……で、魔力制御が分からないから、どっちにせよ使えないと……」

「そうだな」

「ついでに言うと、元にも戻れないと」

「仕方あるまい」

はぁー、とオレはため息をつきつつ、ガシヨンとロッカーに背を預ける。

すると、ごと、と中から物音がした。

「……ん？」

いったん背を離れたオレは、物音の正体を確認すべく改めてロッカーを開けた。
すると――

「えっ、うわ――」

ガチャーン!!

大きな音を立てて、ロッカーから何かが倒れてきた。かろうじて身を反らして激突を回避したオレは、倒れてきたものの正体を確認した。

「……って」

確認した途端、オレは真っ青になる。

「あ、あ、ああ、あつぶねえなあ!!」

倒れてきたのは、オレの身長はありそうな（元の体だったら、そうは表現しないがなっ!）金属の板であった。こんなのに轢かれた日には、たまったものじゃない。

てか、なんだこの金属の板――

……いや、ただの金属の板……ではないようだ。

「……剣か、これ?」

よく見ると鞘がついているようだが、徐々に先が細くなり先はとがっているようだし、反対側には鑢らしき物も、にぎりも見て取れる。ゲームなどでよく見る剣。しかもこれは大剣のようだ。

「いや、なんでこんなもん……てか、この服といいこの大剣といい、なんだこのロッカー!」

中身が混沌としている。どうからこんなもの仕入れてくるのだろうか。

「まったく、騒がしい奴よ。少しは落ち着かんか」

「こんなのがあるこの部屋がおかしい!」

ため息交じりのレオンに対し、オレは抗議の声を出す。

「……まあ、その服に関しては何とも言えぬが、その剣に関しては大して問題ではあるまい。これからはお主も必要となるのだぞ?」
諭すようにレオンが言った。オレは眉をひそめる。

「は？ 剣が必要になるって……そういえば、お前らは魔法を何に使ってるわけ？」

「ん？ それこそ愚問であろう」
ふん、とレオンは鼻を鳴らして、

「もちろん、戦うためだ。魔物と……あるいは魔法使い同士で、な」

え、オンナノコ？ 魔法？ チョット待て！ 4（後書き）

ファッションについては、知識も文章力も低いのであまり期待しないでください。すみません。

これは次回にも言えることです。

というか、服の話が出るたびに言えることです……。本当に申し訳ないです……。

間話 着せ替え人形ちゃんですけど……っ

『もちろん、戦うためだ。魔物と……あるいは魔法使い同士で、な』

なんだよそれ……とも思うし、同時にだろうな、とも思う。

確かに、ゲームやらなんやらで『魔法』と出てきたら、その使用目的は戦いである場合がほとんどだと思う。剣なんて、戦いの道具そのものであるう。……儀礼用とかは省いて。

しかし……しかしだ。

だったら、何故この世の中にまだ魔法は存在するのか。

『もともと便利だったものだ。大衆に忘れ去られていっても、細々と伝えていったところもあるであろう。だが、理由はそれだけではない。最大の理由は、フルミナ・レーゲンの施した魔界への結界が完璧ではなかったこと、そして魔界だけではない別の世界からの干渉があるということだ』

レオンに聞いたところ、そういう返答がきた。

このことにより、もともと魔法の才能を持っていた人物が、その才能を腐らせてしまう前に、魔法がある裏社会的世界に参加してもらう機会があるという。

現実世界観では、魔法とか、魔物とか、異世界とか……そんなものは見ることも、感じることもないのかもしれないが、確かに魔法や魔

物や異世界は存在する。

故に魔法や剣が、戦いの道具としていまだに残っている……オレが知らなかっただけで、世界は『そういうもの』だったらしい。

……正直、悪い冗談だと思いたい。

「……ん？ どうしたの雷牙？」

オレがなにやら深刻な顔で思案しているのが気になったのか、楓がオレを見下ろしながら言う。

……ああ、そうそう。悪い冗談と言えば……。

「……なんでこうなった……」

オレはがくつと肩を落とした。

オレが今いるのは、洋服店であつた。

女性用の。

「だってー、その恰好だけじゃ物足りないでしょ？」

「それに下着だって必要だろうし」

「女性の嗜み（たしなみ）です」

そう言ってきたのは生徒会の女性陣。順に弥栄歩美、日向楓、水穂

瑞希の順だ。歩美の車いすは、楓が押している。

時は放課後、一回生徒会室に集まった役員たちは、オレの魔法制御訓練をする前に、オレの姿を見て暴走し始めた黒塚を黙らして、オレの女性用服を揃えることから始めることにした。

さすがにゴスロリ衣装で出歩くわけにもいかなかったので、とりあえず楓が一度帰って持ってきたお古を着こんで、ここにやってきたというわけだ。

ちなみに、ここに来たのは女性陣（そのなかにオレがすっかり入っているのは、はなはだ遺憾）だけで、あとは生徒会室で待機だ。

「あー、もうなんでもいい。なんでもいいから早くここから出たい……」

辺りは女性だらけ。売ってる服も女性用。雰囲気もファンシーなこの空間は落ち着かない。

だってオレ男だし！！

オレはため息をつきつつそう言うが、周りのテンションはそれを許してくれない。

「そうはいかないわよ。今は私のお古を着てもらってるけど、あんまり残ってないから必要になるわよ。それに、さっきも言ったけど下着だって必要でしょ？」

楓がオレをたしなめるように言う。他の二人も、うんうんと頷く。

「……あー、そうだな。確かにそうかも知れんがな……」
オレはほおをひくひくさせながら言う。

正直、ちよつと迷った。言っていいものか。もしかしたら、オレのためなんだろうかと思ったから。

だけど、もう我慢できん。
オレは口を大きく開いた。

「お前ら、オレを着せ替え人形にして楽しんでいやがるだろっ！！」

そう、さっきからオレは女性陣から着せ替え人形の如き扱いを受けていた。

最初のほうは、まだ普通の服と呼べるものを選ばれていたが、やがてそれは『衣装』と呼べるような手の込んだものになり、あげく今はドレスを着せられていた。

「えー、そんなことないよ」
朗らかに歩美が笑う。

「あ、でもー」

と歩美は一度水穂のほうを向いた。それでなにか察したのか、水穂は小さく微笑む。

「確かにー、服を選んだのは私たちだけ」

「実際に着たのは、あなたではないのですか？」

「あ、そうよね」

「ぐっ!？」

先輩二人に、見事にはめられた。オレはぶんぶん両手を横に振る。「こ、これはあんたらが持つてくるからで、別にオレは選んできたものを着ないというのは悪いなと思ってし、仕方なくだなあ……っ」

「……もしかして、こういうの着てみたかったりしたの？ 雷牙？」
楓がオレの顔を覗き込むようにながら言ってきた。オレはそっぽを向く。

「だ、だれがっ」

まあ、この姿には似合うかなー、なんて思ったりはしたが断じてオレは着たかったわけではない。……はず。

オレのその様子に、楓はしばらくいたづらを楽しんでいるかのような表情をしていたが、やがて顔を上げ近くの掛け時計を見た。

「あ、結構経ってますね。そろそろ戻りませんか？」

そう先輩方に言った。その二人も各々時計を確認（歩美は確認できているかわからないが）して、頷いた。

「え、戻るって……着てばかりで、まともに選んでないんじゃないのか？」

オレは疑問に思っ明後日のほうを向いていた顔を戻してそう尋ねた。すると楓がにこやかに、どこからか紙袋を取り出した。

「大丈夫。ちゃんと選んでよかったやつは、もう買っているのよ」
ぱんぱんと紙袋を軽くだたく。

……それじゃあ、なにか？

「と、いうことは。……その後のこれらは、みんな着せて遊んでたんじゃないか！」

ばん、とオレはドレスの胸のあたりを叩いた。

「あはは、まあいいじゃない。着たかつたんでしょ？」

「よくねえし、着たいわけじゃないっての！！」

あはは、と女性陣が笑う中、オレは不機嫌そうに顔をゆがませ、再びそっぽを向いた。

「ごめん雷牙。このあとはちゃんと訓練を手伝ってあげるから、ね？」

笑いをやめてそう言ってきた楓を横目で眺めた後、オレは、

「……着替えてくる」

試着室のカーテンを乱暴にひいた。

間話 着せ替え人形ちゃんですけど……っ（後書き）

改めて見て、すごく間話な雰囲気だったので、間話とさせていただきました。

少しでも、雷牙にフルミナっぱさを出したくて入れたのですが……どう、でしょうかね？

魔力を体験

「……さて、それじゃあ魔力制御の訓練をしようか」

「……………」

オレは何とも言えない表情で黒塚を見る。

服を買って生徒会室に帰ってきたオレは、動きやすい方が良いと思
い、さっそく買ってきた短パンスタイルに着がえ、さてやるかと気
合を入れた。

一方黒塚の奴は、オレの姿に「ボーイツシュも悪くないねえ!」と
興奮しだったが、水穂に黙らされていた。

さっきの言葉は、頭にでかいこぶを作りながらの発言であつた。

「と、いつでも最初にできることなんてそんなにないから、付き添
いは僕だけでもいいんだけどね。みんなは帰りたいかったら帰っても
いいよ」

「お、そうか? んじゃ、お言葉に甘えて」

そう言つて紅汰がそそくさとバッグを手に取り始めた。

「堅治、歩美。どうせオイラ達ができることはないんだ。帰ろうぜ」

言われた山城と歩美はほかの役員たちを眺めたが、やがて各々バツ
グを取り始めた。

「ごめんねー、お先に失礼しますー。頑張つて魔法使えるようにな
つてね」

「……頑張れ。お疲れ様でした」

「ああ、お疲れ様」

黒塚が返事をする、二人は先に出た紅汰の後を追って部屋を後にした。

「……瑞希君は帰らないのかい？」

ちらと、水穂を見ながら黒塚は言った。すると水穂は、

「会長がなにか仕出かすのではないかと、心配なので残ります」

「あはは、信用薄いな」

黒塚は苦笑いを浮かべ、今度はレオンのほうを見た。

「レオンは、弥栄君のどこについて行かなくてもいいのかい？」

「……悪いが、見届けるつもりだ」

「あれ？ 弥栄先輩のどこについて行くって……レオンはここから出られないんじゃないのか？」

オレはレオンを見ながら疑問を言った。するとレオンが、

「我は召喚されてここへきた聖獣であり、召喚主は歩美だ。そして、召喚されたものは、おおかた召喚主を守ろうとする。そのために、どこへでも召喚主について行けるよう、姿を消すことができるのだ。正確には、実体をこの世界から消しているのだがな」

「へー。……ん？ それじゃあ、なんで守りにいかないんだ？」

自分で守ろうと言っておきながら、レオンはここに残ると言った。それはおかしいだろうとオレは思った。

レオンはオレの問いに、

「それはもちろん、行くべきなのだろうが……」

と、そこで皮肉気に鼻を鳴らしてレオンはオレをみつめた。

「どこぞの生意気な小僧に言われたのだ。お主を頼む、とな」

「だから残る」と言った。オレは不審げにレオンを眺めたが、問い詰めても話してくれそうにはなかった。

……なんだ、どこぞの生意気な小僧って？

「ふーん、まあいいけど。じゃあ、日向君はどうする？」

レオンの話が終わったとみて、黒塚は楓を見て言った。楓は一度オレを見て、

「……私も残ります。雷牙が心配なので」

「そう言うと思ったよ」

ため息まじりに黒塚が言った。

「なんだよ、心配って。ガキじゃあるまいし」

「今はガキでしょう」

オレは楓を非難の目で見るが、楓は引く気はないらしい。こうなる
と楓は頑固だ。

それを知っているオレは、早々に諦めて「……勝手にしろ」とそっぽを向いた。

「……さて、とりあえずはじめようか」

一度咳払いをして、黒塚がオレを見つめてきた。

「まず君には、魔力の波動を感じてもらいたい」

そう言つて黒塚は目を閉じ、一度小さく息を吐いた。
そして今までにない、無表情のまま目を見開き――

「……っ!？」

瞬間、オレは一瞬呼吸が止まった。

まるで得体のしれない何かが、体を貫いていったような錯覚を覚えた。

「……どうだった？」

すぐに破顔して、今まで通りのにこやかな表情に戻った黒塚が、逆に表情の硬くなったオレを見つめて言った。

オレは額に冷や汗を浮かべ、顔を青くしながら、ゆっくりと貫かれたかのような感覚を覚えた胸のあたりに手を当てた。

「な、な……んだよ、今の」

「今のが、魔力の波動さ。ちょっと強めだったけどね」

にや、と皮肉気に黒塚は口元を緩めた。

「これでなんとなく分かったでしょ。魔力の波動と……魔力の大きさの脅威が」

「……ああ、そうだな」

オレは少し前傾になりながらも、黒塚をにらみつけた。いきなりなにしゃがる、とは思ったが、くやしいことに黒塚の言いたいことがはっきりと分かってしまった。

多すぎる魔力は人体に悪影響、ね。……こういうことが。

「雷牙、大丈夫？ 会長！ 私の時には最初にこんなことは……」

オレの肩に手をかけながら、楓が会長にもの申した。

しかし会長は気にせず、少し真面目な顔をしてオレを見下ろす。

「言っておくけど、今のは強めといつてもたいした大きさではなかったからね。魔封具外したそのブレスレットのほうが、何倍も強い。君には、まずそれを知ってもらいたかったんだ」

何倍も強い、というところでオレは息を飲む。オレの体が消飛ぶかもしれない、そう言われても半信半疑だったが、今のでたいした強さではないと言われたら、疑う余地がなくなってしまった。

「ま、そんなに神経張らなくてもいいよ。さっきのは軽い警告。お遊びみたいなもんさ。今からは、順を追って少しずつ制御に慣れていってもらおうから」

そうにこやかに黒塚は言うが、オレはすぐには衝撃から立ち直れなかった。

魔力を体験（後書き）

計り知れないキャラですね、黒塚は。

次回はちょっとした出来事がありそうです。

誤字、脱字、修正の指摘、感想をお待ちしています。

なんか、怪しいやつ見つけた

魔力制御の訓練を始めて三日目。

未だにオレは、一度も男の姿に戻れていなかった。

多少なりとも、魔力の制御が何たるかが分かってきて、黒塚にも「意外と魔力の才能あったのかもねー」と言われ、意外は余計だと思ったり思わなかったりしているのだが。

それでも、男に戻るのだけはどうしてもできていなかった。

まじショック。

黒塚が言うには、どうやら魔封具が、思いの外魔力を阻害しすぎて男に戻るだけの魔力をうまく捻出できていないらしい。楓や他の生徒会役員のように、一部分だけ魔力の影響で変化するのと違って、オレは言わば全身が変化の対象になっているのだ。その分オレの場合は、変化するだけでもそれなりな魔力がいるとかなんとか。

そついうことらしい。

解決策は、オレがもつと魔力の制御を正確にし、扱える魔力の大きさを増やしていくのが、安全かつ確実のようだ。

そんなこんなで、

オレは近頃、かなりブルーだった……。

＋＋＋＋

「あー、もうやだ……」

平日の昼下がり、オレは街をぶらぶらしていた。

「元に戻りたい……」

虹色に輝く金髪という、普通ではまずお目にかかれない特殊な髪をしているので、フード付きの服に帽子をかぶって目立たないようにしている。これはこれで目立つが、仕方あるまい。

「早く放課後になれよ」

誰に言うでもなく、オレはそう愚痴った。

この三日間、この格好では学校に行けないオレは、放課後まで自宅待機か生徒会室に待機という日々を送っていた。放課後になれば、黒塚や楓たちが、魔力制御の訓練に協力してくれるからだ。

逆に言えば、オレは放課後までなにもすることがなかった。一人で訓練できるほど、オレはまだ魔法が使えないから、自主特訓というのも出来ない。

しかもこの格好では、あまりおおっぱらに動けない。見た目小学生だ。昼間から大通りをぶらぶらしているとところを見られたら、面倒なことに巻き込まれる可能性がある。

故にオレは、さつきから愚痴をこぼしつつ、屋内から飛び出しつつも、古宮高校のまわりでおとなしくぶらぶらしていたのだった。

「……………ん？」

ふと、グラウンドの騒がしい音を聞きつけたオレは、ちらと端のほうからグラウンドを覗き見た。どうやら体育で陸上競技の測定をしているらしい。時間的には、昼食直前の授業であろうか。

……………ちらほらと見知った顔が見えるところからすると――、

「……………オレらのクラスがやってんのか」

女子の姿が見えないが、おおかた体育館でなにかやっているのだろう。

オレははあ、とため息をついた。

「サッカーとかそういう試合形式なものなら見てもいいんだが、これじゃあなあ……………」

あまり学校に行っていなかったせいで、いまいち一人ひとりの顔が分からないので盛り上がらない。さて、どうしたものかとオレはあたりを見回したところで、ふと気が付いた。

「……………なんだ、あいつ？」

目がいったのは体育館、さらに言うとその裏側。なにやら奇妙な人影があつた。遠いので詳しくは分からないが、どうやら体育館に用があるらしい。

こそこそしているところを見ると、どう見てもまともな用には見え

ない。

オレはグラウンドからも人影からも見えないように身をかめつつ、様子を見る。

「……よく見えないな。もう少し近づくか……?」

「声でもかけてみるのかい?」

「そんなことしねえよ、ただ様子見を——」

と、そこでオレは、ぱつと振り返った。

「まあ確かにここからは見えにくいね——」

「お、おまえっ!?!」

オレは背後を見て驚愕した。

「お前とは失礼だなー。せめて『会長』と呼んでくれないかな?」
そこには、ふふん、と鼻を得意げに鳴らしていつの間にか黒塚が立っていた。

「なんなら『鎌おにいちちゃん!』とかでも十分——」

「死んでも言わねえよっ。てか、いつの間に……あと、なんで?」

「ふふふ、禁則事項さ」

口元に人差し指をあてがって、黒塚は言った。オレは冷たい目で黒塚をにらんだ後、さっさと体育館裏の人影に視線を移した。

「……ま、僕がここに来たのはまさしくあれのことさ」

「……あの人影?」

オレが尋ねると、黒塚は頷いた。

「君はまだ分からないかもしれないけど、僕には分かるからね。」

あの人影は魔法使いだ」

「なに、まじでか!？」

オレは横に移動してきた黒塚を、まじまじと見つめた。

「うん、間違いないね。さすがに何がしたいのか分からないから、こうして目立たないところに来たわけだけだ」

人影から視線を外さずに淡々と黒塚はしゃべる。オレも改めて人影を眺め始めた。

「……うーん」

と、不意に黒塚が呻き始めた。

「……ん？」

「ああいや。今体育館は一年が使ってるんだよね」

「ああ。オレのクラスだ」

「……ということは、日向君もあの中だね？」

「そう、なるな。……それがどうした？」

「いやね」と、黒塚は少し真面目な表情をした。

「……もしかしたら、日向君が危ないかもしれないと思って」

「！？　どういうことだ？」

楓が危ないと聞いて、オレは少し声を荒げる。それに黒塚はちらとオレを見て、

「……レオンから言われたかもしれないけど。僕たち魔法使いは、封印が不十分だった魔界の扉から洩れてきた魔物や、あまり友好的でない異世界の住人と戦うために魔法や武器を使ってる。そうしないと、世界が乱れちゃうからね。僕たちはそのために魔法とかを使ってるけど、魔法使いの中には私利私欲のために魔法を使うやつも少なくない」

「そう、例えば……」と黒塚は人影に視線を戻しながら、

「人殺しの道具にしたりとか、ね」

「！？　それじゃあ、あいつ……」

オレが今にも走り出そうとしたところで、黒塚がオレの肩をつかんだ。

「放せっ」

「まあ、待ちなよ。まだあの人影がそうと決まったわけじゃない。

動くのはかえって相手を刺激して、危険かもしれない」

「んじゃ、どうしろって言うんだよ！」

オレは黒塚の腕を振り払いながら怒鳴った。しかし黒塚は冷静な口調で、

「ここは様子を見るんだ。もしあの人影がそのような愉快犯だったとしても、こんな真っ昼間、しかも大勢に見つかるようなところじゃ、動くに動けないはずだ。事を荒立てれば、それほど自分も苦し

くなるからね」

「だから落ち着くんだ」と黒塚は言った。オレは舌打ちをしつつ、落ち着くために一度目をつぶった。

「……あ」

不意に黒塚が声を出した。それに慌ててオレは反応する。

「どうした!？」

「……どうやら、逃げられたようだね」

「なにっ」

オレは、ぱっと人影がいた方に視線を移した。だが、そこには先ほどまでの人影は見当たらなかった。

オレは黒塚を見る。

「気づかれたのか？」

「……かも、しれない」

黒塚はそう言ってやれやれと首を振った。

「とにかく、今は大丈夫だったみたいだ。……でも、おそらく近いうち、あれはまた来るかもしれない」

黒塚は言いつつ、かがめていた体を立てた。

「宝条君。日向君のこと、しっかり見ていてくれないか」

「あ、ああ分かった」

オレはこく、と頷いた。楓のこととなったら、なにもしないわけにはいくまい。

「あ、でも、日向君には悟られないようにね。変に心配させたくはないでしょ？」

「もちろんだ。……了解、黙っとく」

「おーけー。それじゃ、僕は戻るよ。またお昼にね。昼には、一度生徒会室に集まって昼食にしよう。そのときは僕と君で警戒して、そのあと放課後までは、僕が何とか気を張っておくよ。宝条君も、あまり出歩かないようにね」

そう言っただけで黒塚はひらひらと手を振った後、グラウンドに沿うように歩き、手近な校舎の陰に隠れていった。

「……」

オレは自分の手のひらを見つめた。男の頃と比べると、あまりに小さく、きゃしゃな印象を受ける手のひら。

「……っ」

ぐっと体の力を入れる。すると、その手のひらから、小さくぱちつと音がした。静電気をもっとささやかにした、電気が発生したのだ。言っただけでなく、オレが自分の魔力で発生させたのである。

しかし、それだけでオレの息は少し荒くなる。うまく魔力を制御出来ていない証拠だった。

「こんなじゃ、ホント見るだけで、守ることはできねえな……」ひとり呟いて、オレはぐっと拳を握った。

「早いうちに、何としても制御がうまくなってやる……っ」

あの人影が必ずしも愉快犯で、楓を襲ってくるとは限らない。しかしオレは、なにか火がついたような気がした。

なんか、怪しいやつ見つけた（後書き）

ようやくと話が動いてきたような気がします。

誤字、脱字、修正の指摘、感想をお待ちしています。

人影を目撃してその翌日。オレはなんとか電撃を飛ばせるほどには、魔力の制御に成功していた。しかし相変わらず魔力の扱う量は大きく増えず、全属性使えるということなのだが、雷だけしか使えない現状であった。

「でも、もう少しで元の姿に戻れるんじゃない？」

そう言ったのは、横に並んで歩いている楓だった。

今は放課後訓練が終わり、帰宅をしている最中だ。

「んー、だいたいんだがな……」

昨日何もなかったとはいえ、今日何もないとは限らない。オレはあたりを警戒しながらそう言った。

その様子に楓が不審げにオレを見る。

「……昨日も言ったけど、なにか気になることでもあるの？ さっきからきよろきよると」

「……え、あ。……別に、昨日も言っただろ。この格好は周りの目が気になるって」

周りの目が気になる。この言い訳は黒塚のアイデアで、昨日から使っている。理由はもちろん、楓に無駄な心配をさせないためだ。

「えー、でももう四日目じゃない。もう慣れたでしょ？」

「ば、ばか言え！ 慣れるもんか。背格好が変わったから、視点が

違つて戸惑うことあるし……し、しかも女の体だぞ！ と、トイレとか風呂、とか……まだ慣れねえよ」
オレは楓のほうを向いて力説した。最初は勢いが良かったが、最後のほうは赤くなるのが自分でも分かったし、口調も尻すばみに弱くなった。

その様子に、楓は目を細めた。

「……あー、赤くなるって。なにかいやらしいこと考えたりしてるんじゃないの？」

「し、してねえってのー！！」

「あはは、冗談よ。雷牙は女の子の体に慣れないだけだね。……そっちの趣味があるわけではなくて」

「あ、当たり前だっ」

最後の言葉は、にこやかなのに戦慄を覚えた。それほど楓の威圧感がすごかった。

「ま、私も雷牙には早く戻ってほしいかなー。フルミナちゃんときも可愛くていいんだけど。やっぱり雷牙は雷牙で、男の子だからそう言つて楓は微笑みながらオレを見下ろしてきた。オレはちらとその顔を見たが、すぐに顔をそむけた。

「オレだつて、戻るものなら戻りたいさ。でも、魔力の扱える量がどうしてもうまく増えないんだよ」

黒塚が言うには、魔法を使えば使うほど体が魔法に慣れていって、潜在的に潜んでいる魔力を使える量が増えていく、ということらしい。

しかし、毎日のように使っているはずなのに、オレの魔力の使用量はあまり伸びていなかった。

どうやらオレは『魔法の扱いは器用』らしいのだが、『魔法使的

には微妙』らしい。魔力への慣れが遅いのだ。なにか潜在する魔力を引き出すきっかけがあれば、一気に扱える量が増えるというらしいのだが……。

「……そう、せめてなにかきっかけがあれば——」

つぶやいた、そのときだった。

ゾクッ

いきなり背後から、とてつもないほどの悪寒……魔力波を感じた。それは楓も同じだったらしい。オレたちはすぐに振り返った。

「だ、誰だてめえ……」

振り返ると、オレたちの数歩後ろに、黒いコートに怪しげな仮面をつけたやつが立っていた。

体格からして男であろうか。オレは一步前に出て、楓を背にかばう。すると楓が、

「……っ、雷牙！ あんたはまだ——」

「誰だ、って聞いてんだよ！」

オレは楓の言葉を見殺しして、男に怒鳴る。楓は何か言いたそうな様子だったが、すぐに表情を硬くしてオレの後ろで男をにらみつけた。

「……くくく」
おそろくなにかで声を変えているのだろう、耳障りな声で男が笑った。

オレは少し腰を落として、臨戦態勢になる。

「なにがおかしい！」

すると男はゆらゆらと頭を動かした。まるで亡霊のようだ。

「……俺の、正体……？ くくく……分かっているくせに」

「……なんだと？」

「見てたじゃないか……昨日、グラウンドの端から」

「っ！？ やっぱりてめえ、昨日のっ！！」

そう言つてオレは、男の目の良さ、勘の良さに驚いた。

こいつ……あの距離からオレのことに気づいていたのかよ。

あのとき、オレはやつを『人影』と言った。そうとしか見えなかったからだ。性別も、もちろん顔さえも、さっぱり見えなかった。

なのにこいつは、あの距離からオレのことが見えたというのだ。オレが見ていた、というのを知っていたから……。

「……なにしにきやがった」

オレはさらに警戒を強めて、男に尋ねた。すると男はオレのほうを向いて、

「……ガキには用はない」

「……んだとっ」

オレはカチンと来て、一歩足を踏み出した。

その瞬間――

ドフッ！！

「っ！？」

そう鈍い音がしたと思ったら、オレはいつの間にか近くの民家の石塀にたたきつけられていた。

「っがはあ！？」

「雷牙あっ！？」

楓が叫ぶ。オレは、ばたと地面に倒れ伏しながら、混乱していた。

い、一体なにが起こった……？ どうしてオレは吹き飛ばされたんだ……っ！？

「あ、あんた雷牙になにを――」

オレが倒れ伏したのを見て、楓が髪を淡い亜麻色に変化させながら男に向き直ろうとした。

だが……

「用があるのは、お前のほうだ」

いつの間にか、男は楓のすぐ前に立っていた。

「っ！？」

驚きつつも楓はすぐに距離を取ろうとバックステップしようとした。

だが、その前にがっしりと男に頭をつかまれた。

「っあ——」

楓は一瞬抵抗する素振りを見せたが、なにか魔法を受けたのか、急に体から力が抜け眠るように男のほうに倒れ掛かった。

「……………」

意識を失った楓を支えながら、男は小さく笑った。

「か、楓えっ!？」

オレは地面に倒れ伏しながら、必死に楓の名前を呼ぶ。しかし楓はまったく反応しない。

「て、てめえ……楓に、なにを……っ」

オレは石塀に寄り掛かるようにゆっくりと立ち上がる。体のあちこちが悲鳴を上げていた。

「……………」ガキには用がないと、言っただろうっ」

「う……………」るせえっ!! 楓を離せ!!」

怒鳴るオレを、男は仮面越しに見つめてくる。

「……………」くくく、そうだ……………」

男はそうつぶやくと、ゆっくりとオレのほうに、片手の手のひらを合わせてきた。

「……………」今夜、零時。昨日、俺がいたところで、待ってやる。それまで、この女は生かしておいてやろう。取り返したくば、武器でも何でも持って、やってくるがいい」

「な……………」んだとっ——」

オレが言い終わる前に、男の手のひらから生み出された真っ黒な魔

力の球が、オレの腹に突き刺さった。

オレはうめき声をあげる間もなく、少なくとも血を吐いて再度地面に倒れ伏した。

「くくく……待っているぞ」

「……ま……て……っ」

楓を抱えて立ち去ろうとする男の背後に、オレは必死に止めの声をかけるが、かすれてうまく声が出ない。そのうちゆっくりと視界が暗くなっていき、最後には男が消えるのを見ないまま、オレは意識を手放してしまった。

『光速』習得 1（後書き）

誤字、脱字、修正の指摘、感想をお待ちしています。

『光速』習得 2

夢を見た。

あれはまだ、オレの両親が家にいるころのことだ。

はつきりいつて、オレは両親が嫌いだったし、向こうもオレのことは嫌っていたようだった。

だからオレがいる家には帰ってこなかったことがしょっちゅうあったし、オレもそれでよかった。

そんなある日、オレはとなりの日向家と海に行くことになった。

オレと楓は、子供らしくめいっぱい遊んだ。

だが、事件は起きた。

オレが連れて行った岸壁から、楓が海へ落ちたのだ。

オレは慌てて別のところから海に飛び込んだ。

しかしそこは相当深く、大して泳ぎの得意でないオレは、楓を助ける前に溺れかけた。

幸い、近くにいた大人にオレたちは助けてもらったのだが、その日一日オレは落ち込んだ。逆に落ちた楓に励まされたくらいだった。

そこで、オレは思った。

もっと強くなりたい。自分が失敗しても、楓を守れるくらいに。

楓によそよそしくなったのは、そのころからであろうか。

結局、今まで楓を守るところか、傷つけてばかりだった気がする。

今だってそうだ。

楓を守ろうとして、結局楓は連れ去られてしまった。

これじゃあ、昔と変わらない。

それじゃいけないだろう、宝条雷牙。

どうすればいい？

どうするのがいい？

決まってる。

助けに行けばいいのだ。

連れ去られたと言っても、男の言葉を信じるなら、楓はまだ生きているはず。

一度目は海で守れなかった。

二度目は連れ去られるのを黙って見ておくことしかできなかった。

三度目は、これからだ。

三度目の正直だ。二度あることは三度ある、なんて言わせない。

今度こそは、守ってやる。

＋＋＋＋

オレはゆっくりと目を開けた。見慣れぬ天井が目に残る。

「……ここは？」

オレは寝たまま首を動かしてあたりを探った。

どうやらオレは、タイル張りの床に寝かされているらしい。だが、直ではない。

誰かが敷いたのか、あるいはもともと敷いてあったのかどうかは知らないが、タイル張りの床の一角には柔らかな毛布が敷かれていた。その上に、オレは寝かされているようだ。

だが、ひどく場違いなところに寝ているのは間違いないだろう。明かりが煌々とおかげで、部屋の中を一部分だが確認する

ことができた。

すぐ近くには長椅子の足が見て取れ、その奥にはどこか見たことのあるような、金属製のロッカー……。

「……まさかここ、生徒会室か……？」

オレはさらに確認しようと、寝ている身体を起こしにかかった。

「……っつ」

すると体のそこかしこから、鈍い痛みが走った。オレは痛み在眉をひそめつつ、皮肉気につぶやいた。

「……ったく、似たような体験を、つい最近もしただろうが。懲りねえな、オレも」

だが、今回は全く動けないというわけではないようだ。痛みは走るが、オレは何とか立ち上がる。

「でも、一体なんでこんなとこに寝かされてるんだ……？」

きちんと敷かれた毛布を眺めながら、オレは首をかしげた。

少し考えてみる。

……オレはあの男に手痛くやられて、そのまま気を失ったんだよな。普通だったら、誰かに見つけられたら病院に連れていかれてるはず。

……しかし、今はわざわざ生徒会室だ。

まさか、あいつがオレをここまで運んだのか……？ 病院じゃ、最悪抜けないかもしれない。だからあの男が、オレがまっすぐに来れるように、ここに寝かせつけたのか？ だがしかし何故生徒会室なのか？ いや、そもそも本当にあの男がオレを運んだのか――

「……いや、関係ないな」

オレは言いつつ首を振った。

重要なのは、ここが奴の指定場所の目と鼻の先だということだ。

「……上等だ」

オレは時計を探した。幸いにもすぐ近くの壁に掛け時計があった。その時計は、あと三十分たらずで指定の時間になることを示していた。

「かなり意識がなかったみたいだな……」

オレは、長々と眠っていたのに指定の時間前に起きることができたことに、軽く安堵した。

『今夜、零時。昨日、俺がいたところで、待つてやる。それまで、この女を生かしておいてやろう。取り返したくば、武器でも何でも持つて、やってくるがいい』

不意にあの男の言葉がよみがえった。

「……武器、か」

そつつばやいて、オレはあのロッカーに視線を移した。

今日は満月だった。

月明かりが思いのほか強く、グラウンドは真っ暗ではなく、どこか神秘的な輝きをしていた。

ザッ、と砂を踏みつける音が無音の空間に響いた。

「……時間通り。律儀だな」

「……まあ、な」

暗がりの中、男の仮面が月明かりを浴びて鈍く光る。

「……約束通り、女は生かしておいたぞ？」

「当たり前だ」

オレの金髪も、月明かりを浴びて虹色に煌めく。

オレと男は、十メートルほどの距離で対峙した。男から横に視線を移すと、体育館の外壁に寄り掛かるように、楓が座って目をつぶっているのが見て取れた。

「言いつけどおり、楓を取り返しに来たぜ」

オレは楓から男に視線を移した。男はくくく、と笑う。

「……取り返しに来た、ね。……無様にやられに来た、じゃないのか？」

「そんなもん、やってみなくちゃ分かんねえだろ？」

「くくく……一度ひどくやられたというのに、懲りないやつだ」

そう言つて男は、仮面越しにオレの顔から少し視線を下げた。

「それは、自信の表れか？」

それにオレは肩をすくめる。

「ふん、武器でも何でも持つてこいつて言つたのは、お前だろう？」

オレは言いつつ、今まで抱えていたものを抜き放つた。

「言われた通り、持つてきてやつたぜ」

オレがこの場に持つてきたのは、生徒会室のロッカーに入つていたあの太剣だった。初めて刀身を拝んだが、素人のオレでも名剣なのだろうとなんとか分かつた。

オレがその剣をひどく重そうに構えているのを見て、男はくくく、と笑つた。

「……えらく不釣り合いな武器だな。ちゃんと扱えるのか？」

「当たり前だろ……つとと」

オレは少しバランスを崩し、ふらふらと左右に動く。男がそれに小さく笑つたので、オレはむっと、顔を赤くしてだらんと剣先を下げた。

そうしてゆっくりと、剣先を自分の右のわきにずらす。

「……さあ、来いよ！」

オレはぐつと両手に力を込める。男はそれに肩をすくめたが、

「……まあ、いいだろうっ」

と、一気にオレのほうまで駆けてきた。

「っでえりゃっ!!」

男が間合いに入ったと思ったオレは、一歩前に出て体ごと大剣を横に薙いだ。ブオンツ、と重苦しい風切り音とともに、きれいな銀色の軌跡が暗闇に現れる。

しかし直前の姿勢から、オレが大剣を横に薙ぐしか攻撃方法がないということ、男は分かっていたのだらう。冷静に大剣が振られる直前にバックステップをして、大剣から逃れた。

だが、オレもそれは分かっていた。

「まだまだっ、食らえ！」

大剣の遠心力で一回転して元の向きまで戻ったオレは、左手を男に向けて、それまでに唱えていた電撃の初歩魔法を放った。

電撃は薄紫の軌跡を残しながら、一気に男のもとに走った。

「……っ」

男は予想外の反応だったのか、若干うめき声を漏らす。そのまま、土煙の中に男は消えていった。

「やったか!？」

オレはぐつと拳を握った。

だが、すぐに違和感を覚える。

……土煙が、多すぎないか？

オレはじつと土煙の先を眺めた。

すると――

「くくく……さっきのは、驚いた」

「っ!?!? ぐはぁっ」

男の声が背後からしたと思ったら、背中強い衝撃を覚えた。たまらずオレは、片膝を地面につけた。

「い、いつの間に……っ」

呻きながら、オレは背後を振り返った。

「……土煙の多さに勘付いたようだが、まだまだ、甘かったな」

そこには、全くの無傷で男が悠然と立っていた。

「くっそ!？」

オレは続けざまに電撃を放つが、男はことごとく避けた。

「……お前、先ほどから、つまらない電撃ばかり。まさか、手を抜いているのか？」

何度目か電撃を避けたところで、男は冷めた口調で言ってきた。

「な……んだとっ」

そのころオレは魔力の使い過ぎか、かなり息が上がっていた。

「雷属性の特性を、まるで分っていない」

淡々と言いつつ、男は一気に距離を詰めてきた。オレはその動きに反応できなかった。男はそのまま、膝をついているオレの腹を、遠慮なく蹴り飛ばした。

「あ、がはっ!？」

男の蹴りは想像以上に重く、小さな体はころころと砂の上を転がっ

た。

「くくく……手土産だ。少しレクチャー、してやろう」
「うぐっ」

男は面白そうに、オレを踏みつけて言った。

「雷属性は、確かに電撃を飛ばしたり、遠距離にも適している。威力も、あるからな。だが、お前のような前で戦うやつには、もっといい使い方がある」

それは、身体能力の向上。

「身体能力の、こう、じょう……？」
「基本的には、どの属性にも、その使い方はある。俺は闇を使うが、身体能力を上げているおかげで、さっきの電撃も避けていたようなものだ」

男はおもむろにオレから足をどけた。そのまますたと、オレから離れる。

「雷属性の特徴は、その身体能力の向上性能が、ほかの属性より抜きんでて、高いことだ。特に、速さに関しては、機動力重視の風属性よりも、直線距離を走らせたなら、速い。柔軟な旋回は、風属性に劣るが、まさに『光速』と言える速さだ」

歩いていた男は不意に立ち止まった。よく見ると、すぐわきにオレが手放した大剣が落ちていた。

「……かの有名な英雄、フルミナ・レーゲンも、その光速を、自在

に操っていたらしいぞ」

ゆっくりとした動作でその大剣をつかんだ男は、二、三回大剣を振った後、その細い肩に窮屈そうに担いだ。

「……重いな。……さすが……だね」

と、そこでぽつりと男がなにか地声でしゃべったが、オレのところまでははつきりとは届かなかった。

「……さて、ここで質問だ。何故、俺はこんなことを、話したと思う」

再び男は歩き始めた。さらにオレからは遠ざかる。

「答えは、お前があまりに弱く、つまらないからだ」

「……っ、てめ……え!？」

オレは男が向かっているところに見当がついて、思わず呻いた。

男は、眠っている楓のすぐ目の前に立った。

「……お前は、この女を大事そうに、守ってたな」
くくく、と男が笑う。

「この女の腕でも斬れば、お前も本気を出すか……?」

「っ！？ 貴……様あつ」

オレは体に力を入れるが、帰ってきたのは激しい痛みだけで、ちつとも体は起き上がらない。

「おお、元気になったな……じゃあ、実際に斬ったら、どうなるかな？」

「っ、がああああああつ！！」

オレは叫んだ。だが、両手を突っ張るだけで精一杯であった。

「くくく、仕方ない。十秒、待ってやる。それまでにここまで来て、女を助けてみる」

「十……九……」と男が数え始めた。オレは必死に立とうとするが、どうしても足が言うことを聞かない。

くっそ！ 動けよオレの足！！

その間も、着々と男は数える。

「っ、動けつつつてんだろおおつ！！」

悔しさのあまり、オレはドカンと拳を地面に叩きつける。
と――、

『焦らないで』

声が聞こえた。

『落ち着いて。君なら、出来るから』

不意にブレスレットに違和感を覚える。

『私の認めた、君なら……』

ブレスレットから、魔力が流れてくる。

『最後まで、私のことを助けようとしてくれた、あなたなら——』

バチンッ、とすぐ近くで電気が弾けた。

『光速』習得 2（後書き）

戦闘シーンは本当に描写が難しいです。少しでも臨場感が出ていた
らいいなあ……。

次回は、主人公の本領発揮です！ ……といっても想像しやすいで
すがね。

そしてストックと展開の都合上、短くなるかもです。

誤字、脱字、修正の指摘、感想をお待ちしています。

10 / 5 少し文章を編集しました。

『光速』習得 3

「……くくく、時間だ」

男は急に動かなくなった雷牙から目を離し、肩に担いだ大剣を握りなおして、楓のほうを向いた。

「……いくぞ」

そう言つて男は大きく大剣を振りかぶつた。
そして、

「……っせいやつ！」

振り下ろした。

だが――

ザクッ

振り下ろされた大剣は、楓をとらえることができず、地面を深く削つた。

「……さすがに、速いな」

男の目の前から、楓は消えていたのだ。

楓は――

「……おせえよ、てめえ」

遙かに離れたところで、
雷牙に抱えられていた。

＋＋＋

不思議な感覚だった。

頭の中に声が響いたと思ったら、ブレスレットから魔力が流れ出した。

その直後には動き出していて、次の瞬間には楓を助け出して、男から離れていたのだ。

ありえない速さだった。

下手をすれば、オレの金髪と相まって光の軌跡に見えたかもしれない。

だが、

そのなかでオレは鮮明に感知することができた。

風を切る音や流れる風景を、この耳でしっかり聞き、この目でしっかりととらえることができた。

オレはなんとなく、悟った。

オレはこの瞬間、『光速の世界』の住人になったのだ、と。

「くくく……ようやっと本気を出したか」

「ああ、遅くなつて悪かつたな」

オレはゆつくりと、楓を近くの壁に寄り掛かせた後、男のほうを向いた。男を軽くひと睨みする。
小さく詠唱。

「……っ」

そして男の顔めがけて電撃を放った。

「……なんの、つもりだ……っ!？」

男は首を動かしただけで雷撃を避けた。

しかし、息を飲む。

いつの間にか手に持った大剣が消え失せていたのだ。
ついでにオレもいない。

それはそうだ。

だって――

「これを取り返したかっただけだ」

オレは、大剣片手に男の背後に回っていたからだ。

「……この短時間で習得したか。器用だな」

「器用が取り柄らしいからな」

軽口を言いつつ、オレは両手に大剣を持ち、最初と同じ体勢になった。

「……はあっ!!」

オレは気合の声とともに一步踏み出す。
そして、

一瞬で姿が霞んだ。

「……む」

と思ったら、男の黒いコートの腕の部分がスッパリと切れて、男の腕があらわになっていた。

「……うまく避けるもんだな」

オレはその一瞬で、楓のいる位置まで移動していた。

「……でも次は、外さねえっ」

オレは再び大剣を構える。

その時バチバチ、とオレの周りで電気が弾けた。

男はその様子を見て、ひどく落ち着いた様子で、片手を顎に当てながら言った。

「……さしずめ、虹色の電撃姫、というところか？」

それにオレは、むっと眉を寄せる。

「姫じゃねえ、オレは男だっ」

この男に言っても意味はないのだろうが、オレは力説した。

男はオレの様子に、男はしばしオレのほうを、まじまじと見つめた。

そして――

「っ ははははは！ あー ははははは！」

盛大に笑い始めた。

「な、えあ……え？」

オレは突然の男の豹変ぶりに、かなり戸惑う。

「え、なんだよ一体……」

「まったく、馬鹿なことをするからだ」

と、不意に後ろから新たな声が聞こえた。

「っ！？」

慌ててオレは、その声の主を確認すべく振り返った。

そして、

驚愕。

「まったく、悪趣味な呼ばれを受けたと思ったら、どういっつもりだこれは？」

「お前、氷室勲也っ!？」

オレは声の主を指さしながら、大声を出した。
なんと、オレの後ろに立っていたのは、病院で会ってそれっきりであつた、氷室勲也であつた。

「ん？　なんで俺の名前を知ってるんだ？」

勲也はオレを見下ろしつつ不審げに言った。

「なんでって、それは――」

とそこでオレは、ふと気が付く。

あ、そうか。こいつは知らないんだ。オレが――

「そりゃ、知ってるよ。その子は先日、君に直々に名乗られた、宝条雷牙君だからね」

「えっ!？」

突然、男が声変えをやめ、地声で話し始めた。その声を聴き、オレは耳を疑う。

え……てか、その声その口調は……。

「……よく分からんが、とりあえず先にその悪趣味な仮面をとれ」

「はいはい、君ならそう言うと思った」

勲也が言うつと、男は意気揚々と仮面を取り始めた。

……おいおいおい。仮面の怪しげな男って、まさか……。

「いやー、仮面って結構蒸れるね」

「か、会長っ!?!」

驚くべきことに、仮面の下は、にこやかな顔をした会長こと黒塚鎌、その人であった。

『光速』習得 3（後書き）

久しぶりな勦也の登場です。

そしてびっくり展開、のはず？

誤字、脱字、修正の指摘、感想をお待ちしています。

いあ、オレはこついう収束の仕方は望んでないぞ！ 1

「な、え……はあっ!？」

「あー、混乱してるね宝条君？」

「あ、当たり前だっ」

黒塚に言われるまでもなく、オレは混乱していた。

さっきの仮面男が、会長だった……!？

「え、じゃ、じゃあ待て。なにか？ さっきまでオレを蹴ったり踏んだり、楓に剣を向けたのも全部……」

「そ。全部僕なのでした」

「いやー、なかなか迫真の演技だったでしょ？」とうれしそうに語る黒塚。

それにオレは……、

「……て、てめえ！ よくもやってくれやがったなオイ!!」

電光石火のスピードで黒塚に殴りかかった。数十メートル離れていた距離が、一瞬にしてゼロになる。しかし黒塚は、驚くことにひらりとかわし、むんずとオレの細腕をつかんだ。

「ごめんごめん。でも、新しいことが出来るようになったじゃない」

「そういう問題じゃねえ！ 放せっ、泣き言言つまで殴ってやる！

」

「うわーん、許してよー（泣）」

「だ・ま・れっ!!」

「……なんなんだ、一体」

うがー、と暴れるオレをにこやかにあおる黒塚。その様子を、実に微妙な目で見ていた勲也が口を挟んだ。

「あー、うん。説明するよ。たぶんもうすぐ……」
「うがーっ！ あ——」

不意にオレは、体から力が抜けるのを感じた。ガクツと膝が折れる。

「おおっと。……ね？」

「……趣味の悪い終わらせ方だな」
「な、なんだ……？」

オレは黒塚に支えられながら（ぎゃー！？ 何かそれそうという女の本能っぽいのが……っ）困惑の表情を浮かべる。

「あれだけ一気に魔力を使ったでしょ？ その後遺症だね。今は体にまったく力が入らないはずだよ」

してやったり、みたいな口調で黒塚は言った。

「……くっそう……」

オレはふるふると震えながら、精一杯黒塚を押した。そうすると、オレの体は黒塚から離れ、代わりに背中から勲也のほうに倒れこんだ。勲也は少し驚いた様子で、オレの両肩を持った。

「お、お前に抱えられるくらいなら、こいつのほうが、ましだ」

熱病にかかったかのような気怠さのなか動いたせいで、頬が上気している。それでもオレは、へへ、と黒塚に皮肉気に笑って見せた。
「振られたな、鎌」

勦也も意地の悪そうににやけて加勢する。

それに黒塚は、

「……ぐっはあっ!？」

血を吐かん勢いだった。

「……く、魔力の使い過ぎが原因で頬が上気しているのは、わかってるはずなのにっ」

苦しそうに胸と頭を抱える黒塚。

「……そんな顔でツンデレされたら、ときめいちゃうじゃないか!」
「もう黙ってるよお前!！」

だるいのをそっちのけでツッコミを入れてしまった。

「……気持ちわかるが、お前も大人しくした方がいいぞ……」
反動でさらに力が抜けたオレに向かって、勦也が嘆息まじりに言った。

「……とりあえず、ここにいても埒があかない。鎌、一旦生徒会室に行くぞ。どうせ開いてるんだろっ? お前はそこの女子生徒を担いでやれ」

ときばきと勦也が指示をかける。黒塚はいまだにぶつぶつ言いなが

ら、言われた通りに楓のほうに向かう。

「さあて、ちょっと失礼しますよ、お姫様？」

「なに……って、うわ」

勳也はそう言つと、オレを抱えなおした。

「ちょ、おま、これ……っ」

「ん？　どうかされましたか、お姫様？」

抱えなおし、オレはいわゆるお姫様抱っこをされるはめになった。

突然のことと、初めてのことで、緊張してオレは腕を縮こませる。

「いやこれ、は、恥ずかしいだろ……？」

オレは勳也の顔を直視せず、そっぽを向きながらつぶやいた。
勳也は、ふっ、と鼻を鳴らした後、オレの耳元でささやいた。

「……ずいぶんと女らしくなったな、雷牙？」

「んなつ！？」

オレはささやかれたとき息のかかった耳を押さえて、勳也を見た。
そんなつもりはないのに自分の顔が赤くなるのが憎らしい。勳也は
そんなオレにウィンクをして、

「なにがあつたのか、じっくり聞かせてもらっぜ？」

勳也らしい、自信に満ちた口調でそう言った。

その後、オレたちは勲也に今さっきの経緯についてと、オレがこの姿——フルミナ・レーゲンになったことについて、生徒会室で話すことになった。途中で楓も起きてきたので、楓もその話し合いに参加した。楓は、勲也がいることに非常に警戒したが、オレが説明すると、しぶしぶ口をつぐんだ。

説明は、最初はオレ視点のものから始まったが、それが終わったとみるや黒塚が補足を入れてきた。

驚いたことに今回の事件はあの人影騒動から、すべて黒塚の自作自演だったらしい。人影は黒塚の作った幻影。それを愉快犯とオレにほめかして、ダシに楓を使い、あとはオレが魔力を爆発させるような状況に持っていくだけ……。

「なんでそんなはた迷惑なことしたんだよ？」

そうオレが聞くと黒塚は、

「言っただじゃない。君にはなにかきつかけが必要だって」

さも当然のようにそう返してきた。

「おかげで『光速』が使えるようになったでしょう？」

「だからってなあ……っ！」

「あ、そうだ。宝条君、ちょっとブレスレットを見せてくれないかい？」

そう言つて黒塚は遠慮なしにオレの左腕をつかんだ。オレは抵抗しかけたが、魔力の使い過ぎによるだるさがまだ残っていたので、仕方なく断念した。

黒塚はまじまじとブレスレットを眺めた後、一瞬にやっとなげな笑みを浮かべた後、何かを唱え出した。するとブレスレットが独りでに輝き始めた。

輝きは黒塚が唱えている間中続き、詠唱の終わりとともに、光を失っていった。

「はい。できた。これで今までよりは魔力の融通が利くようになったと思うよ」

「え、ああ……ん、ほんとだ」

確かに黒塚の言った通り、魔力の量が増えた気がする。

「へえー、分かるんだ。もうそれなりに制御は習得したんだね。そこまでくれば、基本的な制御訓練も不要かもね」

しかしオレは聞きたいことがあった。

「おい、待ってくれよ。オレはまだ男に戻る方法分からないんだが

……」

「ああ、そのこと？」

黒塚がよくぞ聞いてくれましたと言わんばかりに、得意げに言った。

「残念ながら、それはしばらく先になりそうなんだよねー」

「はあ！？　なんで？」

オレはガタンと座っているイスを鳴らしながら、身を乗り出した。

「いやー、実は予想以上に君の変化は魔力があるようだねー。確かに君の場合、変化という『なりきり』よりも、むしろそのものに『なっちゃった』感が強いんだよね。俗にいう転生の一種とも言ええられるほどのね。戻るのは、魔封具つけてる段階では難しいとい

うか、無理というか……」

「まじかよ……」

「まじだよー」

がつくりと、オレは肩を落とした。

「な、何とかならないんですか、会長？」

楓がすぐるように黒塚に言う。

だが、黒塚は首を振った。

「んー、正直言うと無理だね。力づくでやろうとしても、宝条君の体が持たない。魔封具が取れるように強くなるまで、辛抱するしかないね」

「そう、ですか……」

がつくりと、楓も肩を落とした。

「……うれしそうな顔してるな、鎌？」

ぼそつと勲也がつぶやく。黒塚はそれに無言の笑顔にやっで答えた。

くっそ、人の気も知らないでこの野郎は……っ

「……ところで、なんで俺までよばれたんだ？」

勲也が黒塚を責めるように言った。確か勲也は、黒塚に呼ばれたと言っていたが……。

「ん？ なんだい勲也君。君ともあろうものが。それは愚問じゃないのかい？」

「……そうだな。愚問だっかな」

黒塚が皮肉気に言うと、勲也はなんとなくその返答を予想していたのか、責めはせず嘆息交じりにそう言った。

「どうするつもりだ？」

「うん。具体的には、君をこの学校に転入させるつもりだよ」

「その……」と黒塚はおもむろにオレを指さして言った。

「フルミナ君と一緒にね」

いあ、オレはこついう収束の仕方は望んでないぞ！ 1（後書き）

なんで勅也と黒塚は親しげなの？ というのは次回ちよろつと説明を入れたと思います。ほんとちよろつとの予定で、詳しい話は追々どこかの段階でできたらいいなと思っていますが。

誤字、脱字、修正の指摘、感想をお待ちしています。

いあ、オレはこういう収束の仕方は望んでないぞ！ 2

「……と、言うわけで今日からこのクラスで一緒に学ぶことになった、氷室勲也君と、留学生のフルミナ・レーゲン君だ」

『よろしくお願いします……』

黒塚の騒動が解決した翌日。オレと勲也は、真新しい制服を着こなして、一年二組の教室の前に立っていた。

「（どうしてこうなったんだよ!?）」

「（知らん。生徒会に入るには、ここの生徒である必要があるんだとよ。文句は鎌のやつに言ってくれ）」

「（もう大いに文句は言ってきたよ！ でもなんか無駄に準備はいいし、口車に乗せられて引くに引けなく……て言つか、お前あいつと同期って聞いたぞ！ なんで一年なんだよ!）」

「（一年の時に一度ここを去ったからだ）」

「（じゃあ、前はここの生徒だったのかよ！ ……の割には、先生は誰もお前のこと知ってなさそうだったぞ?）」

「（……どうせ鎌のやつがなにかしやがったんだろうさ）」

「あー、君たち。君たちの席はあっちだ。ほれ、行きなさい」

ひそひそと話し合うオレたちの背中を、担任がせっせと押した。オレたちはしぶしぶ後ろの方の席に座る。

「えー、もうひとつ連絡だ。今まで一緒に……といってもそれほどいなかったが、宝条雷牙君は、親戚の関係上海外に行くことになったそうだ」

「は、はあっ!？」

オレは思わず大声を出して立ち上がった。すると、一気に視線が集まってきたので、「あ……」と小さく呻いて、真っ赤になって座った。

「あー、いいかね? しかし、本人や親戚たつての希望で、一応この学校に籍は置いておいてほしいとのことだそうだ。だから宝条はしばらく休学状態になるということを知っておいてくれ」

「……なん、だつて……?」

オレは今知った情報に驚愕した。

いや、宝条雷牙はここにいますよー!! て感じた。

「……鎌の野郎、また適当なことをしたな」

ぼそつと、オレの後ろの席から勦也が言った。

「……やはり犯人はあいつか」

オレは頬を怒りでびくびくさせる。

あの野郎……すぐにでも張り倒しにいつてやろうか……っ!

「……そういうばお前、足は届いてるのか?」

不意に勦也が面白半分な様子で聞いてきた。

それにオレは小声だが、堂々と言った。

「……届いてないよ、悪いかっ!」

はつきり言つて、小学生以上には見えない背格好だ。高校生用のいすが合うわけがない。

「よくもまあ、そんなナリで入学できたもんだな」

「……自分のことだが、オレも不思議で仕方ないわ」
ため息交じりにオレはつぶやく。

合わない、といえば、この制服もそうだ。

黒塚からもらったこの古宮高校の女子用制服は、市販のサイズの一番小さいものよりさらに一回りほど小さい特注品らしい。それでもすがすがしいほどに袖は余っている。ハンガーに掛けて拝んだ時には、こんな小さいの入るかよとか思った過去の自分が羨ましい……。

「しかしまあ、やはりこういうことになったか」

オレが沈んだ顔で制服の袖を眺めていると、やれやれと言った感じに勦也が言った。

「……どういうことだ？」

「うすうす予感はしていたんだ。初めてお前を見た日からな。お前には魔法の素質があると気づいた時に、もしかしたら鎌のやつ、俺ごと生徒会に引き入れるんじゃないかってな。だからあの時病院で言っただろ？ またな、て」

そうか、あのときの『またな』はそのためのものだったのか……。

「……同期だけにしては、やたらあいつのこと分かってるみたいだな？」

オレが勦也の話ぶりに疑問を呈すると、「そりゃあな」と勦也は言った。

「あいつとは、昔からの付き合いだからな。腐れ縁ってやつか。ついでに言うと、瑞希のやつも俺のことは知ってるぜ」

「へえ、そうだったのか。道理で親しげだと思った」

「あいつはホント、底知れないやつだよ」

「……分かる気がする」

オレは苦笑いを浮かべながら同意する。

「ま、なんにせよ、だ」

と、勦也は拳をオレのほうへ突き出す。

「これからよろしくな、『フルミナ』？」

それにオレは、口元に笑みを浮かべながらその拳に自らの拳を合わせる。

「……いやだからオレは男だつての！」

いあ、オレはこついつ収束の仕方は望んでないぞ！ 2（後書き）

第一部完了です。

ということなので、これの投稿と同時に章を付け足しました。

ここから先のストックはほぼありません。故に毎日更新とはいかないかもしれません。一週間以内には更新できるよう頑張りますので、ご容赦してください。

誤字、脱字、修正の指摘、感想をお待ちしています。

序章

とある国のとある森。

町はずれにあるその森で、ある日世間を騒がす恐ろしい事件が起こった。

最初に目撃したのは、夜行性の動物を観察しようとして、深夜森に入った動物学者らの一行である。

その森は、貴重な動物が生息すると同時に、ここ数か月頻繁に新種が発見されている、学者たちの間では非常に注目されている森であった。しかし、野盗の温床としても知られていたところであったので、学者たちは腕に覚えのある護衛たちを連れていた。

その日はきれいな満月であった。

学者たちは、野盗の存在に緊張を隠しきれないでいたが、それに負けない好奇心を持っていた。

しかし、観察は思いの外はかどらなかった。新種どころか、本来見えるべきであろう個体にも出くわさない。動物たちが全くないなかったのだ。

学者たち一行は、なにかおかしいと思い始めた。

しかし高い研究費を払い、このような辺境の町まで来て、あげく護衛まで雇ってきたのだ。スケジュールの関係上、次の満月の日まで待つことはできない。チャンスは今日しかないのだ。さすがに手ぶらでは帰れない。

そこでふと、学者の中の一人が仮説を立てた。

もしかしたら満月の日限定の行動なのかもしれない。
そのように考えると、がぜん意欲がわいてきた。

絶対になにか発見してやる。

そう考え、学者たち一行は徐々に奥へと進んだ。

そこで、突然見たのだった。

おびただしいほどの死体たちを。

それはもう、まさに地獄のようだったという。

数十体にも及ぶ死体の中には、動物だけではなく、森を根城にしていたであろう野盗たちのものもあった。

一行は、事件性の強さに一度足を止めたが、風に誘われるように、さらに先へと進んだ。

そして一番奥の、不思議と木々が立っておらず、月明かりがまっすぐと入るその空間に『それ』はいた。

『それは、細身の少女であつた。

しかし、一目でただの少女ではないことも分かつた。

少女の足元には、先ほどとは比べ物にならないほどの死体が転がっていた。動物も、人間も関係なく殺されていた。少女も、元の服がどうだったか分からないくらいの返り血を浴びていた。

月を眺めていた少女は、一行が現れるとゆっくりと振り向いた。少女の顔は、まだ幼かった。十五、六歳程度だろう。風に揺れる緑の髪が、彼女を森の精霊のように見せる。

だが可憐な見た目に反し、少女はひどく血に飢えた瞳をしていた。

護衛の一人が、危険を感じ手に持っていたライフルの銃口を少女のほうに向けた。

少女は呆けたようにその銃口を眺めていたが、

やがて、

笑った。

その後のことは、よく覚えていないという。数瞬後には、少女がいつの間にか持っていた小さな二丁拳銃に、学者の前で壁を作っていた護衛たちが、すべて殺されていたというのだ。

「っあはははははははははは！！」

狂ったように笑い出した少女。

学者たちはなりふり構わず逃げ出した。少女は笑いつつも、背を向ける学者たちを無遠慮に撃ち抜く。その死の嵐の中、たった一人、運よく町まで逃げる事ができた。

少女は町までは追つてこなかった。

生き延びたその学者は、顔を蒼白にしながら言った。

『あれは、魔物だ』と――

序章（後書き）

第二部『ガンスリンガー』の序章です。

一発目からなんとまあ……ひどい話です。

誤字、脱字、修正の指摘、感想をお待ちしています。

新たな日常風景 1

キンコーンカーンコーン

「……それじゃ、今回はここまでにするか。日直、号令を」
「……あ、オレだ。えーっと……きりーっ」

オレは可愛い声でそう言っつて、真っ先に立ち上がる。するとオレの声に続いてぞろぞろと他のクラスメイトも立ち上がった。そうなる
と、オレの姿は前から確認できなくなるらしい。

……小さいから。

「きょうつけー……れー」

『ありがとうございますたー』

その言葉が終わった途端、教室内は雑談につつまれる。

「……あー、号令慣れないわ」

本日四回目なのだが、オレはそう愚痴りつつどかっと座った。さっきまでずっと座っていたから、まだまだ温かい。

……そしてなんだか座り心地が悪かったので、オレは軽く腰を上げて、イスとの間にスクートを挟んでから座った。

「まあいいじゃねえか。お前の声は高くて響くからな」
「なりたくてなったわけじゃないって言ってるだろ？」

上から降ってきた言葉に、オレはすぐ後ろの席で立っている男を非難する眼で見上げた。

「そうだったな」

そう言いつつ、二枚目の顔に似合うシニカルな笑みをしたのは、氷室勲也であった。勲也はオレの後ろの席であり、近いので『素の口調』で会話ができた。

「さて、飯の時間だ。購買に行くか、雷牙？」

勲也も勲也で、周りが聞いていないと思ったら、オレのことをフルミナ・レーゲンではなく、男の時の本名、宝条雷牙で呼んでいた。

オレは頷き、すくつと立ち上がる。

「おーけー、了解。えーっと……か、楓ー、『わたし』たちの席を取っておいてねー！」

「うん、わかったわ」

オレが少し離れたところにいる楓にそう言うと、楓は微笑みながら頷いて、いそいそと自分のバッグから弁当包みを取り出した。

オレは楓のその様子を見ながら、さてと勲也のほうに向きなおる。その時に、光の加減で虹色に輝く髪と制服のスカートが、かわいらしく揺れた。

「慣れたもんだな」

オレの言動をなんとなく見ていた勲也が、一言つぶやいた。オレは複雑な顔で勲也を見上げる。

「……の、ように見えるか？」

「ああ」

その一言にオレは軽いショックを覚える。きつと『慣れたもんだな』の先には少し言葉が省略されているんだろうなと思ったからだ。

たぶんその言葉を補うと、このようになるのだろう。

『女の身振りに』慣れたもんだな。

.....。

「ははは。大変だな、『フルミナ』？」

「う、うるさい。行くぞっ」

オレは赤くなりつつ、そっぽを向いて勦也の前でさっさと歩きだした。

勦也とオレが転入（男のオレは、知らないうちに海外へ渡ったらしく長期休学。もはやジョークの域だ）してから、一か月が経っていた。

その間に衣替えが始まり、半そでのカッターを着た生徒たちが見られるようになった。そしてまた、その一か月でオレたちは、それなりにクラスに馴染むようになっていた。

勦也は、もともとカリスマ性が高く、冗談も通じるやつのようなので、すぐにクラスの頼れる兄貴みたいなポジションを確保した。同時に昔オレが俳優男と称したように顔もよいので、女子にはもはやモテモテであった。転入初日で告白してきた女子がいたくらいだ。断ったらしいけど。

一方オレは……

「あ、フルミナちゃんだ！ こんにちは」

「きゃー、今日も可愛いわね！」

「ねね、私の妹にならない？」

ある意味、女子にモテていた。

「え、ああ……いや。あの、購買に……」

「きゃー、照れてる照れてるー。赤くなっちゃってかわいいー！」

そう言つて、二年生の女子三人組は、オレの頭をしこたま撫でる。

「じゃあね、フルミナちゃん！ それに、勲也様も！！」

オレを撫でることに満足したのか、三人組は颯爽と立ち去って行った。

「モテモテだな、雷牙」

皮肉気に勲也が言う。オレはじろ、と勲也を見上げた。

「……あれはただ単にオレで遊んでるだけだろっ」

そう、あれは断じてモテているわけではない。見た目小学生のオレを愛玩動物かなんかと間違えてるんだっ！ 毎日毎日飽きもせず頭を撫でまわしやがって。それになんだよ、妹にならないかって……。

「……てか、お前こそなんだよ。『勲也様』て？」

オレは反撃のつもりで勲也を問い詰めた。

すると勲也は、お得意のシニカルな笑顔を浮かべた。

「ふふん、まあそうひがむな」

「ひがんでねーよ！」

この一か月で、オレの周りにはこんな風景が作られているのだった。

新たな日常風景 1（後書き）

序章とは うってかわって 平和感

誤字、脱字、修正の指摘、感想をお待ちしています。

新たな日常風景 2

「やあ、一年生諸君」

「ようこそ」

放課後、オレと楓と勲也は三人で生徒会室に足を運んだ。生徒会室にはまだ三年生の二人と、レオンしかいなかった。

「あれ？ 二年生の皆さんはどうされたんです？」

楓が黒塚に尋ねる。

「ああ、弥栄君と山城君は掃除。夏目君は、二人を待って友人とおしゃべりしてるみたいだよ」

「……いつも思っただけど、なんでそんなタイムリーなことが分かるわけ？」

オレは疑わしげな目で黒塚を見る。黒塚はオレの視線を真っ向から受けながら、

「あつはつは、企業秘密さー」

平然と適当なことを言った。どこの企業だよ。

「ま、二年のみんなが来るまで会議は始めないから、適当にくつろいでてよ」

そう言つて黒塚は手元の雑誌に目を落とした。なんとなく気になつて、オレは遠くからその雑誌を覗き見た。

「……」

とたんにオレは顔をしかめた。

黒塚が読んでいたのは、コアなアニメ雑誌であった。

「? 一緒に見るかい?」

「けっこうです」

軽く雑誌を上げてこつちを見てきた黒塚に、遠慮なく白い目を向けた後、さっさと視線を外した。

「小娘」

さて何をしようかと、オレがきよろきよるとあたりを見回していると、レオンの奴が小娘——オレのことを呼んだ。

「……、なんだよ?」

オレは何となく嫌な予感を感じながらレオンのほうを向いた。

レオンはふん、と鼻を鳴らして、

「お主は訓練でもしておけ」

「あーあ、言うと思ったよ!」

予想通りの言葉が来て、オレはやけっぱちに怒鳴った。

こうして空き時間さえあれば、レオンがオレに魔法や戦闘の訓練を強要してくるというのは、ここ最近の傾向だった。

「だからなんでオレばかりに言うんだよ!」

「ある男に頼まれたからだと言っておるであろう」

「ある男って誰だよ!?」

「何度も言うように、いずれ分かる」

うぐぐ……とここでオレが苦い顔をするのも含めて、いつもの流れであった。

「いいじゃないか、どうせ暇なんだろう？　俺が相手になってやるから」

オレとレオンの言い合い（主にオレの、はたから聞けば微笑ましい声の怒声を中心だが）を見ていた勅也が、ぽんとオレの肩に手を置きながら言った。

「……まあ、いいけどさ」

オレもしびしび了承する。オレも自分で分かっているからだ。

今のオレは全然強くない、ということ。

確かにオレは、黒塚の自作自演の騒動の結果、フルミナ・レーゲンも使っていたという身体能力向上系の移動術『光速』が使えるようになった。

ただその『光速』も、長時間持続させることは出来ないし、まだオレもその『光速』に慣れてないせいか、細かい制御が出来ないでいた。ただ直線距離をすさまじいスピードで走り抜けるだけ。あの怪しい仮面の男——後に黒塚と判明したが——と戦った当初は、なにか神経が研ぎ澄まされたような感じで、細かい制御も出来ていたのだが……。あの時の様な感触はあれが最初で最後であった。

そんなのだから——

「そんなのだから、お前の動きは読みやすいんだよ」

「よし、とオレの右腕が勦也につかまれる。

「あ——」

オレは腕をつかまれた後、へた、としりもちをついた。

オレと勦也は今、生徒会室とは違う場所に移動していた。

その場所は……地下だった。

何故か生徒会室には、隠し扉みたいなものがある。

その先には、いくら強力な魔法を行使してもびくともしない強固な結界が張り巡らされている、ただっ広い地下空間が存在していた。

なんでこんなものがと最初は思ったが、聞いてみると納得した。

今の世の中、魔法は日陰者である。秘密裏に訓練すると言っても、表の世界には場所がないのである。

それ故に、このような常人の目が届かない隔離された空間が存在するというわけだ。

……こんな空間、地下に掘っておいて大丈夫なのかよ……そう思わなくもないが。

その地下空間の、冷えた床に女の子座りしながら、オレは息を切らしつつ勦也を見上げた。

「し、仕方ない、だろ。いきなり視界が、変わるんだから……」
オレの返答に、勦也は眉をひそめる。

「それはそうだろうが、慣れる。その感覚はお前にしか分からないんだからな。……あと、もう一つ言わせてもらうとな……」
言いつつ、勳也はオレの腕をぐいっと引き上げた。オレはその反動を借りて、よっこらせと立ち上がる。

「お前、剣の扱いが雑すぎる。雑なら雑なりに、もっと当てる努力をしろ。全然当たらない軌道を通っていたぜ？　ちゃんと素振りしているのか？」

「い、一応……してるけどさ。なんかこう、この年で木刀ぶんぶん振り回すのが、は、恥ずかしいというか……」

オレは右手の人差し指で頬をぼりぼりとかく。その手には、オレの身長に合うように少し短めな木刀が握られている。同じものが左手にも握られている。

「いふなれば、オレは双剣使いであつた。」

「振り回すからだろうが。ちゃんと振れば、それなりに見栄えはするぞ」

「それは、お前が普通に木刀一本しか使わないからだろ？　オレなんて……木刀二本とか、お遊びにしか見えねえよ。なんでオレは双剣使わなきゃいけないんだよ？」

「お前自身も賛成してただろ。それに……双剣、いいじゃねえか。その身体の真の持ち主は、嵐のように敵を切り刻んだらしいぞ？」

「そりゃ、そうだけど……」

オレが双剣を使う理由は、まさにそれだった。

フルミナ・レーゲンの体と能力を引き継いでいるから。

最初にオレに双剣を推したのは、レオンであった。それに黒塚が賛成し、そして過去のオレも『あー、双剣格好いいかもー』なんて能天気なことで賛成したので、その日からオレは双剣を使えるように訓練をし出したのである。

ところが、これが意外と困難な武器であることが、数日で発覚した。

まず第一に、力が入らない。

片手で重いものを長時間扱うので、いくら魔法で身体能力を上げたところで、握力がもたないのだ。

第二に、攻撃が軽い。

片手剣を二本扱うのだ。そのためには、どうしても一本一本の武器を軽くせざるを得ない。それにとまって、武器の重さを利用した威力の高い攻撃ができないのである。

そして一番は、なんといっても両手のコンビネーションの難しさだ。うまく両手の剣を扱えないで下手な姿勢になると、かえって身を危険にさらすことになる。しかしうまく扱うと、小回りの良さからくる反応不可能な連撃に加え、多方向からの攻撃を弾く鉄壁の防御を得ることができる。まさに使用者の力量とセンス、そしてなにより努力が問われる武器だ。

オレは何度も別の武器にしたいと申請したが、いざ他の武器を扱うと、なにか違和感を覚えるのだった。

なんだかんだいっても、オレがしっくりくると感じる武器は、双剣だけのようだ。

「……だけど、なんかこう……うまく扱えないんだよな。体はフルミナので、実際はオレが操ってる形だから、やっぱりオレ自身のほ

うに才能がないってことなのかな？」

オレが軽く双剣を振りながら若干沈んだつぶやきをすると、勲也がさも当然のように言った。

「そんなことはないだろ。俺はお前には双剣を扱う才能はあると思うぜ」

「……なんで？」

オレが信じられないという表情で見ると、勲也は「だってよ……」
と言いつつオレの頭に手を置いた。

「お前はまだ扱い始めて二週間程度だろ？ その割には、なかなかうまい防御をしていると思うぜ俺は。攻撃のほうはさっぱりだけどな」

「……頭なでるな」

オレは褒められたのか、けなされたよく分からない勲也の発言に苦い顔をしながら、とりあえず頭にある勲也の手を払いのけた。

「ははは。そうだな、俺が思うにだが……」

そう言つて勲也は、右手に持っていた木刀を後ろ手に放り投げた。木刀はくるくると勲也の背後を回転しながら場所を移し、肩越しに伸ばしていた勲也の左手にすっぽりと収まった。そのまま勲也は、左肩に担ぐように木刀をもってきた。

「お前は変に考えすぎな気がする。もっと自然に剣を振った方がいいと思うぜ？」

そしてそう言い残し、すたすたと生徒会室へ続く階段のほうに歩き出した。

「おい、それはどういう——」

「あー、ちょうどいいね。そろそろ会議始めるから上に戻ってきてねー」

オレが勦也に言葉の意味を聞こうと上げた声は、黒塚の召集の聲に上書きされた。

「だとよ、行こうぜ雷牙」

「あ、おう……」

オレは少し疲労の残った足を動かし始めた。そうして勦也に小走りで追いついて再び訊く。

「どういう意味だよ、今のは？」

「言葉通りの意味だ。お前はいろいろと雑念を持ちながら剣を振っている気がしてな」

「なんだよ、それ？」

「それは自分で考えな」

話は終わりだという風に、勦也がそっけなく答えた。オレは歩幅の関係上、徐々に遠くなる勦也の背中を見ながら、よく分からないと首をかしげた。

「……もっと自然に剣を振れ、ねえ」

つぶやいてみたが、いまいち言葉の正体がかめなかった。

新たな日常風景 2（後書き）

誤字、脱字、修正の指摘、感想をお待ちしています。

新たな日常風景 3

「さて、みんな集まったみたいだから会議を始めるね」

そう言つて黒塚は一度部屋にいる役員たちを見回した。

基本的に話の内容は、日々の学校のことであつた。「一応僕たちはこの学校の生徒会……生徒たちの代表だからね。魔法云々だけじゃなくて、こういう『それらしい』活動もばっちりあるのさ」というのは黒塚の言い分である。

「……と、まあ細々したことはこんなもんかな。さて次が呼んだ理由でもあるんだけど。みんな、明後日の日曜日は空いてるよね？」

「日曜日いー？　なんでや？」

そう嫌そうに聞いたのは、夏目紅汰だつた。黒塚はそんな紅汰に苦笑いを浮かべながら言つた。

「うーん、実はとある先生からの頼まれごとでね。この日曜日、僕たち生徒会はちよつとしたボランティア活動に参加しなくちゃいけなくなつたんだよねー」

「はあー？　なんの？」

「ま、簡単に言つと駅前で募金活動」

「うわ、面倒くさいな！　そんなんで休みがつぶれるんかい」

「確かに面倒だけど、そう不謹慎なことをいうべきじゃないよ？」

渋る紅汰を黒塚がなだめる。だが、面倒だなと思つたのはオレも同じだったので、紅汰が渋るのもよく分かつた。

「えつと、一体なんの募金なんですか？」

おずおずと楓が質問する。すると黒塚は紅汰から楓に視線を移した。「ああ。みんなもニュースとかで見たでしょ。とある国の森で、獵

奇的な事件が起こったって」

それならオレもよく知っていた。最近のニュースはその話でもちきりだからだ。

確か、ヨーロッパのほうだったか。とにかく名前もよく知らない小さな国の、これまた小さな町の付近の森で、数日前に人間や動物の数百もの死体が見つかるという、悲惨な事件が起こった。死因も様々で、銃殺されたものもいれば、体を真つ二つに切断されたものいた。なかには、窒息死したものもいたらしい。

現場を目撃したという動物学者は町の知人に、犯人を『人間の皮をかぶった悪魔』と語ったらしいが、その後は恐怖におびえ、とても情報を聞き出せる状態ではなかったそうだ。数日経って、ようやく学者はその時の様子を語りだした。犯人は十五、六歳程度の細身の少女で、髪が緑色、武器は二丁拳銃……。

しかし、この情報は定かではない。月光の中であつたので、実際に緑色の髪なのか、ということもあるし、武器が二丁拳銃では、切断死体や窒息死体の説明がつかないという意見もある。そうするとグループによる犯行なのか。

……様々な憶測が飛ぶが、それ以上の犯人の有力な手がかりもなく、捜査は難航中とのことであつた。

「まあ、その事件のせいで、森の土壌が血を吸って著しく汚染されたりいいんだ。それをきれいにするには、膨大なお金がいるんだって。その募金らしいね」

よつこらせ、と黒塚は長机の下から小さな募金箱を引っ張り出した。「ちゃんと人数分あるからねー」

ぽんぽんと募金箱を叩きながら黒塚は言った。紅汰が露骨に嫌そうな顔をする。

「……あーオイラ、日曜日は……」

「なにも予定はないはずだよね？」

「……実はダチと約束が……」

「ああ、あのバスケット部の子とサッカー部の子だよな？　ちゃんと断つておいたから大丈夫だよ」

「はあ！？　何勝手に……てか、以前になんであいつらのこと知ってたんだよ！」

「僕の情報網を甘く見ないでほしいね」

自慢げに黒塚が威張る。くっ、と紅汰は唇をかむ。

「んー、まあいいんだよ参加しなくても。代わりに別のことやってもらうから」

「んだよ、別のことって？」

「そうだねえ……」

そう言つて黒塚は紅汰に歩み寄り、ひそひそと紅汰だけに聞こえるように何かを言い始めた。みるみる紅汰の顔が青ざめる。

「わ、わかつた行く行く行かせていただきますー！！」

「うん、その言葉を待っていたよ」

……いったい何を言われたんだ……。いや、聞く気にはなれないが。

「ともかく、みんなもいいね。明後日の日曜日、時間は朝の九時、駅前の広場に集合。昼以降もやるけど、昼ご飯は先生のおごりらしいから、心配しないでね。ああ、あとこれは課外活動の一環だから、制服で来るように」

黒塚が紅汰から目を離し、役員全体を見回しながら言った。

「うわー、昼以降もやるのかよ……」

紅汰ではないが、オレもその言葉を聞いて若干嫌そうな顔をした。その様子を見て、黒塚はあははと笑った。

「大丈夫だよ、そんなつらい仕事じゃないから。この箱を持って、声出して目立つようにしてればいいから」

「……目立つように、ね」

と、そこで黙っていた勲也がぼそっとつぶやいた。

「話はそれで終わりか、鎌？」

「うん、そうだね。言うことは言ったからね。今日は解散かな」

「……そうか」

そう言っただけ、ふっと小さく息を吐いた。

「だ、そうだけ。帰るか、雷牙、楓？」

「あ、おお……」

突然の勲也の提案に驚くオレと楓。確かに、勲也と帰るのはいつものことなんだけど。それにしても、急といふかなんというか……。

「ということだ。お先に帰らしてもらって先輩方？」

オレらを先に部屋の外へ出して、最後に勲也がそう言って部屋を後にしようと――

「ああ、そうそう」

ふと、勳也は立ち止まった。そうして背中越しに黒塚のほうを見た。

「『詳しい話』は後で聞く。……じゃあな」

そう言い残して、勳也は生徒会室を出てオレらのほうにやってきた。

「なんだよ、詳しい話って？」

「なにか会長さん、すごく苦笑いだったんだけど？」

オレと楓は、勳也の隣を歩きながら勳也を問い詰めた。勳也は「だろうな」と意地の悪そうに笑った。

「「？」」

勳也が何を納得しているのかが分からない。オレと楓は顔を向き合わせて、同時に首をかしげた。

「まあ、あいつのことはそれなりに知っているつもりだからな。なんとなく分かったのさ」

「分かったって……なにがだよ？」

肩を竦めつつそう言った勳也に、オレは勳也を見上げた。

「気を付けろよ、雷牙、楓？」

勳也は一度オレらのほうを振り向いた後、正面に向き直りながら言った。

「鎌のやつ、なにか隠してるぜ」

新たな日常風景 3（後書き）

誤字、脱字、修正の指摘、感想をお待ちしています。

茶髪翠目の少女との出会い 1

生徒会室での会議があつてから二日後の日曜日。

朝から晴れやかな空で、夏が近づいてきているんだと思わせる日差しが照りつけていた。

「さて、みんな集まったね。それじゃあさっそくはじめようか。でも、今日は日差しが強くて暑いから、こまめに休むことも忘れないでね。倒れられるとみんな……特に先生が困るから」

「おいおい……まあ、そうなんだがな。みんな、今日は募金の手伝いに来てくれて助かった。暑いとは思うが、よろしく頼む」

そんな中、生徒会役員とこの仕事を持ってきた先生の計九人は駅前の広場の端に集まっていた。

「……しかし、ホンマに暑いな今日」

黒塚と先生が発言した後、紅汰がカッターの袖を肩まで捲った腕で日差しを遮りながら、雲一つない空を見上げた。

「もう夏だねえ」

歩美がのほほんと言う。すると歩美の車いすを押している山城が、無言で空を見上げる。

「そうだね。今年は夏が長いかもね。気を付けないと、ね？」

そう言つて黒塚はオレのほうを見てきた。オレは先日勲也に言われた『黒塚が何かを隠している』という言葉が脳裏をよぎった。

……前の騒動の件もある。今度は一体なにを隠してやがるんだ……？

「な、なんだよ？」

「いやー」

すると黒塚は、警戒する素振りを見せるオレを……正式にはオレの首のあたりを指さした。

そして親指を立てる。

「その髪型、かわいいね！」

「っ!？」

オレはぱつと、両手で首筋のあたりに揺れる髪を握った。

オレの髪型は今、ポニーテイルだった。

「ここ、これは！ オレがしたくてやったんじゃないからな!!
そのままにしておくと言が暑いなって楓に言ったら……」

『あ、じゃあ私と同じ髪型にしてみる？ これなら簡単にできるし』

ということ、朝方楓にもらったのである。

「おおっ、それ！ その反応だよフルミナ君!! そのツンデレっぷり、僕の心にビビッとくるよ！」

「マジで電撃浴びてみるかあ!？」

オレは真っ赤になりながら吠えた。それに黒塚はあははと笑った。

「こんな街中で電撃飛ばしたら周りが大騒ぎするだろうねー」

「うぐっ……」

こういうところが、黒塚の憎らしいところだ。こちらが何もできな

いことを分かっててちよっかいを出すから……。

「ねえねえ、それよりも色々髪型試してみない？」

「ちよ、寄ってくんなっ！」

なにかすごく興奮した様子で黒塚が迫ってきたので、オレは毛を逆立てて威嚇する猫のように黒塚に怒鳴った。実際に尻尾でも生えていたら逆立ってピンと伸びていたことだろう。

「その案、もらった!!」

「もらうなっ。てか、勝手に人の心を読むな!!」

心読むとか、こいつは一体何者なんだよ!?

何か突然、言いようもない嫌な予感を感じたオレは、ささっと体を隠すように腕を組んだ。

それに反応して、さらに近づいてくる黒塚。

変態だこの人!

だが……。

カッキン!!

……次の瞬間には勢いよく地面を転がった。
そして案外近場で止まった。

……えーっと……？

「……内野ゴロでしたか」

「ホームラン性の音はしたんですけどね、ってちがーう!!」

なにやら黒光りするバットを、気持ちのいいくらい振った後の姿勢になっている水穂に、オレは思わず叫ぶ。

「あんたは人を殺すおつもりですかっ!」

「このようなことで会長が死ぬのなら、世界はもつと平和です」

「どんだけあいつが諸悪の根源なんだよ!!」

「それにこのバットでは死にませんよ」

「……どういことですか？ まさか金属のように見えて、実はゴム製——」

「……こんなアルミ製のバットでは」

「思いつきり金属バットじゃねーか!!」

死ねる……それで殴られたら人は平気で死ねるのですよ？

水穂は手に持ったバットを眺めながら、なおも言う。

「少し軽すぎました。次はもう少し重い——」

「重い軽いの問題じゃなくて、使用用途自体が間違ってたんだよ!!」

「……？ ではいったい何に使うと——」

「ボールを打つためだ!!」

オレは心底頭を抱えた。

「……ん？ 黒塚はどうした？」

と、そこで先生がオレたちの周りに黒塚が見当たらないことに気づき（出来ればあのすごい音に気付いてほしかったな）、水穂に言った。それに水穂はいたく冷静に言った。

「会長ならあそこまで飛んでいきました」

「なんだ、またやったのか。懲りないやつだな」

「まったくです」

「君も、くれぐれも加減だけは考えなさいよ？」

「分かりました。注意します」

……………。

「……………なあ。……………もしかして『この会話おかしくね？』って思ってるの、オレだけなのかな？」

「心配すんな。お前の考えは間違っちゃいない」

隣にいた勲也からありがたい返答が来た。

よかった、オレがおかしいわけじゃないんだな。

素直に喜んでいいのかは、非常に微妙なところだが……………。

……………ちなみに。

黒塚はものの数分でいつも通り動き始めました。

魔法だ、魔法のおかげに決まってるんだ、ふんっ。

茶髪翠目の少女との出会い 1（後書き）

ほのぼの（？）パートですね。

誤字、脱字、修正の指摘、感想をお待ちしています。

茶髪翠目の少女との出会い 2

始める前はぐだぐだな感じであつたが、募金活動自体は順調にいった。

午前の部限定だが、もっとも貢献したのは、勲也かあるいはオレであらう。

どちらも立っているだけで人が集まってきたのだ。

勲也は俳優と思われたようで、女の子たちがものすごい勢いで寄ってきた。写真までねだられたらしいが、勲也は断つたらしい。

一方オレのほうは、募金している中で突出して幼い姿、可愛らしい見た目、そしてなにより虹色に光る金髪という目立ちまくる姿だったため、いろいろな人が募金箱にお金を入れてくれた。

……そしてその大半の人が、『高校のお兄ちゃんお姉ちゃんを、一生懸命手伝っている健気な小学生の女の子。制服は貸出』と勘違いをしていたらしく、子ども扱いはなはだしかった。

途中それを眺めていた黒塚が「それなら言ってみればいいんじゃない？」「私、小学生じゃないもん！ 高校生だもん！」「て？」とほざいたので『光速』を駆使して蹴り飛ばしてやった。一応注意はしたが、道行く人たちに見られた可能性もある。だが後悔はしていない。

……話を戻そう。

とりあえずそんな感じで、午前は終了した。あとは午後の募金活動

である。

「午後はそんなにする気はない。みんなこれまででもう十分な働きをしているからな。あと少しだ、頑張ってくれ！」

午後の始まりは先生のその言葉から始まった。

「……ん」

「どうしたの雷牙？」

午後の活動が始まって数分後。

「あ、いや。……悪い、少しトイレに行ってくる」

そう言っただけは募金箱を机に預けて、人込みをかき分けそそくさと駅の構内に入る。

「しまったな。さっきのレストランで飲みすぎたかな？」

さっきまでは全然だったのに、急に尿意を催したことにオレは苦い顔をする。

「……駅は広いからな。それにあんまりオレは利用したことないし。トイレってどこだよ……」

辺りを見回しながら早足でオレは駅構内をめぐる。

この駅は、地元でも一番大きな駅で、新幹線も止まる。それゆえにそこらの駅よりも圧倒的に人が多く、同時に店の数も半端じゃない。あつちこつちで人だかりができています。その人だかりを避けながら歩くのは、小さな子の体には結構つらい状況であった。

「お、あったあった」

お目当てのものを見つけて、オレの顔がちょっと喜びに染まる。急いで入ろうと……したところで、オレははたと立ち止まった。

「……無意識にこつちを選ぶとか……オレはもうやばいのかもしれない」

足は当たり前のように女性用トイレに向かっていた。

この姿になった当初は、何度男子トイレに入り込んだことが。それが今では……。

軽くショックを覚え、そのショックで顔をうつむけながらオレはトイレに足を踏み入れ――

ドンッ

「うわっ」

……たと思ったら何かにぶつかって、オレは思わずしりもちをついた。

「いってて……何だよ」

「ご、ごめん！ 大丈夫？」

頭上から聞こえてきた声に、オレは痛む尻を撫でながら顔を上げた。

「ごめんね。あまり寝てなくてばおつとしてたから……」

声の主は、一五、六歳に見える少女であった。しかし日本人でないことは、その茶色の髪と翠色の眼を見ればすぐに分かった。しかし、口にはしているのは流暢な日本語という変わった少女でもあった。

「大丈夫、立てる？」

そう言つて少女は片手に大きな旅行用バッグを引きながら、空いた片手をオレのほうに差し出してきた。

「……あ、ありがと……」

その手を取りながら、オレは立ち上がった。

「……なん、ですか？」

立ち上がったても、手を持ったままオレを眺めている少女に、オレはおずおずと言った。

「……え、ああごめん！ 君の髪きれいだなーって思ったからつい見惚れちゃった」

あははと笑いながら、少女は慌てて手を離れた。

だが、その時オレは何か違和感を感じた。どんな、と聞かれたら首をかしげてしまうが、確かにになにかを感じた。

「……ホントに大丈夫？ どこか痛めた？」

「え……？ うわっ」

オレがなにやら難しい顔をしたので心配になったのであろう、少女がオレの顔を覗き込んできた。オレはいきなりどアップで現れた少女から、ぱっと身を引いた。急に女の子の顔が近づいてきて、テンパらないだけの度量はオレにはない。……自らも女の子だけど。

「どこか痛い？」

「ああいえ、大丈夫です、大丈夫……」

オレはそう言った後、表情を硬くした。

「ど、どうしたの！？ やっぱりどこか……」

「い、いやチガウデス……」

その様子を見た少女が慌ててなにかしようとしたが、オレは片手を振ってそれをやめさせた。代わりにもう片方の手をお腹に当てながら一言。

「と、トイレに行かせてくれませんか？」

さつきしりもちをついたせいか、なかなかやばい状態になっていた。

「え……ああ、ごめん！ どうぞどうぞー！」

それを聞いた少女は、慌てて横にずれた。

「す、すいません……」

「ううん！ こっちこそ引き留めてごめんね」

「い、いえ……では失礼します……」

少女がそう言ったのを聞くと、さつとオレはトイレに駆け込んだ。

「……………」

少女はオレの後姿を眺めていたようだが、やがてころころとバッグを引く音をたてて離れていった。

「……………みつけた」

そう、つぶやきながら……。

茶髪翠目の少女との出会い 2（後書き）

非常に申し訳ないのですが、ストックがなくなってしまうました……。出来るだけ早めに更新していこうと思いますが、毎日とはいかないかもしれません。それでもこの作品にお付き合いいただけると幸いです。

誤字、脱字、修正の指摘、感想をお待ちしています。

10/19 一部駅描写など修正しました。

間話　うちあげボーリング会

午後も、午前よりも暑さが増し思ったよりもきつかったが、誰か倒れるなどというハプニングもなく無事に終了した。一日だけの募金であったが、それなりにたまったのではないだろうか。

その後、小規模なうちあげ会みたいなものを役員たちで催した。うちあげ会と言っても、役員みんなで近くのボーリングをしに行ったというものののだが。

……ここだけの話だが、オレはボーリングはそれなりに得意だ。ボーリングへ行こうとなったときは、内心笑みを浮かべたものだが……。

パカーンッ

ピンが倒される小気味よい音がそこかしこから聞こえる。駅の近くにあるボーリング場は、休日のせいかな、学生ばかりでなく家族連れの姿も目立った。中には、明らかに熟練者だろうと思われるオッサンもいた。マイボール、マイグローブ、びっくりスコア。……プロ、かもな。

パカーンッ

「いよしっ」

室内に響くノリの良い音楽や、周りのグループの声を押しのけて、一際大きな声が上がった。

「二連続ストライクだぜ!!」

一際大きな声を上げたのは、紅汰であった。そのままガッツポーズをしながら役員たちが座っているソファーに戻ってくる。

「おおー、すごいじゃないか」

ぱちぱちと、順番待ちの黒塚が小さく拍手をした。

「はっはっは! これでオイラがトップだぜ」

ぼふっと紅汰が肘掛のついたソファーに座る。そして頭上にある画面のスコアを眺めた。

「おい、フルミナよー。このままじゃあぶねえんじゃないかあ?」

「う、うるさいっ」

オレは隣のレーンのソファーから、紅汰に怒鳴った。実は紅汰、見ていたのは隣のレーンのスコアだったのだ。

オレたちは人数が多かったので、二つのレーンに分かれてやっていった。

組み分けは、紅汰・黒塚・勲也・山城のチームと、オレ・楓・水穂のチームに分かれた。歩美は、目が見えない上車いすなので、申し訳なかったが参加は出来ず、見てもらうことになった。

歩美を除いた七人の組み合わせを見てもらうと分かるように、オレたちは男女で分かれていた。

もちろん最初オレは、男子チームに入る気であった。当然だ!

だが、そうすると人数が偏ってしまう。なので仕方なくオレは女子チームに行くことになった。

……強調しておくが、人数上『仕方なく』こちら側に映ったのだ。決して「私、オンナノコですからー」と言っただけではない。断じて違う。

ち、違うんだからなっ！

代わりにささやかな抵抗として、男子チームの賭け——一番スコアの低いものはジューズをおごる——には参加させてもらうことになっていた。

言っただように、オレはボーリングがそれなりに得意だ。少なくとも自身ではそう思っている。

しかし……。

「次は雷牙の番よ」

「分かってる」

オレは隣のレーンのソファアで自信ありげに鼻を鳴らしている紅汰をにらみながら立ち上がる。そのまま女性陣の視線を受けながら、オレは硬い表情でレーンの前に立つ。そして身長が変わったせいで、前よりも遠くに見える気がするピンを横目でにらみながら、今まで投げていたボールを手に取った。そのボールは、そのボーリング場では一番軽い六ポンドのものである。本来の姿ならこんなものへでもないのだが……。

しかしオレは持った途端、とても重く感じた。

……勝手に違うんだよな。

確かに、男の時に使っていた重さのボールは、少し身体能力さえ上げていれば、扱うことは可能であった。でもその重さまで行くと、今度は指のサイズがこの体にはあまりに合わなさすぎたのだ。いつ滑って、どーんと落とすか分からなかったので、試しに指を入れてみた直後から『これはだめだ』とあきらめた。

やり辛い理由はほかにもあった。

歩幅が合わないのだ。さつきから何度も歩幅調節をしているが、これだという距離はまだ測れていない。

「……」

オレは場所的に真上に位置するスコアを映す画面を眺めた。女性陣の中では、それでもトップに立っているが、男性陣の中ではかなり差を付けられている。ここから上げていかないと、ラストまで追い抜くことは不可能だろう。

「……負けてられるか」

画面から目を離して、敵のようにピンをにらみつける。

「……………っ」

そしてオレは一步踏み出した――

「いやー、悪いなフルミナ」

「……ちくしょう」

ガコン、と目の前の自販機からジュースが出てくるのを見ながら、オレは不満げに口をとがらせた。空を見ると、あれだけ蒼かったのに、今は夕焼けに染まりはじめていた。世界はほんのりオレンジに染められている。

オレたちは今、みんなでボーリング場を出たすぐそばの自販機にたかっていた。ボーリング場の中の自販機は高いので、買ってやるから外のにしてくれとオレが懇願したのだ。中のは一番安いので150円、男子全員だから600円かかるが、外のなら普通なので120円、こっちは四八0円で済む。

ケチに見えるかもしれないが、それがどうした。一二0円はそれなりに重いんだぞ！

……しかし、外の自販機にしたおかげで、予想外の事態が起きた。

そのボーリング場は、割と大きなアミューズメントパークで、ボーリング場のみならずそのほかの娯楽も入っており、レストランも一店舗入っている。そのせいか大通りに面していて、車も度々出入りしていたし、人も大勢通っていた。

そんなところで男子勢は、オレにジュース代をおごらせているのだ。

見た目小学生の女の子なオレに対して。

周りの一般人からの視線は、あんまりいいものじゃなかった。中に

は声をかけてきそうな人もいた。

オレの内心は……実のところ複雑だった。

確かに、これだけ気まずい雰囲気なら、もしかしたらおごるのもなしになるかと思った。しかし同時に、やっぱりオレって小学生の女の子にしか見えないんだよね……、という軽いショックも抱えていたからだ。

……ちなみに言っておくと、男子どもはすっかりたかつてきやがった。

勳也はさも当然のように平然と一般人の視線をスルーしていたし、紅汰にいたっては気づいてない様子であった。

黒塚のやつは「うーん、幼女をいじめるのはあんまり好きではないんだけど、これはこれで……フルミナ君はいじめがいがあるよね」「とほざいた。

もちろん天誅。

今はそこに転がっている。

周りの一般人もそれに戦^{おの}き青い顔になった。……無理もない。

唯一山城だけは断ってくれたが、「お前は勝ったんだからいいんだって」と紅汰が無理やりにもう一本購入し、山城に手渡した。山城は大きな体を申し訳なさそうにおろおろさせて、難しそうな顔でオレを見下ろしてきたが、オレは苦笑いで「いいですよ、負けたのはオレですし、どうぞ」と言うと、小さく会釈してくれた。ホント、山城先輩はいい人だなー。

そんなこんなで、オレたちのうちあげ会は終了したのであった。

間話 うちあげボーリング会（後書き）

話と話のつながりは難しいです。

と、ということなので間話。

今まで遅れててそれかよっ、と思われるかもしれませんが、ど、ど
うか許していただきたいです……。

誤字、脱字、修正の指摘、感想をお待ちしています。

訓練——なんにも考えずがむしゃらにつ 1

「……ん？ フルミナ君は？」

募金活動をした日から数日後の放課後。生徒会室には、先生方に募金活動の成果の報告をするために集まった役員たちがいた。

正式には、職員会議で時間を取ってもらい、先生たち何のために募金したのか、いくら集まったのかなどを報告するための情報を共有するために集まっていた。

また先生たちに報告した後は、近々行われる『委員会報告』でも、そのことについて言わなければならないので、それについての文章も考える予定らしい。

『委員会報告』はその名の通り、各委員会がこの一か月どういう活動をしてきたかを報告する場である。

月一回、月の下旬に開かれるもので、その報告は翌月最初に開かれる全校集会にて発表される。

その二つのことについて今日は話し合う予定なのだが、役員が全員そろっていなかった。

「……雷牙なら、必死に宿題を片づけています」

黒塚が生徒会室の奥の方のいすに腰掛け、周りを見回しながら言うと、コの字型に並べられた長机の、向かって右側の端部分に座っている楓が、申し訳なさそうにそう答えた。

「はあ、宿題……。熱心なのはいいけど、今日は会議があるんだけどなー」

「そうだぜ。今やるこたねーじゃないか」

黒塚の言葉に紅汰が不満げに続いた。それに楓は首を横に振った。
「いや、そうではなくて……」

「熱心じゃなかったから、今やってるんだよあいつは」

と楓の言葉を遮って、右側の長机では奥よりの角の近くに座っている勲也が、皮肉気に言った。

「……なるほど、『今日提出だった』宿題をやってるのね」

「そうなんです……」

はあ、と黒塚が苦笑いを浮かべてため息をついた。それに申し訳なさそうに楓が肩をすくめる。

「まあ、確かにフルミナ——この場合は宝条君のほうがいいかな——が宿題をまともにやってくるような子じゃないことは、重々承知の上だけだね」

「……すみません、あれほど言ってるんですけど」

「いやいや、日向君のせいじゃないよ。悪いのは本人なんだし」

「そうだね……」と黒塚は、パイプいすの背にくつと寄り掛かった。

「来たらちよつと『おしおき』を受けてもらおうかな？」

+++++

「ちつくしょう、面倒くせーな！」

オレは職員室に残ってやった宿題を提出した後、部屋から離れたところを見計らってそうこぼした。

「よりにもよって会議があるってのに……出すならもつと楽なもの出せよ。かなり時間食ったじゃねーかつ」

言いつつも、せっせとオレは廊下を走る。ぺたぺたとスリッパが床を踏む音と、幼い少女の少し荒い息遣いが、放課後の寂寥感あふれる空間にこだまする。

さつきから人ひとり——職員室や校長室などがある事務棟を走っているとはいえ——すれ違わない。

「あー、もうっ。生徒会室遠いし！」

オレはカクツと九十度方向転換して、南側にある事務棟と、中央の教室がある校舎をつなぐ通路に躍り出た。

古宮高校は、主に三つの校舎に分かれている。北と中央の二校舎に、普段生徒たちが授業などで利用する教室や音楽室、美術室などが入っており、職員室や事務室、校長室や図書室など、近づかない生徒はとことん近づかないものがあるのが、一番南に位置する事務棟だ。

他にも西側にはそれなりに大きな体育館や、外の部活の奴らが使う部室棟が位置し、北東のほうには、文化部の部室棟がある。南側一面に広がるグラウンドや、体育館横のプールを含めれば、けっこう大きな学校だと思う。

ちなみに言うと、オレが今いるのが事務棟と中央校舎の間の通路。職員室は二階にあるので、二階の連絡通路だ。そして、生徒会室は文学部の部室棟の三階に位置する。

遠いわっ

グラウンドのほうから、運動部の掛け声が響く。もうアップも終わり練習が始まってそれなりに経ったというところか。それだけ時間が経っているということだ。時間がずれているせいか、連絡通路から見える帰宅生徒の数もまばらだ。

「遅れたら会長のやつに何されるか……」

以前同じように遅れたことがあった。その時は、オレのいないうちに面倒な役をすべて押し付けられそうだった。

それを聞いて抗議したところ、許してくれたが、一日あのゴスロリ衣装にさせられた。闇属性が得意とする拘束魔法を、惜しみなく使ってきた黒塚は実に楽しそうだった。

鼻息の荒い黒塚に、身動きを封じられたままガン見され、羞恥に顔を真っ赤に染めたあの時は、もはやオレの中では黒歴史となっている。

「……っ、急ご」

少し身震いしてから、オレは再度足を動かした。

そしてちょうど中央校舎を突っ切ろうとしたところだった。

ドンッ

「きゃっ」

「あ、ごめんっ」

不意に横から現れた女子生徒にオレは見事にぶつかった。オレは走

つていたので衝撃は大きくなく立っていられたが、女子生徒のほう
は歩いていたのだろう、衝撃に耐えられず派手にしりもちをついた。

「いたた……」

「わ、悪い……て——」

オレは手をさしのばした後女子生徒の顔を正面から見て、目を丸く
した。

「あ、あんたは……」

「え？ ……あ、君は日曜日の」

ぶつかつた女子生徒は、この日曜日に駅のトイレで出会つた、茶色
の髪と翠色の眼の少女であつた。

訓練——なにも考えずがむしゃらにつ 1（後書き）

誤字、脱字、修正の指摘、感想をお待ちしています。

訓練——なんにも考えずがむしゃらにつ 2

「あはは……またぶつかっちゃったね」

「そ、そうですね」

少女は苦笑いを浮かべながら、オレの手を取って身軽な様子で立ち上がった。

「……」

少女は黙りこみ、頭一つ小さいオレをまじまじと眺めた。オレは居心地悪く身をよじらせる。

「な、なんですか？」

「……君、この生徒さん？」

「そうですね」

「じゃあ……高校生？」

「そう、ですね……」

なるほど、そういうことですか。オレは少女がオレをまじまじと眺めた理由を理解した。

ようは、オレが高校生だと思ってなかったということだろう。

「……ごめん、私てつきり小学生の子かと思ってた」

「……だろうと思った」

その証拠に、少女はそう口にした。オレは肩をすくめてため息をつ

いた。

そりゃあ、今のオレは誰が見ても小学生くらいの女の子にしか見えない。それはオレも納得している。だってオレ自身、毎日鏡で見ててそうとしか見えないもんな。

「ごめん、気にしてた？」

「……いや、別に。それより、ここの生徒だったんですね」

オレは少女の服装を見ていった。

「いやいや、正式にはまだ違うんだ。私、来週からここに通う予定なの」

少女は真新しいブラウスの胸部分を、軽く引つ張りながら答えた。

「今日は時間があいたから、ちょっとそれっぽく歩いてみてたの」

「そうだったんですか」

「そうなの。……ところで今更なんだけど、君まさか上級生とかじゃ……ないよね？ 一応聞いとくけど、何年生？」

不意に心配そうに少女が聞いてきた。どうやら、急に不安になったらしい。オレはこの姿で高校生だ。この時点で、正確な学年判断は出来ないからな。

「一年生ですけど」

「あ、そうなんだ。実は私も一年生なの」

オレが言うと、少女はふう、と安堵した後、うれしそうに自らを指さして言った。

「同じクラスになれるか分からないけど、来週からよろしくね！」

と、少女がふわりと両手でオレの手を取って、ぶんぶん振ってき

た。オレはなすがまま振り回されながら、「ど、どうも……」と若干類を赤らめながら答えた。

はたから見たら、女の子二人が仲良く手を取って遊んでいるように見えるかもしれないが、オレにとっては、異性からがっちり手をつながれた形になる。すごく気恥ずかしさを覚えるわけだ。

「そうだ、まだ名前を聞いてなかったね。私の名前はソロナ。ソロナ・フライハイトっていうの。君は？」

はたと立ち止まって、少女——ソロナはにこやかに言ってきた。オレは、いまだにソロナに取られている左手を——ソロナの温かさを感じながら——なんとなく見ながら、ぼそぼそと答えた。

「……ほうじょ……、ふ、フルミナ・レーゲンってイイマス」

「おおー。フルミナ・レーゲンって、確かおとぎ話の英雄様の名前だよな？　すごいね君、英雄様と同じ名前なんだ！」

「え……？　ああ！　うん、そうなの。……お、お母さんがその話、好きらしくて……」

おとぎ話と聞いて一瞬オレは疑問に思ったが、すぐにこくこくと頷いた。

そうだ、前のオレもそう思っていたじゃないか。あれは『おとぎ話だ』……て。

今でこそこんな状況になって、あれはおとぎ話じゃないって認識してるけど、普通の人はずうじゃないんだ。

「へえー、そうなんだ」

幸い、オレの逡巡には気が付かなかった様子で、ソロナは気さくな感じでそう言った。

と、そこでソロナが、自分の右腕にはめている腕時計を見つめて、

あつと顔を驚かせた。

「もう迎えが来る時間だ。じゃあ、また来週に会おうね！」

「あ。……うん。そう、だね」

「じゃあねー！」と言い残し、ソロナは近くにある階段を下って行きすぐに姿が見えなくなつた。

「……あー、女言葉は慣れん。疲れるわ」

完全に足音も聞こえなくなつたところで、オレははあとため息をついた。

黒塚をはじめ生徒会のメンバーは、オレの『元の』姿……つまり、オレが男で、今の姿はフルミナ・レーゲンの体を借りている——黒塚は転生に近いと言っていたが——ということを知っている。だから別にオレが男の口調で話そうが、ごく自然に受け入れてくれた。

しかし、元の姿が男だから男の口調で話すというのは、オレがこの姿に変わったあの瞬間を見ていない者、さらには魔法の存在を知らない一般人には通用しない。男口調で話そうものなら、ひどく不審な目で見られるということは、実は体験済みなのであった。

それからは、生徒会メンバー以外の人と話すとき、または話を聞かれるときなどは、意識して女口調で話している。気持ち敬語を多めにして、それ以外は概ね楓をまねている。

これが慣れないうちはひどく違和感を覚えるのだ。最初のうちは、口にするだけで真っ赤になっていた。今はそこまではないが、やはり自由自在にとまではいかないというところか。

「……さあーって、オレもそろそろ帰ろ——」

ぐぐぐ、と両手をバツグごと大きく天に揚げ、その場で伸びをした姿勢のままで、オレは一瞬固まった。

「……ってやべえ！ 会議！！」

そして呻くように言いながら、ぱつと一気に両手を下ろした。虹色に輝く金髪が軽やかに揺れる。

「急がねえと！！」

オレは一気に床を蹴って、北校舎に移るための連絡通路に飛び出した。

訓練——なにも考えずがむしゃらにつ 2（後書き）

誤字、脱字、修正の指摘、感想をお待ちしています。

訓練——なんにも考えずがむしやらにつ 3

翌日。

「……」

朝のホームルームまであと数分という、一年二組の教室。ごく少数が自分の机で本を読んだり、宿題かなにかをしているが、大概の生徒は席を立ち、友人たちと談笑していた。教室は笑いがあちこちで起こったりして、騒がしいが和やかな雰囲気だ。

「……」

そんな中、オレはぐったりと机に突っ伏していた。

「どうしたの、雷牙？ 来る時からずっとどんよりしてるけど？」と、楓が腰をかがめてオレの顔を覗き見ようとしてきた。だが、オレは顔を上げず突っ伏したまま「……ほっといってくれ」と元氣なく答えた。

「なんだ、ずいぶんとじめじめしてるな」

すると楓の後ろから、オレの机の正面に移動してきた勲也が、楽しそうにオレを見下ろしてきた。

「……うるさい」

少し間をおいて、オレはもごもごと答える。それに勲也は、さらに口元を笑みでゆがませた。

「……そうか、お前まだ昨日のことを——」

「言うな！ その話を出すんじゃないっ！！」

がばつと、オレは勢いよく顔を上げ勦也をにらんだ。すると、この反応は予想通りだったのか、勦也は小さく鼻を鳴らした。

「ま、そうだろうと思った」

「~~~~っ」

酷く冷静に言う勦也に対し、オレは勦也の言った『昨日のこと』を思い出していまい、顔を真っ赤にした。それを見られるのが嫌で、再びオレは机に突っ伏して、腕で顔を隠した。

『昨日のこと』とは、オレが生徒会の会議に遅れたために黒塚から受けた、黒塚曰く『おしおき』のことである。最終的には、水穂が暴走した黒塚を叩き伏せて事なきを得たが、オレはいろいろと精神に大きな痛手を負った。

え、何をされたかって？

いい、言わねえっ。絶つつつ対、言わねえ！ 思い出したくもないもん！！

とまあ、そういう経緯があり、一日たった朝ではあるが、オレはひどくブルーだった。

「……ああ、もうお嫁に行けない……」

「ほお、お前はお嫁に行く気だったのか」

「……………っ！」

机の前にいるであろう勦也を、オレは無言で蹴り上げた。……が、それを見越していた勦也は、程よくオレの足の届かない位置まで下がっていたので、オレの足は見事に空を切った。

「残念だったな」

「！？　　っっ！！」

オレはムキになって、ばたばたと足を動かした。顔を突っ伏したまままだし、もともと足が床についていない状態だったので、ひどくバランスが悪かった。

ガコンッ

「ひぐっ！？」

むやみやたらに動かした両足のうち、右足が勢いよくオレ自身が突っ伏している机を蹴り上げた。どすつと下から突き上げる衝撃がオレの顎を直撃し、さらにはスリッパを履いていても守られていない足先が、硬い机の板との衝突に耐えられなかった。

「い、痛み……」

オレは両手で足先を抱え、頭は机の上に残して悶絶した。その姿に、楓は少し慌て、勦也は腹を抱えて笑い出した。

「くっ……このお……っ」

少し涙のにじむ目で、オレは大笑いする勦也をにらんだ。報復しようにも、痛みが強く動けない。

くっそー、男の姿だったら普通に届いたのにつ！

そしてようやく痛みが引いてきたと思ったたら、狙ったように担任の

先生が教室に入ってきた。そろそろと面倒そうに自分の席に戻るクラスメイト達の波に乗って、楓は教室の前のほうに行き、勲也はオレの後ろの席に座った。

前に座るオレからでは、手が出しにくい後ろの席に。

「ま、今はお預けだな」

勝者の余裕すら感じられる勲也の表情に、オレは低く唸るのであった。

+++++

その日の放課後……。

え、授業はどうしたかって？ もちろんしつかり終わらせてきたぞ…… ほぼ寝るか、ぼーっとしてただけだったが。だって、まじめに聞いても分からないもん。まあ、かなり目を引く姿してるから、寝ててもすぐばれたがな。

それはさておき、放課後だ。

放課後、オレはすごく嫌だったが、楓や勲也に無理やり連れられ、生徒会室に足を運んでいた。生徒会室には、オレら一年生組以外のみんなが、もう暇そうに時間を持て余していた。

「や、一年生諸君。君たちで最後だよ。遅かったね」

生徒会室の奥のいすに、足を組みながら座っている黒塚が、オレたちが来ると小さく手を振った。その手には、やはりというべきか、アニメ雑誌が握られていた。

「すみません。雷牙が『いやだー!!』と聞かなくて……」

「ははあーん、なるほど」

と、黒塚は足元にあるスクールバッグに雑誌を戻すと、オレのほうをにこやかに見つめてきた。

「な、なんだよっ」

「やつぱり、昨日のことが原因かい？」

「当たり前だろ！ お前のせいで、どんだけ恥ずかしかったか!!」

「だよーねー。最終的にフルミナ君、女の子座りでめそめそ泣いてたもんねー？ 可愛かったなー。ムフツ」

「うがー!!」

オレは真っ赤になりながら、奇声を上げた。そして同時に、キツネ目になるくらいにやけた黒塚の顔を一発殴ろうと、手に持ったスクールバッグを離して、『光速』で一氣に黒塚に肉薄した。

「おおー、発動のラグもないし、なかなかキレが良くなってきたね。でも細かい制御はもう少しかな？」

「んなっ!？」

生徒会室は、教室ほどの広さで、歩いても数秒とかからないうちに

反対側の壁際に行けるほどだ。走るともつと早い。その上『光速』を使うと、まさに一瞬だ。

オレは『光速』を使った。別に走っても良かったが、気持ちの問題だ。この変態に容赦はいけない。

黒塚の元に肉薄するのにかかったのは刹那だ。時間にして、コンマいくらかもないだろう。それほどの速さだった。

それなのにオレは、右腕をがっしりと黒塚に掴まれた。

長机を飛び越えての移動だったので、オレの足は床についておらず、黒塚には飛び掛かるような形だった。それ故スピードには乗ってはいたはずなのだが、黒塚に掴まれたとたん、一気にスピードがゼロになった。だが、急ブレーキをかけたような状態のはずなのに、不思議とオレはそんな不快感は感じなかった。

唯一感じた不快感は、黒塚に右腕を掴まれたことくらいだ。

「あはは、不快だなんてひどいなー」

「っ、だから人の心を読むなと――」

言ってるだろ！ と続けるはずだったが、オレの言葉は途中で途切れてしまう。

なんと、黒塚が空中で止まったオレの腕を引き、あるうことが自分の組んだ膝の上に、オレをふわりと馬乗りさせたのだ。

「っ！？」

ふっと、お尻のあたりに黒塚の太ももの感触が現れる。

「あっはは、軽いねフルミナ君」

「な、え、お、ちよっ……っ」

ぐぐつと黒塚の顔が迫る。距離にして十センチ程度か。お互いの息がかかる程度の距離だ。

「な、おいっ！ はなせ……ひゃっ」

そのとき、黒塚が身じろぎをした。足を動かした際、ダイレクトにその振動が、オレのお尻周辺に響いた。

「お、可愛い声だね！ ん！？ しかもこの感触……今日はハーフパンツ履いてないんだ！」

「っ！？」

オレは掴まれていない左手で、ぱつと広がるスカートで前を隠した。

確かにいつもならオレは、スカートの下に体育で使うハーフパンツを履いて登校する。だが今日だけは、朝ブルーな気分だったのが災いし、ついつい履くのを忘れてしまっていたのだ。

「……っ」

オレは真っ赤になりながら、うつむく。黒塚はさらに悪乗りし、ふうっとオレの耳元に息を吹きかけてきた。

そこが、オレの限界だった。

オレはゆっくりとスカートから手を離れた。

そして肩をふるふると小刻みに震わし始めた。

そのオレの様子に、黒塚は首をかしげた。

「？ どうしたんだい？」

「……………じ」

「じ……………しん測定器ならあそこに——」

「地獄に落ちろやコラアッ——！！」

バツチーンッ

光速の左ビンタの音が、生徒会室に盛大に響いた。

訓練——なにも考えずがむしゃらにつ 3（後書き）

会長やりたい放題。なぜ地震測定器なのかは、私自身もよくわかりません。そのあたりは気にしないでください。

誤字、脱字、修正の指摘、感想をお待ちしています。

訓練——なんにも考えずがむしゃらにつ 4

「……さて、今日集まってもらった理由を説明しようか」

生徒会室地下室。ただっ広く、きれいに整備されつつも強固な印象を受けるその空間に、役員たちは移動していた。

「今日の主役は、フルミナ君。君だよ」

右頬に、先ほどオレがかましたビンタの跡をくつきりと残した黒塚が、周りに集まっていた役員たちを見回した後、最終的にオレのほうに視線を投げかけてきた。

「……………」

オレは不機嫌そうに腕を組みながら、横目でその視線を受ける。その頬は、ようやくと元の白い肌に戻ったが、先ほどまではほんのりと上気していた。

「ごめんごめん。謝るから、機嫌治してよ。じゃないとこっちも説明しづらいからさ」

にこやかに言うその言葉には、あんまり誠意というものは感じられなかった。……だが、黒塚がまともに謝ったら、それはそれでなにか恐ろしい……そう思ったオレは、大きなため息をはいた後、横方向に少しずれていた体を、黒塚の方へと向けた。

「……で、オレが主役ってのはどういうことだ？」

「そのままの意味だよ」

すると黒塚は、右手の人差し指を立てた。

「今まで君は、雷属性だけに特化してきた。一番特性が高いし、な

により最初の魔法。覚えてたことから、それ以上の器用なことはできなかったしね。まあ普通前で戦うなら、その一色特化でもなんら問題はないんだけど、君にはそれをさせるのは、あまりにもったいない」

「そこで、だ」と黒塚は人差し指に続いて、中指を立てた。

「これからフルミナ君には、雷に続いて他の属性も習得してもらう」

「……他の、属性を習得する、のか？」

「そうさ。まあ、まだ雷も満足には扱えていないから、どうしても片手間になるかもしれないけど、後々に延ばして習得そのものを遅らすよりはいいと思うんだ」

「その方が戦闘の幅も広がるしね」と黒塚は言った。それを聞いて、オレはさっきの不機嫌な気分が吹き飛んだ。

雷以外が使えるようになったら、すごいんだろうな……っ。

言いようのない高揚感が、オレの中に起こった。

「一体どの属性を習得するんだ？」

「お、やる気になってくれたね？」

黒塚はオレの反応に満足そうに微笑んだ。

「でも、その前に属性の関係について見ておこうか」

そう言った黒塚は、水穂に目配せをする。すると水穂は、手に持っていた割と大きなボードを、オレのほうに見せてきた。

そこには、風、地、水、火と中に書かれた丸が四角の四隅にあたるようにして描かれ、少し離れた場所に、同じく光、闇と中に書かれた丸が、こっちは上下に描かれていた。

「基本的には、この六つが属性の種類なんだ。それ以外の属性……たとえばフルミナ君の雷や勲也の氷は、この六属性の派生属性にあたるんだよ」

と、水穂がボードを掲げると、黒塚がいつの間にか手に持っていたさし棒で、とんとんとボードを叩いた。

あんな感じに属性を並べると、なんだか……。

「……なんか、ほんとゲームみたいだな」

「そうだね。だから補習常連のフルミ……雷牙君でも、覚えるのは簡単でしょ？」

「……なんかひっかかる言い方だが、ん……まあ、そうだな」
眉をひそめつつ、オレは同意した。……補習常連も間違ってはいないし……。

重くなる気分を、軽く頭を振り退散させる。すると虹色に輝く金髪が、舞うように揺れるのが目に付いた。

……本物のフルミナ・レーゲンは、頭良かったのかな？

「次に各属性の特徴について言おうかな」

自分の髪を一房つまんで、そう思いながら眺めていると、黒塚がさつさと話を始めた。オレは慌ててつまんでいた髪を放し、ボードを

眺める。

「えっと、まずはこれかな。火属性」

そう言つて、黒塚は火を大きくさし棒で囲った。

「火属性は、攻撃面に特化した属性だね。補助魔法が少ないけど、それに頼らなくてもやっていけるほどの破壊力を秘めた属性でもあるね。うちの生徒会で火の特性が一番高いのは、夏目君だね」

「まあ、オイラは身体能力上げたり技で使うくらいで、魔法らしい使い方は滅多にしないけどな」

黒塚の言葉に補足するように、紅汰は言った。

「次に水属性にいかがか。水は、瑞希君の特性だね」

そう言つて、黒塚は水穂のほうに手を差し出す。水穂は「ありがとうございます」と、差し出された手に、持っていたボードを差し出した。

「……水は基本的に支援、補助色が強い属性です。もちろん身体能力も上げられるのですが、前衛として扱うのは、あまりおすすめできません。後衛特化の属性とも言えますね。……ちなみに、勲也の使う氷は水の派生属性となります。もとの水の特徴とは違い、こちらは出来るだけ攻撃面に特化させたものです。火属性を少し支援、補助寄りにしたような立ち位置ですね。威力は火に劣りますが、攻撃魔法を絡めた多彩な攻撃が可能です」

淡々と水穂が説明する。オレはちらと隣の勲也を見上げたが、勲也は肩をすくめただけで、何も言わなかった。

「ありがとう、瑞希君。教科書通りつて感じの説明でよく分かったよ。それじゃあ、次に地にいかがか。これは、山城君の特性だね」
ボードを水穂に返しつつ、黒塚は山城を見た。山城は小さくうなづくだけで、無言。あはは……、と黒塚は苦笑いすると、小さく咳払

いた。

「えっと。地属性は防御特化の属性というべきかな？ 強力な防御魔法や、身を硬くする身体能力向上が特徴さ。ずっと前で戦うことも出来るし、強固な守りで後ろを守る盾にもなれる。いやはや頼りになるよ」

そう黒塚が言うと、少し照れくさいのか、山城は肩をすくめてうつむいた。その様子を、隣にいる歩美が実に微笑ましそうに――両目は相変わらず閉じられているが――見つめた。

「さーで、次は風属性だね。残念ながら、もっとも風を得意とする人ってというのが、この生徒会にはいないんだよね。風属性の魔法は瑞希君が使えるんだけどね。ちなみに、フルミナ君の雷は風の派生属性なんだよ」

「ん……」

急に話が振られて、オレは一瞬たじろいた。

「……そういえばあんた、仮面付けてたあのとき言ってたな。風属性は機動力重視……なんだっけ？」

「おお、覚えてたんだ。偉いねー」

「ム力つく反応ヤメロ！」

あははと黒塚は笑った。それにオレは少し不機嫌に逆戻りし、じっと黒塚をにらんだ。

「そう。風属性の特徴はその機動力、それに万能性さ。攻撃も出来て、遠距離魔法も、補助も出来る。戦闘の幅が一番広い、オールマイティーな属性だね。その分、特化してほどの強さを得るのは難しい属性でもあるんだけど。ただどの役割も可能な分、弱点も少ないね。雷は、風を少し攻撃側に傾けた属性だよ。稲妻のような力強さ、それが雷の特性だね」

「ふーん。なんか、俗にいう序盤強いけど、後々お荷物になつていく……みたいな属性だな」

「君の特性だよ？ 基本派生だから根つこの部分は同じだからね」

「う、ぐっ……」

なんとなく思つたことを口にするべきではなかった。いたく傷ついたっ！

「いやー、ちゃんと対策はあるよ？」

「……ほんとか？」

「うん。用は全部特化属性に負けなくらいの性能にすればいいのさ」

「それを人はチートと言うんだよっ！！」

「いいじゃない、チート。カッコいいよー？ 主人公補正だよー？」

とわけのわからないことを黒塚はほざく。確かにチートがあれば楽だろうけど。

「要は使いようってことだよ。どこでも戦えるってことは、それだけ前後両方の戦略に参加することができるってことさ。いるといないのでは、結構変わるもんだよ？」

「……そういうもんか？」

「そういうもんさ」

黒塚の補足説明に、オレは釈然としないながらも一応納得はした。風って、一番難しい属性なのかもしれない。

「ま、次に行こう。あとふたつ。次は光属性かな。これは日向君の特性だけど、実は光が特性って、結構珍しいんだよね」

「あ、そうなんですか？」

楓が驚いたように言うと、黒塚は頷いた。

「そうさ。光属性っていうのは独特な魔法で、範囲がやたら広いんだ。それに、支援・補助も優秀だし、攻撃魔法も威力が高い。後衛のスペシャリストってとこかな。まあ、そのぶん水属性に比べて燃費は非常に悪いけどね。それと光属性が特性って子は、大体他の属性は使いにくいんだよね。よく理由は分かってないんだけど。現に日向君も、光属性以外はからっきしでしょ？」

「そう、ですね」

少し考える素振りを見せた楓だったが、やがてこくと頷いた。

「……とまあ、こんな感じでー。次は属性の関係に――」

「っておいおい、まだ闇が残ってるだろうが！」

さりげなく話を先に進めようとした黒塚に、慌ててオレはボードを指さしながら言った。それに黒塚は露骨に嫌そうな顔をする。

「えー、いーじゃん。どうせ闇なんて興味ないでしょ？」

「あんたの属性だろうが。一番説明しやすいんじゃないのかよ？」

「自分の属性だから洩ってるのにー」

「別にあんたに『恥ずかしい』なんてまともな感情ないだろうか」

「失礼だなフルミナ君。これでも僕はかなりのシャイボーイなんだよ？」

「……どの面下げてそんなことを……」

「……闇属性――」

と、オレと黒塚が問答を繰り返していると、不意に勦也が口を開いた。

「……主に相手の動きを奪う魔法を得意とする。また『呪い』という、全属性の中で最強の間接攻撃を有する属性でもある。攻撃魔法に秀で、機動力も風の次点にくる。ただ、その他の身体能力向上の恩恵は、同じ闇属性でも個人差が出る特異な性質を持つ……だったか？」

最終的に皮肉気に口元をゆがめながら、勦也はじつと黒塚を眺めた。黒塚は、珍しく困った顔をした。

「……さすが勦也、よく分かってるね」

「俺は馬鹿じゃないからな」

ふん、と勦也が鼻を鳴らすと、黒塚は口元を悔しそうにゆがめた。

……それにしても、闇属性ってその名の通りだな……、呪いって。

その上、拘束魔法ねえ……。

「ほら、勦也がそんなこと言うから、フルミナ君が僕を冷たい目で見てきてるじゃないか」

「知らん」

「よく見てよ、あの眼。『あー、なんかこいつらしいわ』的な眼だよー」

「さりげなくひとの心を読むんじゃないっ」

一字一句同じことを考えていた。これも闇属性の魔法の一種なんだろうか？ もう怖いんだけど。

「あー、大丈夫だよフルミナ君」

そう言つて、黒塚はにこやかな顔に戻り、軽く手を振った。

「僕が拘束するのは、基本的に可愛い幼女だけだから」

「そのどこが大丈夫なのか、オレは激しく問いただしたいっ!!」

「そんな激しくなんて……フルミナ君大胆だね」

「お巡りさん！ この変態をなんとかしてしてください!!」

オレは生徒会役員しかいないことを分かっているながら、それでもそう叫ぶことを抑えられなかった。

てかよく考えると、一度拘束されたオレは……つまりは可愛い『幼女』に分類されてるのか？

くっ、ナリ的に地味に否定できない！

「……とまあ、冗談はこれくらいにして」

「冗談がすぎるわっ」

「……本音はこれくらいにして」

「その言い直しっ!? 余計質悪たちくなつたし!!」

「しがない僕の願望さっ」

「そんな犯罪願望持つんじゃないええ!」

「……いちいち反応すると、疲れるだろ」

ぜーはーぜーはーと肩で息をするオレを見下ろしながら、勦也がさりげなくつぶやいた。

訓練——なにも考えずがむしゃらにつ 4（後書き）

長かったり短かったり、安定しなくて申し訳ないです。

この話は、基本的に魔法についての説明になりましたね。各属性の特徴は、私個人のイメージなので、違和感を覚えるところもあるかもしれません。

誤字、脱字、修正の指摘、感想をお待ちしています。

訓練——なんにも考えずがむしゃらにつ 5

とにかく、いちいち話の腰を折っていたら進まない。オレは出来るだけ黒塚の悪ふざけに反応しないように努めた。

そのせいではないだろうが、次の属性の関係については割とスムーズに進んだ。オレが理解した限りのものを、かいつまんで説明しよう。

まず各属性は、火と水、地と風、光と闇。この三つのグループに分けられる。これらは互いに相反属性と呼ばれるペアだ。ゲーム的に言うと弱点属性。攻撃を受けてしまうと、それ以外の属性以上に大きな傷を負ってしまう。だから相反属性と戦う場合は、よほどこちらに有利な状況でないと、危険らしい。基本は相反属性との戦闘は避けたほうがいいとのこと。

ちなみに派生属性は、基本は同じだが、少し違う部分もあるという。例えばオレの雷。雷は、風の派生属性だ。故に地属性のやつとの戦闘は極力避けるべきなのだが、地属性の派生属性である木属性とは、相反関係ではない。つまり普通に戦えるというのだ。……地味にややこしいと思うんだよなこれが。

とまあ、大まかに言えばそういう話であった。徐々に慣れていってほしいとのこと。

「さて、座学はこれくらいにして、ちゃっちやと実戦練習をしようか」

ぱちん、と伸縮可能なさし棒を短くして、黒塚はオレのほうを見てきた。

「基本的にフルミナ君は、今のところ前衛よりだから、次に覚えてもらう属性は火にしようと思ってるんだ」

「……火、か」

オレがぼそつとつぶやくと、黒塚は頷いた。

「そう。で、やっぱり一番特性の高い人に教えてもらうのがベストだと思うから、今日から夏目君をコーチとして頑張ってるね」

「え！？ オイラが教えんの！？」

「そう言ってるじゃないか」

「頼むよ、夏目君？」と黒塚はぽんぽんと紅汰の肩を叩いた。紅汰はいかにも困ったという顔をオレに向けてきたが、そう言う顔を向けられても、オレも困る一方だった。

「じゃ、他の人はいつも通り魔法の訓練でもしてようか」

オレと紅汰から離れながらの黒塚のその声に、みなばらばらとついていく。楓なんかは、オレのほうを気遣わしげに見つめてきたが、黒塚の話が始まるとさっとオレから目を離れた。

生徒会メンバーから、オレと紅汰二人がはみ出た形になる。

「……えーと。……どうすんの？」

「いや、オレに言われなくても……」

オレと紅汰はそろって頬をかきながら、ちらと視線を合わせる。

「……………んー、まあ。とりま、実戦あるのみじゃね？ 習うより慣れろってやつ」

しばらく考え込んだ後、紅汰はそう言って小さく右手を振った。

すると、紅汰の手が赤く光ったかと思つた瞬間、紅汰の手の内に鮮やかな紅色を基色とした、細身の装飾槍が現れた。これは紅汰曰く『潜器』という魔法をアレンジした特殊技能らしい。

武器をそれを構成する魔力因子に分解して、普段は自分の体の中に取り込んでおく、と言うもの。要は、出したいときにいつでも武器が出せる、便利な術ということだ。

紅汰は昔『師匠』教えてもらったと話しているが、詳しい話は聞いていない。今では、生徒会役員全員が、この『潜器』を覚えている……いや、オレはまだだったな。だってまだオレ木刀だし。木刀くらいなら普通に持ち運びしても、他の役員の武器と比べたら悪目立ちすることはない。そんなに持ち運びもしないけど。『潜器』を使うのは、いづれ黒塚がくれるという、オレ専用の双剣が手元に来てからと、オレ自身勝手に決めているからでもある。

「……それは、実際に受けてみてモノにしろ……てこと？」

「そういうことだ」

オレがいぶかしげに尋ねると、紅汰はそう返してきた。

……いや、それ結構ハードな気が……

「ほら、手加減はしてやるから。木刀持ってきて構えな」

ぶんぶんと槍を頭上でいくらか回した後、紅汰は右肩にその槍を置き、槍を持っていない左手をズボンのポケットに突っ込んだ。

……まあ、この人に詳しい説明を求めても無駄か。（オレ同様）成

績悪いらしいし。

オレは小さくため息をつきながら、近くの壁に立て掛けている二振りの木刀の元へ、小走りで移動した。その木刀を手にとってみると、勳也と何度も稽古したせいですいぶんと傷んできていることがよく分かった。

これだけやってるのに、なんで一度も勳也に勝てない……以前に一発も当てられないのか？

勳也曰く、練習量もあるが、それ以上にオレの戦い方が悪いとのこと。変に考えすぎだとか。よく分からないが……。

「おーい、はやくしろー」

まじまじと木刀を眺めていると、後ろから紅汰のせかす声が聞こえた。慌ててオレは先ほどの位置まで木刀片手……両手に、戻る。

「地味にお前と手合せするの、初めてだったなそういえば」

「……そう、ですね」

改めて考えるとそうなるな。基本的に手合せは勳也とやっていたし。

「ま、お前の速さには興味があつたしな。それでもお前が来るまでは、オイラが一番速かつたんだぜ？」

言いつつ、紅汰はすつと腰を下げやや前傾姿勢になる。そして肩に担いでいた槍を右手でしっかりと握り、左手は軽く槍に沿えるように構える。矛先はオレの足元のあたりに向けられる形になった。

オレも紅汰のその動きに、左足が軽く前に出でた半身で腰をため、前にある左の剣を横に構え、右手の剣は少し下げたところにあるのだが、左の剣に垂直に交わるような角度で構える。

「さあて、そろそろ始めるか。……っ！」

オレが構えを取ったのを見届けたところで、紅汰から一気に魔力の波動がほとばしった。まるで炎のような荒々しい強さを持った波動だ。

「これがオイラ流の魔法の使い方だ！」

紅汰が吼えた。その瞬間、紅汰の持った槍がうねる炎に包まれた。

「なっ!?!」

オレはリアルに伝わる炎の熱波に驚きとともに思わず顔をしかめる。その反応に、紅汰はにやつと口元をゆがませた。

「ふふん。師匠直伝『紅蓮槍』だ」

ぶんっ、と紅汰は横に大きく槍を振る。その槍を追うように紅蓮の軌跡が紅く続いた。

「……行くぜ!!」

再び吠え、紅汰は最初の一步を踏み出し一氣に加速した。

「え！？　ちょっ、うわっ！？」

流石にこれまで一番速かったという話は伊達じゃなかった。紅汰のスピードは、身体能力の上げたオレが、辛うじて反応できるほどの速さだった。

慌ててオレは『光速』で横にそれる。直後、下方から突き上げるようにのびてきた紅蓮の槍が、オレのすぐ横をかすめる。息苦しさを感じる空気が、一瞬オレの周りを包み込んだ。

「おいおい、避けるだけじゃわかんねえだろ？」

「いや、そんな炎こんな木刀で防げるわけないだろ！」

たまらなくなつて、大きく一步その場から離れたオレは、不満げに言ってくる紅汰に、彼の槍を指さしながら抗議の声を上げた。

「んなことないらしいぜ？　会長が言ってたぞ。確か……」

「……たしか？」

「……」

「……」

「忘れた」

「うおいつー!!」

超大事なことを忘れんな！ 下手すりゃオレの命がかかってんだぞ！？ てか、自分も知らないことを、魔法使い始めて一か月のオレに求めるな！！

ははは、と苦笑いを浮かべ頭をかく紅汰に、オレは思わず地団駄を踏む。

「いいじゃん。今会長そこにいるから、改めて聞けばいいんだからよ」

「いいけど、よくないっ！」

「悪い悪い。ほれ、さっさと聞いて来いよ」

「……………待ってる」

「……………あのさー、いつも思っただけど。お前オイラより後輩なんだから敬語を——」

「待っててくださいーっ!!」

舌打ちでもする勢いの荒々しさで、オレは紅汰に先回りして怒鳴った。そのあと紅汰に背を向け、黒塚のほうに向かって行った。

……………後の紅汰の言い分。

『そんな可愛い顔で凄まれても、怖くねーし、むしろ微笑ましいだけだったぜ?』

……………小さな女の子って、こんなにもストレス溜まるんだな……………。

そう思ったオレでした、
まる。

訓練——なにも考えずがむしやらにつ 5（後書き）

この派生属性も合わせた魔法の属性の関係は、意外と厄介ですね。
自分で決めておいてなんです。

誤字、脱字、修正の指摘、感想をお待ちしています。

「『待つててくださいーっ！』だって。可愛いねっ」

「……開口一番にそれかよ」

少し離れた壁際で、なにやら一人なにもせず寄り掛かっていた黒塚の元に行くと、先ほどまでの無表情からうって変わって、嬉々とした声がオレを迎えた。

「……んなことよりも、さっきの話聞いてたか？」

あまり紅汰を待たせるわけにもいかないし、なにより歯が立たないのが悔しくて、オレは黒塚の揶揄に怒りと羞恥に軽く頬を染めながらも、無視して本題を聞き出そうとした。

「ああ、その木刀であの炎を防ぐ方法かい？ あるよ」

すると黒塚は、冗談を引つ張らず、割と簡単に真面目な返答をしてきた。

「夏目君がやっている『紅蓮槍』……まあ、あれと類似した使い方はいくらでもあるんだけど。それらの元となる技術なんだけどね。うまく魔力を武器に操作して、武器そのものがある程度強化するっていう技術があるのさ」

「そうなのか？」

「そうさ。まあ、今回の場合『魔力に対する抵抗力を付加する』と言った方がいいかもしれないね。普通にあの炎に斬りかかったら、木刀が燃えてしまう。けど木刀に、炎に対する魔法的施しを加えると、炎に斬りかかっても木刀が燃えなくなるのさ」

「へえ、魔法にはそんな使い方もあるのか」

黒塚の説明を聞き、オレは魔法の幅広さに改めて驚く。

オレの今まで考えていた『魔法』というものは、所謂ゲームなどでよく出てくる、派手なエフェクトで敵をなぎ倒すあれだ。しかし実際の『魔法』は――まず実際に存在していたこと自体が驚愕の真実であつたのだが――そのような使い方だけではなく、身体能力を上げたり、武器の強化に用いられたり、いたく幅が広い。何でも『魔法』で片づけられる、といつても過言ではないのかもしれない。

「どうやったらそんなことが出来るんだ？」

オレがそう聞き返すと、黒塚は自分の顎に軽く指を這わせた。

「んー。僕は前衛で戦わないから、あまり使つたことはないから詳しくは言えないけど。基本は身体能力を上げる時と魔力の使い方は同じ、あとは……イメージかな？」

「イメージ……」

「そ、イメージ。実はね、魔法つてイメージによるところが大きいんだ。経験ない？」

言われてオレは少し考える。

……確かに、言いたいことは何となく分かる気がする。オレも『光速』を使うとき、『魔力を注いで速くなる』というより、『速く動きたいから魔力を注ぐ』といった感触の方が強い。

『こうありたい』というイメージを『魔力』を使って具現化したものが『魔法』。……黒塚の言いたいことは、こういうことなんだろうか。

「……なにか掴んでくれたみたいだね？」

「……なの、かな？」

オレはそうつぶやきつつ、うつむいて両手の剣に目を向ける。

そして、イメージする。

……炎に挑んでも、燃えることのない……。

「……あつ」

不意にオレは『魔力的』手応えを感じた。見ると木刀の表面が、わずかに光っている。まるで表面に何かコーティングされているかのようだ。

「さすがフルミナ君。ものにするのが早いね」

軽く拍手をしながら、黒塚がにこやかに言った。オレはゆつくりと顔を上げる。

「……これが、そうなのか？」

「うん、そうさ。その状態なら、夏目君の本気度にもよるけど、炎の中でも耐えてくれるはずだよ」

「そう、か……」

オレは魔力的手応えを感じる木刀を改めて眺める。薄く光る木刀を眺めていると、自然と、顔がほころんできた。身体能力を上げる術を覚えたり、『光速』を使えるようになったときよりも、ずっとクリアな感じた。

……イメージを具現化したのが魔法……か。

「……どうだい？ いけそうかい？」

黒塚がオレの顔をうかがうように首を傾ける。その問いにオレは――

「……いけるっ」

顔を上げ、自信に満ちた表情で答えた。それに黒塚は「それはよかった」とにこやかに答えた。

「……あー……それで、だ。……会長」

オレは紅汰の元に行こうと体を反転させようとしたところ、その半分――九〇度回転したところで立ち止まった。視線を下げ、目を泳がせる。

「？ なんだい？」

「え、いや……その」

……癪に障るが、言わないわけにもいかない、よな。

オレは言いにくそうに、横目で黒塚に視線を送る。

「……一応、礼を言っとく。……ありがとな」

しびしびといった感じで口をとがらせながらも、オレはしっかりとそう言った。

「……」

すると、黒塚の動きが止まった。……いや、かすかに震えている感じが？ とにかく、黒塚からの反応がなくなった。

「……かい、ちょう？」

オレは恐る恐る黒塚に声をかける。すると会長はゆっくりと壁のほうに体を向ける。

そして――

「うおおおおおきたあああああああ――！」

「うわっ」

両手でガッツポーズをとりつつ、吠えた。突然の奇行に、オレは黒塚に向き直り慌てる。

「ちょ、な、なに――!?」

「ついに……ついに――！」

オレがあわあわしていると、黒塚が血涙でも流さん勢いで叫んだ。

「ついにフルミナ君がデレてくれた――!!」

「だあああつ、だからこいつには礼を言いたくなかったんだあ――!!」

オレは木刀を振り回しながら怒鳴った。木刀を持っていなかったら、頭を抱えていたことだろう。

「っ、とにかく！ 行ってくるっ」

黒塚の叫びに、遠くで皆がオレたちのほうに視線を寄越していた。その視線には、『またか』的な要素がふんだんに盛り込まれているようだった。紅汰なんかはあきれつつも、早くしろよと言いたげな視線をオレに投げかけていた。オレはそれに気付き、さっさと方向転換する。

「フルミナ君」

すると、さっきまでの馬鹿叫びが嘘のように落ち着いた口調で、黒塚が呼び止めてきた。オレは思わず立ち止まって肩越しに黒塚を振り返る。

「出来れば今日のこの訓練で、もう一皮むけることを期待しているよ」

「……一皮、むける？」

黒塚の言っていることがよく分からない。

……一体あいつは何を言いたいんだ？ 今日のこの訓練でもう一皮むける？ ……だめだ、分からん。火を使えるようになってことか……？

明確な答えは出ない。だが、黒塚に聞き返すような気分でも状況で

もない。オレは釈然としない気持ちを抱えながら、黒塚から視線を外し、止めていた足を動かして紅汰の元へと急いだ。

訓練——なにも考えずがむしゃらにつ 6（後書き）

誤字、脱字、修正の指摘、感想をお待ちしています。

訓練——なんにも考えずがむしゃらにつ 7

黒塚の元を離れ、紅汰のところに行くと、紅汰はやれやれといった感じで肩に置いた槍をとんとんと上下させた。

「相変わらず会長に好かれてんな」

「……うれしいと思います?」

「……思わねえな」

嫌そうな顔でオレが聞くと、紅汰は微妙な目をオレに向けてそう言った。

……そんな同情するような視線はやめていただきたい。

「それはそれとして。どうだった?」

まっすぐ立っていた紅汰は、右足に体重を乗せ重心を変えた。

「……こんな感じです」

そう言い、オレは右手の前に突出し、目の前を横切るように木刀を横に向けた。そして目をつぶり、先ほどのように自分の中のイメージに集中する。

「……っ」

すると、ほどなくして木刀から魔力的手応えを感じるようになった。ゆっくりと目を開けると、目の前の木刀は、うっすらと光をはなっていた。

「おお、すげえな。話聞いただけでそこまで……って、まさかもっ知ってたとか?」

「いや、さっき初めて知りましたけど」

「……平然と言いやがったよ、コイツ……。オイラは何日かかったか分からねえくらいなのに……」
紅汰はそう言いつつも、わずかに尊敬といつか羨ましそうな顔をした。

「まあいいや。……じゃ、仕切り直しだ」

紅汰は小さく頭を振った後、再び槍を構える。すると呼応するように、炎が槍にまとい始めた。それを見届け、オレはぐっと木刀を握った後、ゆっくりと構えをとった。

「よしっ、行くぜ!!」

そう吠えた瞬間、紅汰は一気にオレとの距離を詰めてきた。今度は先ほどの下からではなく、まっすぐに槍がのびてくる。それとともに襲い掛かってくる炎。

「もう炎は怖くないっ」

身体能力を上げたオレからは、その槍の動きがはっきりと分かる。オレは右手の木刀で肉薄する槍の腹を弾いた。槍はオレに当たる軌道から逸れ、紅汰とともにオレの右を過ぎていく。

「さすがの反応だよなっ」

言いつつ紅汰は、背後から槍を横に振ってくる。槍の先は斬撃も出る仕様だが、迫ってくるのは槍の長い柄の先の部分だ。切れはしないが、あれを食らったらしばらく立てはしないだろう。

「……っ」

どちらの木刀で受ける？

速さ的には避けるのは賭けになる。すぐさま受けることを考えたオレは、今度はどちらの木刀で受けるか考えた。

「くっそっ」

オレは右足を軸にして一八〇度回転しながら、背中越しに切り上げるように、右手の木刀で応戦した。

ガツンと槍の勢いを殺した衝撃と、炎を防ぐ魔力的衝撃が一気に押し寄せる。

「うぐっ……」

予想以上の衝撃にオレは顔をゆがめる。

炎の威力が地味に強いっ。

オレは木刀にそそぐ魔力をさらに増やす。すると、多少炎の重圧が軽減されたような感じがした。だが、どっと体の力が吸い取られるような感覚を覚える。

「おいおい、もうそんな顔すんのかよ」

オレが振り返り、向き合う形になったところでオレの顔を見て、紅汰が拍子抜けといった様子で言った。

「うる、さい……」

オレはしびれる右手に軽く左手を添える。

「……ちよつと、暑かったただけだ」

小さく頬に汗が伝う。そう言い張って、オレは右手に添えていた左手を、前に構えた。

「……ま、最初はそんなもんか。ほれ、次の一撃はてめえに譲つてやるよ。かかつてきな」

紅汰は軽く身構えたまま動かない。オレはその言葉に、ぐっと足に力を込める。

「……目にももの見せてやる!!」

そして一気に右足を踏み込む。

「うわっ、速っ!？」

『光速』を駆使したそのダッシュは、紅汰には予想以上のものだったらしい。一瞬ひるんだようだったが、オレが目の前で右の木刀を振り下ろしたのには、しっかりと反応してきた。

「やっぱ、遠くから見ると実際見るのとでは、全然違うなあ!」

「そりやどうもっ!」

興奮した様子で言った紅汰に、オレはそう返しつつ左の木刀の処理を考えた。

右は今、槍を防いでいて使えない。言いかえれば、右手が槍の動きを封じている。

だったら、左はがら空きの胸を狙う!

「はあっ!!」

オレは気合の声とともに、左の木刀を下から斜めに切り上げるように振り上げた。

「……っ」

それに紅汰は右肩を下げて、刃先の方ではない槍の先でオレの木刀を防いだ。

連続で左を動かすのは無理。だったら……。

オレは素早く右手を引いて、木刀を前に突き出した。それに紅汰は無言で右に移動して避ける。

これ以上は、ちょっときついか。

一度オレは『光速』で紅汰の横を通り抜け、仕切り直しをしようとした。

「……あっ」

だが、左の木刀の押す力を弱めたところで、紅汰が右手を突き上げた。それに伴って、槍がオレの木刀を上弾いた。

「でえりゃっ！」

そのまま槍を回転させて、紅汰は器用に持ち替えた。そして今度は刃先を切り上げる。

くっそ、右で応戦を……っ、だめだ、間に合わない！？

オレはぴくっつと右肩を動かしたが、最終的に右方向に転がることで、襲い掛かる槍を回避した。

ガッンッ

転がったところから起き上がろうと手をついたところ、すぐ横から紅汰の槍が床に突き刺さる音がした。

「……なるほどな」

刃先が軽く床に埋まつている槍を伝って上を見上げると、なにやら真剣な顔をした紅汰と目があつた。

「な、なんだよ……？」

いきなり『なるほど』と言われても訳が分からない。オレは不審げに紅汰を見上げた。

「いや。オイラ結構気になつてたんだよな。あんなスピードがありながら、なんでてめえはあのイケメン野郎に一発も当てられないのか。そりゃ、あいつはなんか会長の知り合いでスゲー強えし、てめえはド素人だから仕方ねえとも思つたよ。でも、ド素人でもそのスピードで何回も戦つてりゃ、一発くらい当てられるんじゃない？ そう考えてたんだが……なんとなく分かつたわ」

ずぼつと槍を床から抜いて、その先をオレの顔の前に向けて、紅汰は言い放つた。

「今のまま戦つてても、てめえはあいつに一発も与えられねえよ」

訓練——なにも考えずがむしゃらにつ 7（後書き）

誤字、脱字、修正の指摘、感想をお待ちしています。

「……どういう、ことだよ？」

紅汰の予言めいた物言いに、オレは驚きを隠せない。同時に、あれだけの手合せだけでそう断言されたこと、そして実際に一発も当てられる気配がないという現段階を手痛く指摘されたことに、ちいさな苛立ちを覚えた。

「てめえの持ち味は、なんだ？」

オレの心情を知ってか知らずか、紅汰は強い口調で責めたてるように言う。

「オレの……持ち味。それは——」

「聞くまでもねえ、スピードだろ？」

オレの言葉をわざと遮るようなタイミングで、紅汰は言った。

「……聞いてきたのはそっちだろうが」

オレは今にも舌打ちしそうになる。

しかし、不利な体勢なのはこっちだ。その状況がオレの怒りをさらに加速させる。

「てめえ、自分の持ち味をさっぱり活かしきれてねーんだよ。何考えてんのか知らねえけど、いちいち攻撃の時に止まりやがってよ。手加減のつもりか？ なめてんじゃねーぞ？」

追い打ちをかけるように、紅汰が挑発的な口調でそう言った。

「……ム力つくっ！」

オレはそう吐き捨てながら、目の前にある槍の刃先を無造作に横に弾いて、苛立たしげに立ち上がった。

「なんだ、凶星をつかれて言葉もないってか？」

「黙れよ、てめえ」

オレはキツと紅汰を真正面からにらみつけた。オレのその視線に、紅汰は不敵な笑みをこぼす。

「さっきから聞いてりゃ、いちいちム力つく言い方ばかりしやがつて。ああわかってるよ、あんたに指摘されなくてもそういう気があんのな。だったらそれだけ指摘すりゃいいだろうが。いちいち一言多いんだよ、ぶっ潰すぞ？」

オレは怒りを前面に押し出して、呻くように言う。もはや、今自分が女の子であることなんか関係ない。気分的には、つい一か月前のケンカばかりしていたあの時のようだ。

「ああ、潰してみろよ。オイラはてめえの攻撃なんか、一発も食らわねえ自信があるけどな」

すると紅汰は、槍を肩に担いで余裕の表情で手招きをしてきた。そこでオレの怒りは爆発する。

「ざっけんな！！」

オレは瞬時に木刀に魔力を込めて、同時に『光速』を使い紅汰に襲い掛かった。

「くそがつ！」

もう何も考えずに、オレは紅汰の目の前で軽く跳躍し、右手の木刀を紅汰の頭に振り下ろした。それに紅汰が炎をまとった槍で応戦する。ガツンと、物体がぶつかり合う鈍い音と、魔力が衝突しあう甲

高い音があたりに響いた。

「どうした？ オイラを潰すんじゃないのかあ！？」

「ちいっ！ 望み通りぶっ潰してやる！！」

オレは打ち付けた右の木刀にさらに力を籠め、その反動で大きく後ろにジャンプした。そして、地についた途端、再度『光速』で紅汰に肉薄する。

「はあぁっ！！」

目前まで迫ったところで、オレは左肩のほうまで引いていた右腕を一気に振り払う。それに紅汰は、上にあげていた槍の先を小さく下げて防いだ。

「っ！」

その衝撃を確認した直後、オレは迫った勢いのまま、左足を大きく踏み出した。それと同時に、左の木刀を紅汰のわきの方に叩きつけるような軌道で振る。

「っ、はええ！」

その攻撃に、驚いたような表情をした紅汰だったが、すぐさま右足を引き、時計回りに槍を半回転させて、その木刀を受けた。

だが、そこでオレの攻撃は終わらない。

紅汰が足を引いて空いた空間に、オレは右足を踏み入れた。すると、紅汰と槍との間に、オレの足が割り込む形になる。そのままオレは、今度は右手の木刀で、槍の内側に斬撃をお見舞いした。槍が少し上に弾かれ、紅汰の左側面がから空きになる。

「食らえっ！！」

オレは左足を引き、弧を描くようにその左足を紅汰の体の前に置いた。呼応して、左手の木刀が、弧を描きながら紅汰の左側面に襲い掛かる。

「なめんなっ！」

オレの声に負けじと紅汰も怒鳴った。器用に左手の返し槍を握りなおして、くつと、槍の刃先を突き上げた。キンッと、今度は魔力のせめぎ合う音が強く響いた。

「っあああああ！！！」

オレは高い声を張り上げる。するとオレの声に反応するかのように、バチンとオレの木刀から火花が散った。

「んなっ！？」

驚いた表情をして、紅汰は一気にその場から離れた。そして少し距離を置いたところで、意図せずこぼれたように、つぶやく。

「……信じられねえ。とつさにんなことまで……っ」

紅汰は、じっとオレの対なる木刀を眺めた。

木刀には、紅汰の槍に炎がまとうているのと同峙するように、ぱりぱりと攻撃的に弾ける、薄紫の電気が付加されていた。

と、その薄紫の電気が形を霞ませ、一本の光の軌跡になる。

「うおっ」

とっさに紅汰は首を横に傾ける。一瞬後に、オレの右の木刀の突きが、空気を切り裂くような鋭さで通り過ぎた。

「くそっ！！」

オレはがむしゃらに前方に魔力波を放つ。すると、とてつもないスピードが激減した。

「食らえっ」

オレは紅汰の横を通り過ぎた後空中で一回転し、地面に足をつけた瞬間、振り向きざまに左の木刀を切り上げる。

「くっ」

紅汰は辛うじてそれも槍で防いだが、とっさの行動で体勢が悪い。紅汰の体勢が悪いとみるや、オレは怒濤の連撃を試みた。

「だああああっ！！」

眼にも留まらぬ速さで、あらゆる方向から双剣が振られる。

「……っ」

もはや言葉を発する余裕すらないのか、紅汰は必死の形相で、紫電の軌跡を防いだ。

コンマ数秒単位で木刀と槍の攻防の音が響く。

「しまっ——」

不意に紅汰が短く呻いた。

あらゆる方向からくる攻撃を、手元で持ち替えながら対応していたために、速さについて行かず手を滑らせたのだ。

「ちよっ、タンマ!？」

何とか片手で数発処理し、隙を見て紅汰はその場から離れる。だが、オレはそれに反応してぴったりと紅汰の動きについていく。

「やべ——」

紅汰は未だに持ち直せていない。

「はああああ!!」

オレはがら空きの紅汰の胴目がけて、引いていた右の木刀を一気に前に突き出す——

訓練——なにも考えずがむしゃらにつ 8（後書き）

戦闘、なかなかうまく描写できません。

そして、何気に沸点低いぞ雷牙——フルミナ。

さらには、中途半端な切り方をして申し訳ありません。

誤字、脱字、修正の指摘、感想をお待ちしています。

訓練——なんにも考えずがむしやらにつ 9

「はい、そこまで」

……が、オレの木刀は紅汰に届くことはなかった。

「やれやれ、分かってやってたことだけだ。君たちは熱くなりやすいね」

「……っ、うつわ！　なんだこれ！？」

紅汰に木刀が届く寸前に、オレの腕がなにかに拘束され動きが封じられた。何事かと、オレは急いで自分の手元を見て、あやうく腰を抜かしかけた。同時に木刀にまとうていた魔力が小さく弾け、電気も、薄く光ることもなくなつて、ただの木刀に戻つた。

突き出したオレの右腕には、光をも吸い込みそうな漆黒の光の縄が巻き付き、地面に固定されていた。

腕にあざが出来て、やがて死にいたっちゃう呪いでも受けてしまいそうなその漆黒の縄は、よく見ると腕だけではなく、両足や、それに胴にまで巻き付いていた。

「お、おい！　てめえの仕業だろ。どういふつもりだ！？」

オレは必死にその縄を引き千切ろうと腕を動かしながら、いつの間にかオレと紅汰の間付近まで歩いてきていた黒塚をにらみつけた。

「だから、そこまでつて言つたでしょ？　君たちはどうせ熱くなつて聞きそうになかつたから、こういう手段をとつたんじゃないか」
「だからって……もつとましなデザインはなかつたのか？　まさか取つたら黒いあざとか出来てねえだらうな！？」

「大丈夫だよ。そんな仕掛けはないから。とりあえず落ち着いてもらうために拘束させてもらったんだ、ゆっくり深呼吸でもしてよ」
「……………」

なんか、急に冷や水をかけられたような感じだぜ。まさに怒りが水をかけられた火のように、小さくなってくすぶった感じになってしまった……。

オレは複雑な心境を抱きつつ、言われた通り軽く深呼吸する。すると、今まで躍起になって見えていなかった周りの景色が、よく見えるようになった。

気づいたら、地下にいる生徒会役員全員がオレらの試合を見ていたようで、みんなの視線がすべてオレと紅汰のほうに集まっていた。みんな、どこことなく驚いたような――

「こいつは熱くても、オイラはいたって冷静だっ。なんでオイラまでこうなってるんだよ!？」

その声に、オレは紅汰のほうを見た。どうやら紅汰もオレと同じくこの気持ちの悪い漆黒の縄の餌食にされたようだ。振りほどこうと必死に手足を動かしている。改めて見ると、この縄はひどく気味が悪い。うへ…… オレもあんな感じにつかまってるんだろっな。すごいイヤだわ。

「……………ふむ」

騒ぐ紅汰をそっちのけで、黒塚はなにやら考え込むようにオレの方を見てきた。オレは動かない手足で何かするのを諦めて、代わりに早く解けと、黒塚をにらみつける。

「なんだよ?」

「いや、ね」

すると黒塚がほんのりと赤くなりながら、真面目な顔で答えた。

「なんか今のフルミナ君、触手に絡まれて今にもアレされそうな感じに見え……」

「ほどけええっ!!」

オレはさつき以上にこの縄を引き千切ろうと躍起になった。

「冗談だよ、冗談」

「だったらあんなマジな顔して言うんじゃねえ!!」

「顔が赤いけど、言われて興奮した？」

「してねえ! あんたへの怒りで頭に血が上っただけだつ。断じて他の理由じゃねえ!!」

そう、違うぞ! 絶対違うんだからなっ!!

「はいはい。そういうことにしといてあげるよ」

「だから、違うと……っ」と

やれやれと首を振る黒塚に訂正を求めようとしたところで、漆黒の縄の拘束が瞬時に解けた。急なもので、オレは二、三步前によろけた。

「いつてえ……おい会長! 急に解くなよ!」

とそこで紅汰が怒鳴り声をあげた。見るとオレ以上に力を籠めていたのか、紅汰は勢い余って前に倒れこんでいた。

「早く解いてほしそうにしていたのは、そっちじゃないか」

「確かにそうだが、せめてなんか合図を……」

「それよりも、フルミナ君」

急に黒塚は、話の矛先をオレに変えてきた。うがー！！ と紅汰はなにやら怒り声を上げたが、黒塚はガン無視。オレは突然話を振られて、一瞬固まった。

「君は僕の予想以上の成長をしてくれたよ」

「……？」

にこやかに言う黒塚のその言葉に、オレは困惑する。

「なんか、あつたか？ よく覚えてないけど……」

「いやいや、すごくあつたよ。君は今さっきの試合で、二つのことを学んでくれたはずだからね」

「……二つ？」

何か学んだことなんて、あつたか？ しかも二つも……？

オレは首をかしげながら尋ねると、黒塚は頷いた。

「そうさ。一つは、武器に雷を付加させたこと。無我夢中だったんだろうけど、一度やってみせたんだ。きっと今でも出来るはずさ。ちよっとやってみて」

言われてオレは、そういえばと木刀を見下ろした。

確かにあの時は無我夢中だった。なんかもつと威力がほしいと、心の奥底で考えたのはなんとなく覚えているが、それも不透明だ。正直言って、偶然できたといった感じが強い。果たして再び出来るのかどうか……、

「……うわっ、出来たし……」

頑張つてその時の感覚を再現しながらも、半分以上ダメもとで試したことだった。だが、予想に反して、木刀は先ほどまでのような薄紫の電気をまとい始めた。ちゃんと木刀から魔力的反応もある。

「ね？」

「あ、ああ……」

オレは自分のやったこととは思えないといった気分で、帯電する木刀を眺めた。

「で、二つ目なんだけど」

黒塚が次の話に移るようだ。オレは魔力を制御して、木刀へ流れる魔力をなくした。すると、木刀も帯電しなくなり、普通の木刀に戻った。

おお、すげえ。本当に使えるようになったみたいだ。

「……いいかい？」

「……え？ あ、ああどうぞ」

しげしげと木刀を眺めていたオレは、慌てて黒塚の方を向いた。「ま、気持ちには分かるけどね」と黒塚は肩をひそめた。

「こほん。……二つ目は、戦い方さ」

びしっと、黒塚はオレを指さしてきた。

訓練——なにも考えずがむしゃらにつ 9（後書き）

誤字、脱字、修正の指摘、感想をお待ちしています。

「こほん。……二つ目は、戦い方さ」
びしつと、黒塚はオレを指す。

「今までの君の戦い方は、夏目君が言ったように、自分の強みを全く発揮できないものだったんだ。でもさっきの戦いでは、君の強みである速さが存分に発揮されていた。どこが違うか、分かるかい？」
「違い、って……」

何故今までは速さを活かすしきれなかったのか。そして、その速さが活かすきれていたというさっきの戦いでは、今までとは何が違ったのか。

オレは少し思案してみる。

「……別に、いつも通りがむしやらに戦ってただけな気もするが……？」

オレは首をかしげながら、自信なさげに答えた。

すると黒塚はそれが答えだと言わんばかりに頷いた。

「そう、いつもがむしやらだったね。でもさ、さっきの戦いは、いつも以上に無我夢中だったんじゃない？」

「……確かに……言われてみれば？」
改めて振り返ると、いつも以上にがむしやらだった気もする。なんにも考えず、もはや体の動くまま、といった感じだったし。

「そこがよかったのさ」
「え？」

「だから、『何も考えず、無我夢中に戦っていた』ことが、君の強

みを発揮できた理由なんだ」

「……どういうことか、分かんないんだが」
オレは困惑に眉をひそめる。

「今までのフルミナ君はさ……」

そう言つて黒塚は、変な構えを取つた。そのあと、何も持っていない右手をぶんと軽く縦に振り下ろした。

「右手の方を使つちやつた。てへ。次は左しかないよね！」

そう裏声で言つた後、残つた左手を右肩のほうに持つてきて、外側へと振り払つた。

「あつ、敵が距離を置いてくれたわ。やった！ あ、でもどっちの剣で追撃しようかしら？ あーん、迷つちゃーう」

くねくねと、黒塚が気持ち悪く体をくねらした。オレは突然の奇行の気持ち悪さに顔を青くしながら、ふとある考えが浮かんた。

「……………まて。それはオレの真似のつもりか？」

「そうだけど？」

「てめー、オレをなんだと思つてんだよ！」

「可愛い幼女」

「真面目な顔して言うな！！」

「否定はしないんだ？」

「ぐつ。……いやまあ、見た目はそうかもしれんがな、オレは男だつての！」

「その発言、地味に『見た目は可愛い幼女だよ』って主張してるよね。何気に自分の容姿に自信あるんだ？」

「え！？ や、そういうわけじゃない！」

「うん！ そこで赤くなってるこそ、フルミナ君だ！！」

「うつせえよ馬鹿っ！」

くっそ、なんでこんな流れにつ！？

「んなことより、オレの強みが発揮できた理由ってのは、なんなんだよー！！」

オレは強引に話を戻しにかかる。このままでは、オレの（男としての）尊厳が危うくなりそうだ。

「そうだね。フルミナ君いじめはやめて、そろそろ話を戻そうか」

「……っ、そうだ早く戻せ！」

一瞬ツツコミをしそうになったわが身を必死に抑え、オレはそうはやし立てる。

「結論を言うと、今までの君はいちいち考えすぎてたんだ」

すると、黒塚はすぐにまともな話に戻ってくれた。ふう、と一息つくオレだったが、気になる話だ。すぐにオレも真面目な顔になる。

「考えすぎ……？」

「そう。フルミナ君はさ、もしかしなくても今まで木刀を振るとき、こう考えていなかった？ 『次の攻撃はどうつなげたらいいだろう』って」

「……それは」

……あるかもしれない。

勦也と戦うとき、そして紅汰と手合せした最初の時。オレは攻撃の仕方、受け方を一瞬だが思索していたように思う。

「でもそれは……」

「ああ、確かに重要なことさ。特に双剣は一度振り方を間違えたら、かえって自分が危険になる扱いづらい武器でもあるからね。一振り一振り考えながら戦うのは間違いじゃないよ。でもさ。君の場合、それがあだになってたんだよ」

そう言つて黒塚はオレのすぐ目の前までやってきた。何事かとオレは黒塚を眺めていると、不意に黒塚は拳を握り、そのあとオレの顔めがけてその拳を振ってきた。

「な、なんだよっ!？」

オレはその拳を頭を横に傾けて避け、ついでに右手の木刀を小脇に抱えて、がしつと、横切る黒塚の腕をつかんだ。

「君の攻撃方法だよ」

オレの抗議の声に、黒塚はさらりとそう答えた。

「今僕は『フルミナ君の顔を殴ろう』と考えて、拳を握った。そのあと、実際に振ったわけだけど、フルミナ君はあっけなく避けたよね？」

「当たり前だろ。こんな分かりやすい攻撃……」
と、自分で言つた言葉に違和感を覚える。

分かりやすい……攻撃。意図して振られた、読みやすい拳。

そして、それを補足するかのように、黒塚の言葉が頭に響く。

『君の攻撃方法だよ』

「……まさか、そういつ……」

オレは思わずつぶやいた。

「気づいてくれたかい？」

その様子に、オレが黒塚の言いたいことに気付いたということを察したのか、黒塚は今度はそれを言葉にした。

「フルミナ君。君の『考えての攻撃』と言うのは、ひどく読みやすいものだったのさ。それにわずかながらでも、考えてる時間は一瞬動きが止まる。勲也も夏目君も、その一瞬さえあれば、攻撃に反応することは造作もない。だから君は二人に一発も当てられなかった。考えがまとまらないうちに放った一撃は、振りきれなくてひどく軽くキレがない、死んだ一撃だしね。無理に防いだとしても痛くないのさ」

「……そう、だったのか」

『お前は変に考えすぎな気がする。もっと自然に剣を振った方がいいと思うぜ？』

『てめえ、自分の持ち味をさっぱり活かしかれてねーんだよ。何考えてんのか知らねえけど、いちいち攻撃の時に止まりやがってよ。手加減のつもりか？ なめてんじゃねーぞ？』

ぽつぽつと、勲也と紅汰に言われた言葉がよみがえってくる。

なるほど、冷静に考えてみると彼らの言っていたことは正しいと思う。確かにオレは双剣の危うい使い方を恐れて、一刀一刀考えながら振っていた……ような気がする。いや、自覚が薄いだけで実際そうだったはずだ。

良かれと思ったその行動が、オレの強みを完全に殺していたらしい。

「大丈夫さ。君の考えも筋は通っているよ。双剣は扱いを間違えると、身を危険にさらす扱いにくい武器だ。一刀一刀考えて振るのは、決して悪いことじゃない。でもね、それがまともに出来るのは、経験を積んだ熟練者だけなのさ。手足のように双剣を操れるようになってから、進める階段だよ。君はまだ圧倒的に経験不足。今はただ、がむしゃらに戦う方が何倍も強いよ」

オレが思いつめたような顔をする中で、黒塚は励ますように言う。

「……がむしゃらで、いいのか？ でもそうしたら……」

「いいんだよ今は。そのための君のスピードじゃないか。君がすぐに立て直そうと思えば、一瞬だよ」

不安げにオレは黒塚に聞いたが、黒塚の主張は変わらない。オレは黒塚から視線を外し、手元の木刀に視線を下ろす。

がむしゃらに戦った方がいいのか……。なにも考えずに？

「まあ、もつともー」とオレの考えていることをくみ取ったかのようなタイミングで、黒塚はニヤリ顔で背後の紅汰を見た。

「夏目君みたいに何も考えないで無鉄砲すぎるのも、考え物だけだねー」

「んだよそれっ！？ 急に話振つといてそれかよ！」

不機嫌そうに床にあぐらをかいていた紅汰が、黒塚に怒鳴った。

「夏目君は、もう少し後先考えた方がいいよね」

「あーあ、そうですよ！ どうせオイラは考えること自体苦手だか

「らな!!」

「そう言ってすぐ逃げるんだから」

「いいんだよ、それがオイラのスタイルなんだからな」

「逃げ癖が?」

「そつちじゃねえよ!」

「ぎゃーぎゃーと二人は（といつても、うるさいのは紅汰だけだが）言い争う。」

「……はは」

「なんか、思いつめてる——のかどうかは、自分でもよく分からないが——のが馬鹿らしくなったぜ。」

「自然と、オレの口から小さな笑い声が生まれた。」

訓練——なにも考えずがむしゃらにつ 10（後書き）

誤字、脱字、修正の指摘、感想をお待ちしています。

『!?!』

それに黒塚と紅汰は気づき、口論を止め驚いた表情でオレを見てきた。

「な、なんだよ……」

「い、いや……」

オレは慌てて笑みを消して……少し恥ずかしげに黒塚たちをにらみつけた。それに黒塚は驚きを隠せない様子でつぶやいた。

「……まさかいつもお転婆なフルミナ君が、こんな可憐で儂げな笑顔を見せるとは思わなくて」

「オイラもびびったぞ……。まさかお前、女に目覚めたのか?」

「お、マジで?」

「う、うるせえ違う! なんこと絶対ねえ!! さっきのはちよつとした……おいてめえつ、そんなうれしそうな顔すんなつ!」

オレは顔を真っ赤にして、黒塚のうれしそうな顔を指さして怒鳴った。黒塚はそんなオレを希望の満ち溢れた目で見つめてきた。

「うむー。これはますます攻略し甲斐があるなあー」

「誰がてめえなんぞに攻略されるかつ!」

「そう言つて、最終的には僕なしでは生きられなくなるんでしょ?」

「平然とキモイ台詞を吐くな!!」

「『お兄ちゃんっ。私、お兄ちゃんと結婚したいの!!』」

「二次元に帰れっ!!」

「っ。……帰れたら、帰っているさ……っ」

「そこで心底くやしそうな顔すんのかよ！」

完全に話の矛先はオレへと変わり、いつものような言い争いに戻ってしまった。

こういう会話が『いつものこと』と言うのは、はなはだ不愉快なことではあるのだが。

と、そこで下校時刻十分前のチャイムが、地下空間に鳴り響いた。どこから取り入れてるのか、ここまで聞こえるんだよな。

「おっと、時間か。今日はこれでお開きだね」

大体こういう場合いつも、最後にみんなで黒塚のところに集まってから解散する。だが今日は、黒塚は集合をかける前に、オレの頭をぽんと叩いて、言った。

「ほら、今日は夏目君に相手をしてもらったんだから、お礼をしないと」

「はあ？」

ぱしっと黒塚の手を払いのけながら、オレは何気に黒塚に続いてオレの近くに立っていた紅汰に視線を向けた。

……さっきまで、結構腹の立つことを言われていたせいもあって、オレは少し不機嫌な顔になる。だが、確かに時間を割いて相手をしてくれたのは事実なので、しぶしぶオレはお礼を言おうと――

「さっきは済まなかったな、フルミナ」
「な……っ」

オレが礼を言おうとする前に、なんと紅汰のほうが頭を下げたのだ。
「さつきはオイラが言い過ぎたわ」

「え、あ。……いや、別にそっちの方が正論だったわけだし……」
思いもよらない行動に、オレの顔から不機嫌さが吹き飛んで、代わりに困惑が表に出てきた。

「……どういうことだ？」
思わずオレは横にいる黒塚に小声で聞く。すると黒塚は意外な答えを出してきた。

「ああ。時々聞くから知ってるかもしれないけど、夏目君には槍術や魔法を教えてくれた『師匠』がいるんだ。この生徒会に入る前から、『師匠』から直に教えてもらってたんだよ。そういう経緯を持つてるのって、生徒会のなかでは夏目君だけなんだよね。で、今日はその『師匠』のやり方つてのを夏目君は実行したんだ。『わざと相手を怒らして、何も考えず自然体で戦うようにさせる』。実はね、夏目君もフルミナ君と一緒に、槍を使い始めた時同じように考えながら振ってたんだって。きつと夏目君、フルミナ君の戦い方に昔の自分を垣間見たんだろうね」

「……」

オレは未だに頭を下げる紅汰を眺めた。

要は紅汰は、昔自分が受けてきた教えを、同じ間違いを犯していたオレに対してしてくれたということか。『弟子』としてうけた教えを、今度は『師匠』となつてオレに示してくれたと。

「夏目君、言つてたよ。この教えは、最後しっかり謝ることが重要

なんだ、って」

「……だからか」

あまり謝るということをしない紅汰が、突然こうして頭を下げている。それも『師匠』の教えというやつらしい。どれほど紅汰がその『師匠』とやらを尊敬しているかが、よく分かった。

「……顔を上げてください」

オレは小さくため息をつきながら腰に手を当てて、頭を下げる紅汰に言う。それに紅汰はゆっくりと顔を上げ、うかがうような目線をオレに向けてきた。

「事情は分かりました。まったく、らしくないことをするから驚きましたよ」

「……らしくねえとは心外だな。オイラだって考えるときは考えるよ」

オレがそう言うのと、むっと、顔をひきつらせながら紅汰は口を三角にして言った。

「……とにかく。今日はありがとうございました」

ぺこりとオレは頭を下げる。すると今度は紅汰のほうが困惑気に顔をゆがめた。

「いや、別にいいけどよ……。てかお前、なんで急に敬語なんか……?」

「先輩がそうしろって言ったんでしょ? それにオレの気が変わっただけです」

そう。ほんのちょっと気が変わったただけだ。やはりいくら無鉄砲でがさつな紅汰でも、オレよりもはるかに経験豊富な『先輩』なのだ。ちゃんとそれには敬意を払おうと思った次第である。

「確かに言ったけどよ……なんか調子狂うな。……ま、いいか。本

来求めていたものなんだろうし」

がりがり頭をかいていた紅汰だったが、さつさと開き直り、大きくうなづいた。

「うっし。今日は終わりだな。まだ炎は使えてねーみたいだから、明日も似たようにすっぞ。明日以降、今日の最初みたいな戦い方は認めねーからな」

「おい、お前ら早く集まれよー」オレへの話は終わったとばかりに、紅汰はまだ集まっていなかった面々に声をかける。

「なんだかんだ言っで、夏目君は部下に慕われるタイプだよねー」
そろそろ生徒会の役員が集まってくる中、黒塚はオレにだけ聞こえるような声でつぶやいた。

「まあ、確かにそんな感じだな」

落ち着きなく、早く早くと声をかける紅汰を眺めながら、オレは黒塚の言葉にそう返した。

改めてみると、紅汰先輩の特性が火属性っていうのは、なんかしくりくるよな。こう、熱血というかさ。

「……………ところでさフルミナ君」

「ん？」

改まった様子で口を開いた黒塚を、オレは横目で見上げた。

「僕も一応上級生なんだけどなー。夏目君に……………いや、他の上級生には敬語を使うのに、なんで僕にはないのかなー？ まさか、やっぱり僕にだけ特別にツンデ……………」

「そっいつお前には、絶対敬語なんて使ってやらねえよ！」

いろいろと終わってすっきりした気分、ものの見事に暗雲をたちこめさせる黒塚の言葉であった。

訓練——なにも考えずがむしやらにつ 11（後書き）

誤字、脱字、修正の指摘、感想をお待ちしています。

これが俗にいうガールズトークなの？ 1

紅汰と試合をした翌日から、オレの訓練内容は少し変わった。

今までは、『光速』の制御や木刀の素振り、勲也との模擬戦——といっても、勲也は本当の武器である大剣（実は生徒会室に置いてあった、オレが仮面をつけた黒塚と戦いに行ったときに持って行ったあの大剣は、もともと勲也のものだったらしい。なんでも、この学校を離れる時に黒塚に託していたとか。本人はもう手に取ることはないと思っていたらしいが、やれやれと首をすくめながらも、黒塚から大剣を預かっていた）ではなく木刀で戦っていたのだが——の三つを放課後にこなしていた。

基本的に会議の時以外は自由出席らしいが、オレはなんとなく毎日出ていた。どうせ家に帰っても暇……………。

ああそうそう

このタイミングまで言い忘れていたが、オレはこの姿になっても今までの家を普通に使っている。最初は日向家に、謎の外国の少女として家を使うことを渋られていたが、男のオレが親戚と海外にいった（らしい。…………ここにいるんだけどな）ということと、その入れ違いにオレの顔なじみとして留学してきた、ということを話したところ、納得してもらえた。もちろん、真っ赤な嘘なのだが、楓のフオローもあってなんとか了解してくれた。今ではちょっとした支援もしてくれているのだが、…………よく信じたなと思う、我ながら。

それはそれとして。

もう一度言う形になるが、基本三つの訓練をしていたオレは、さらなる訓練を要求され、訓練内容が変わった。

あの日以来、オレが火を使えるようになるまでは、模擬戦は紅汰とやることになった。これが紅汰は勲也と違い本気で自分の槍を使ってくる上、こっちは魔法で強化した木刀だけで戦うので、かなりしんどい。身体能力向上や『光速』に魔力を注いでいたら、木刀への魔力供給が疎かになったりして、あやうく木刀が燃えかけることもあったし、逆パターン……つまり木刀への魔力供給にかまけすぎて、『光速』が使えないということもあった。しかし、どうしても二つのことを同時にこなすのは困難を極める。両手で別々の作業をするようなものだ。慣れればそれなりに可能らしいが……まだ、無理。オレはまだどちらかに偏りがある状態だ。

ここで本来の模擬戦の目的を振り返ってみる。確か『オレが火を使えるようになるため』だったはず。……しかし模擬戦では、前述の通りそんな余裕はない。結局模擬戦が終わった後、抽象的すぎて何言っているか分からない、紅汰の火を使う感覚というものを聞いて、自力で模索するという形になってしまった。紅汰曰く『気合を入れる感じなんだよ。こう、燃えるやコラア！　みたいな。かーわかんねえかなー！？』らしい。

すみませんが、何一つわかりません。

でも一応進歩はある。

やっぱり黒塚の言うように、イメージというものは魔法に強く影響するらしい。ほんの少しではあるが、オレも炎が使える兆し——指先からライターみたいな火が出るくらいだが——見えてきた。まあ、

加減が分からなくてしょっちゅう火傷を負いかけるんだけど。

変わったのはそれだけではない。むしろこっちのほうが、堪えるかもしれない。

他に追加された内容は……体の使い方及び身体能力向上の使い方と基礎体力をつけるというものだ。

オレの場合、武器が双剣で、『光速』が使える……つまり速さが一番の売りということもあって、奇襲型の戦略にもっとも適しているタイプらしい。奇襲の型にも様々ある。背後から、横から、物陰から……そして、上から。

最近の体や身体能力の使い方訓練は、その上からの奇襲が出来るように、空中での姿勢矯正や着地のときの能力の使い方を練習している。

……練習なんてきれいなもんじゃないな。……あれは拷問だ。

オレは最近、その訓練で四階建ての校舎の屋上から……落とされている。

文字通り、落とされる。そりゃもう、あっさりと。命綱なんてない。

マジで、怖い。

なにも支えるものがなく、体の向きも変えづらい状況で、ものすごい勢いで地面が迫ってくるのだ。ぶつかったら、決して軽傷では済まない、死のラインというものが。

はつきり言って、正気ではられない。

いや、最初はいられなかった。

今はと言つと……何と言つべきか。強いて言つなら、慣れた。

だって、落とされたのは一度や二度じゃないもん。『人払い』という魔法があるらしく、一般の眼がないのをいいことに、確信犯である黒塚はやりたい放題だ。一応危ないときは魔法で地面への衝突は防いでくれるが、嬉々として落としてくる。

始めの一回目は……その、泣いてしまった。腰砕けで足も立たなかったし、失禁しかけた。しばらくは立ち直れなかったなあ。あのときのオレは、黒塚を呪い殺すのも出来そうなほど、黒塚を憎んだものだ。今も落とされるときは大概だが。

次に基礎体力のほうだが、これは今までのと比べると平和そのものだ。

ひたすらグラウンドで走ったりを繰り返すだけ。恐怖の突き落としのあとの、心休まる時間だ。体力的にはつらいけど。こっちは、人払いなし身体能力上げるのもなしでやっているの、他の生徒から普通に見られる。おかげで、グラウンドで練習をするクラブの方々と面識が出来てしまった。

＋＋＋

「あ、ふーちゃん。こんー」

「こんにちは」

クラブ活動もしいに後半に差し掛かる時間帯ではあるのだが、未だに色々なところから上がる声で賑やかな放課後の土煙舞うグラウ

ンド。そこにオレはランニングシャツに短パン、さらには髪をポニテールに括るといふ、運動スタイルでやってきた。夏目前ということもあり、その格好でも冷えることはない。

グラウンド訓練でグラウンドを走り始めてから二週間ほど経っていた。虹色に輝く金髪で小学生のような背格好という、高校のグラウンドにおいて目立ちすぎる姿をしているオレは、外のクラブの方々から注目を浴びていた。しょっちゅう声をかけられる。そんな中、特に親しくなったのは、陸上部にいる一年生の女子であった。

「今宵も相変わらずカワイイのう？」

「……相変わらずどう返したら、いいんでしょうか？」

「んやあ、テキトーでいいよテキトーで」

「はあ……」

「全く、愛梨はこの時間なのに元気ねえ……」

「ホントにね」

ぞろぞろと、オレの周りに三人の女子が集まった。みな、陸上部の一年生である。

「そりゃ、天下の愛梨ちゃんですから？ 元気に決まってるでしょ」
そう言つて力こぶをひねり出すのは、元気が取り柄のショートカット娘、瀬川愛梨。オレがグラウンドに顔を出し始めて真っ先に声をかけてきたのがこいつであった。愛梨とはクラスも一緒なので、最近はここだけじゃなく、教室でも一緒にいることが多い。

「……もう練習も後半なのに、そこまで元気なのは羨ましいわ……」
苦笑いを浮かべて、袖で汗をぬぐう長身の女子は、木垣麗菜。暴走する愛梨のストッパー的な役を担うことが多い。割としっかりもので、そういうところは楓に似ているかもしれない。

「ま、愛梨はどうせ授業中にしっかり寝てたからね。元気なんでし

よう」

皮肉気に首を振る、オレを除いた女子の中で一番背の低いこいつは、南原小夜。こいつもオレと同じクラスだ。無類のアニメ好きで、黒塚のことを尊敬視してるとか。……やめとけと、心の底から思う。

「なにをー！ 小夜だって、授業中は落書きばかりしてんの、ウチは知ってるんだぞ？」

「でも、愛梨と違って起きてるもん。ちゃんとノートも取ってるし」「うぐぐ……」

「はいはい、いつもの口論は後でいいから。ルミちゃんもきたことだし、私たちも走りましょう？ さっきからコーチがこっちをにらんでるから」
軽くにらみ合う愛梨と小夜の肩を、麗菜がぽんと叩く。すると、ふたりはちらりと同時に背後を振り返る。そして、コーチである細身の女性と遠巻きながら目があって、二人とも高速で視線をオレのところに戻した。

「さ、さあもたもたしてられないよ！ ふーちゃん、麗菜、小夜。走るわよ」

「そそ、そうね！ 張り切っていきましょう！」

「……やれやれ」

「……あはは」

弾かれたように走り出す愛梨と小夜を見つめながら、麗菜は嘆息しオレは苦笑いした。その後、一度顔を合わせて、オレと麗菜は走りだし、先行していた愛梨と小夜に追いつく。

これが俗にいうガールズトークなの？ 1（後書き）

フルミナの日常パートの象徴と思って登場させた三人の女子生徒たちです。魔法のない、表側の世界は彼女たちが彩ってくれたらいいなと思います。

誤字、脱字、修正の指摘、感想をお待ちしています。

これが俗にいうガールズトークなの？ 2

「そういえばさー、聞こう聞こうと思ってて忘れてたんだけど」

学校の外をぐるりと回るコースを走っている途中、愛梨が不意に後ろを走る麗菜を肩越しに見てきた。

「？ なに愛梨？」

「いやね。アンタのクラスに外国からの転校生が来たじゃない？
どんな感じかって」

外国からの転校生……。そんな珍しいのオレを除いたら学年に一人しかない。おそらく愛梨の言っているのは、二度も接触して何気にオレと縁が出来た茶髪翠目の少女、ソロナのことだろう。

麗菜のクラスは、この場にいる麗菜以外のやつの隣のクラスで、場所的には三階に位置するオレらの教室の一階下に位置する。階が違くと、その分交流も減る。だからこういう質問も無理はないのだが……。

「……愛梨。そういうのは来たその日に言ってもんじゃないの？ もう先週のことなんだけど……」

「だから忘れてたって言ったじゃない」

走りながらあははと頭をかく愛梨。

「愛梨ってば、時間軸おかしいんじゃない？」

すると、愛梨の横を並走している小夜が、口元に手を当ててぷぷぷと笑う

「うるさいわね小夜。漫画に価値基準のあるアンタに言われたくないね」

「いやいや。私はちゃんと二次元と三次元は区別できてるから問題

ないもん」

『……………』

「え、ちょちよつと！　なんでみんなしてそんな白い目を向けるの！？」

それはお前が真っ赤な嘘を自信あり気に言い張るからだ。

本人はそう言っているが、小夜の日常の言動は黒塚のそれに近い。例えば、

『愛梨って、ボクっ娘の才能あるよね。あ、オレとかもありかも』とか。

『麗菜はクーデレとか入ってそうだよね』とか。

『ミナちゃんは、可愛い格好とか似合いそう。ほら、ゴスロリ衣装とか！』……………。

女版黒塚恐るべし。そして何気にゴスロリ衣装で頬をひきつらせてしまうオレが悲しい。もう体験済みです……………。

「わ、私のことはいいでしょ！？　それより麗菜。実際どうなの？」
ぶんぶん和小夜は手を振って、さっさと麗菜に話を返す。話が回ってきた麗菜は、小さくため息をついて「そうね……………」と言葉を探すように上を向いた。

「明るい、いい子ね。日本語も流暢だし、頭もいいみたい。留学してくるくらいだしね。もうクラスの間みなとも打ち解けてるわ」

「ほおー、『留学してくるくらいだから頭がいい』と……………だって、ふーちゃん？」

「……………なんでそのタイミングでこっちに話を振るんでしょうか？」

悪かったな、補習常連客で。てか、オレそもそも留学生じゃないし、もともとこんな姿でもないしー！

……そう言えればこっちも楽なのだろうが、あいにくとそれは叶わぬ希望と言っやつだ。今のオレは誰がどう見ても、日本人ではない異国の……可愛い女の子。その中身が、魔法で姿を変えられた、同じクラスにいた不良男だとは、誰も信じまい。それ以前に、魔法そのものが存在していること自体、普通の人にとっては信じられないはずだ。

オレだってつい二か月近く前までは、そちら側の……所謂（ちよつと世間のはみ出し者のような立ち位置であつたが）普通の人間だつたのだ。それがほんのちよつとしたきっかけで、魔法のあるこちら側の住人になってしまった。それをどう思つかと聞かれたら……オレは正直迷う。

確かに急に今までの裏側的な……聞くところによると、命まで懸けることもあるこの世界に巻き込まれたことは、抗議してもいいだろう。

でも同時にオレは、巻き込まれたことで、今までの自分から変わることができたと思うのだ。根本はなんにも変わっていない。でも、今のオレには、以前にはない『やる気』のようなものが確かに存在する。なにもせず、ただぶらぶらと日常を過ごし、まわりから遠ざけられていた少し前の自分に『んな暇があるなら木刀でも振つとけ！』と怒鳴ってやりたい。そんな気概が――

「……どうしたのルミちゃん、ちよつとスピードが緩いよ？」
「え、あ……」

麗菜の声に、オレは我に返る。どうやら予想以上に思いふけってい

たようだ。無意識に足の回転が鈍くなっていたのか、気が付くと愛梨ら三人から少し後方に下がってしまったていた。

「愛梨があんなこと言うから、気を悪くしたんじゃない？」

少しスピードを速め、先ほどと同じ麗菜の横まで来たところ、前列の小夜がその横の愛梨を小突きながら言った。

「え、マジ？　そ、そうなのふーちゃん？」

「あ、いや。そういうわけではないです。……ちょっと考え事してただけ」

「そ、そうか。なんだよ小夜、違うじゃないかー」

申し訳なさそうに肩越しにオレのほうを見てきた愛梨だったが、オレの言葉を聞いて安心したのか、お返しとばかりに隣の小夜の背中をばしんと叩いた。

「いったいつ！　少しは加減しなさいよ！」

叩かれた衝撃で少しよろめいた小夜は、恨めしげに愛梨をにらんだ。

「えー、加減はしたつもりなんだけどウチ？」

「あんたは規格外なんだから、触るくらいで十分なのよ！」

「それはちよつとひどくない？」

前列で再び口論が始まる。まあ、楽しそうだからいいんだけど。いつものことだし。

「考え事って、なにか悩みでもあるの？」

と、並走していた麗菜からそんな言葉が投げかけられる。まさかさつき考えていたことを暴露するわけにもいかないので、少し迷った末、オレは苦笑しながら答えた。

「いや、……最近忙しいなって」

「……なんか、ルミちゃんが言うとお実ね。生徒会の仕事もあるし、かと思っただらこうして走ってるわけだしね」

「え、うん。そうそう」

改めて口にすると、確かに忙しいなオレ。
でも、毎日地味に続けられているのは、何気にそれを『充実している』と感じているからか。単に何も考えていないのか。オレ自身にも分からない。

「……………それにしても、前の二人元気ねえ」

若干息を切らしつつ、麗菜がつぶやく。オレはそれに「そうですね……………」と、ため息交じりに答えた。

愛梨と小夜の二人は、未だに口論を続けながら走っている。……………が、走っている最中なのに辛そうな感じはしない。どんだけタフなんだよお前は。

「……………こっちは何気にきついのに……………」

額の汗を袖で拭う。もうそれなりな距離を走っているので、暑い。

「ま、もう少しよ。こっちはこっちで、頑張りましょう」

「そうですね」

麗菜の言葉にうなづきつつ、オレはふうと深呼吸して、足に力をこめた。

これが俗にいうガールズトークなの？ 2（後書き）

誤字、脱字、修正の指摘、感想をお待ちしています。

謎の風魔法使い 1

数日後。

「……ふぁー……」

「随分と眠そうだな、雷牙？」

朝のホームルームが始まる前の教室。

相変わらずその時間帯の教室は賑やかだ。昨日あったことを友達同士で話し合い、中には他のクラスのやつも混じって各地で談笑が起こっている。その教室を、眠そうにあくびを漏らしながら横切り自分の机に腰を下ろすと、後ろからオレより先に教室にいた勳也が、皮肉気にそう聞いてきた。

「そりゃまあ……あんだけのことがあったらな。なんか気が立つたのか、全然寝付けなくて大して寝てないんだよ」

「ごしごしと目のあたりをこすりながら、オレはくるりと椅子に横座りして、顔だけ勳也のほうに向いた。」

「初実戦があれじゃ仕方ないか。ま、怪我がなかっただけよしとするんだな」

勳也は首をひそめながら言った。

勳也の言う初実戦とはなにか。

それは昨晚生徒会役員で撃退した、民家ほどの大きさの異形な生物——魔物との戦闘のことだ。

オレにとって、この世界とは相容れない、今まで言葉だけで実体を見たことがない魔物との、初めての邂逅の瞬間であり、実際に武器を持ち戦う初めての実戦でもあった。といっても、オレのした仕事

は、弱つてるところで弱点部位をさらけ出した瞬間に、不意打ちで一太刀切り裂いただけ。最初から戦っていたわけではない。

でも、それだけでも残るものはあった。自分よりはるかに大きく、凶悪な魔物と正面から目があつたときの、身の震えるような恐怖。そして、切り裂いたときの生々しい感触……。思いだただけで体が強張ってしまうような、鮮烈な体験であつた。

「で……成果はどうだ？」

「成果、か……」

オレは自分の手のひらを眺めた。本来の自分のものではないのだが、とりあえず今はオレの手のひらだ。改めてみると、白く細く小さく……華奢だ。はやしや

こんな小さな手なのに、あれだけの魔物を倒すことが出来るんだよね。

この手には……いや、体の中に潜む魔力には、もともとオレの持っていたものとは少し違う、別口の魔力が混じっている。

それは昨日黒塚からもらった、一対の双剣の魔力である。

昨日黒塚が「そろそろこういうのに慣れていた方がいいかな」と言つて渡してきた双剣は、今までの木刀とは違う、きれいな光沢を持ち実戦で使う、所謂『本物の』双剣だった。そろそろ、と言つて渡してきた双剣を、ものの数時間後の深夜に使つたんだから、割と質が悪い。でも、木刀よりは遥かに戦力アップと言つた感じだ。そのおかげで昨夜は勝てたのだ。もしかしたら黒塚のやつ、魔物が来ることを読んでいたのだろうか。

ともかく、昨夜はその双剣での初の戦闘でもあつたわけだ。その双

剣は、今は魔力の粒子に還元して体の中に取り込んでいる。こうすることで、少し意識を集中させれば、いつでも双剣を呼び出すことができる。オレは実体化させているわけではないが、なんとなくその双剣を握っているような形をとりながら、考え込むように目を泳がせた。

「……双剣のほうは、まあこんなもんかって感じかな。まだ慣れてないっていうのもあるし。でも、すごく手に馴染む感じがあるから慣れるのもすぐだと思うわ」

軽くぶんぶんと手を振りながらオレは言った。実際に武器の扱いと言うのは、慣れが肝心だろうしな。どれほどの頻度で使うかは分からないが、早く『本物』特有の感触に慣れたいものだ。

「そうか。それじゃあ、本命の火のほうはどうだ？」

「あー、そっちは要検証ってとこだな。今までよりは火のイメージが固まった気がするけど。うまくいくかどうかは、放課後だな」
オレは苦笑いを浮かべながら、なんとなく少し体をのけぞらせた。

実は昨夜の実戦の大元の目的は、オレの火のイメージをより鮮明にさせる、というものだったのだ。発案者は黒塚。魔法の扱いが器用なオレは、強いイメージさえ持てれば意外と簡単に扱えるようになるのではないか、とのことだ。

黒塚の思惑通り（って言う言い方はあんまりいい感じはしないな……）、今のオレには昨夜の魔物のプレス……辺りを焼き尽くすような激しい炎の映像が鮮明に残っている。強く激しい火のイメージが、脳裏に焼き付いている。

「……なるほど。イメージの規模だけやたらと広がったから、一人で試すのは気が引けるんだな」

「……よく分かっていらっしやる」

オレは図星を突かれてむっと顔をゆがませた。

勦也の言うとおりだ。オレの火のイメージは、あの魔物の強烈なブレスだ。だが、それは今までのイメージとはかけ離れたもので、それ頼りに魔法を行使したら、大規模なものになりそうだった。もしかしたら、試しに使ってみて制御できないかもしれないという可能性があつたため、一人で試すことをためらっていたのだった。

勦也はオレのその様子に、口元に笑みを浮かべ小さく嘆息し、軽く乗り出していた身を深々と椅子に沈めた。

「そうか。じゃ、放課後だな」

「そうだな」

ちらとオレは前を見ると、教室に入ってくる担任の姿を確認した。おそらく勦也はその姿を廊下にいる時から確認していたから、座りなおしたようだ。視界の広いやつだな。

オレも勦也を見習って、横座りしていたものをさっと正した。

謎の風魔法使い 1（後書き）

誤字、脱字、修正の指摘、感想をお待ちしています。

謎の風魔法使い 2

結論――

「……なにふーちゃん、その右手の包帯？」

「いえ、ちょっとした不手際で怪我をね……」

うまく制御出来ず、多少の火傷を負うことになりなした。

……大惨事にはならなかったが、地味に痛い。このくらいの傷じゃ、水穂先輩も魔法で治療してくれなかったし……。

そういう経緯で、放課後のいつもの面子での外周に、オレは右手にちょっとした包帯を巻いて参加していたのだった。

「大丈夫なの？」

麗菜が心配そうに覗き込む。オレは軽く右手を振って「大丈夫です」と笑った。

「それにしても、そんな怪我するなんて生徒会は一体どんな活動しているの？」

若干好奇心の入った目で、今度は小夜が口を出してきた。

「まさか、なにか得体のしれないものと戦ってたり！？ 魔法とか

魔法とか！」

「んなわけないでしょうがー。何？ 今はそんな感じのアニメにご執心なん？」

「あはは。そうなのよねー。ヒロインの女の子がすごく可愛くてね

……」

あははと愛梨と小夜が笑いあう。それにオレは若干ひきつった笑いを返す。

……何気に合ってるんだよな。さすが女版黒塚……察しがいいというかなんというか。

なんとなくそう思うと、小さく笑みが漏れそうになった。

でも、女版黒塚はあいつほど鬼畜じゃないな。あいつは平気で人様に害を運んでくる。なにやってもニヤケ面だし、しかも口じゃ……いや、実力でも勝てないか。地味に超人だからなあいつ。腹立つことに。いつか弱点を突き止めたいと心底思うわ。

とまあ、そう考えると小夜の規模は微笑ましいくらいだ。こうして愛梨と言い合うのもそろそろ見慣れてきて、こうやって麗菜と観察するのが日常になってきている。ここには、昨日のような魔物の影もないし、この手の怪我の原因でもある魔法も存在しない。あー、こういう空気も悪くない。昨日の夜の魔物の騒ぎのあとだと、そう思ってしまう。

「あ、そういえば昨日ね」

今日も今日とて、前列の愛梨と小夜というペアでなにか話し始めたのを見て、オレと同じく後列にいる麗菜がオレに向けて話を振ってくる。オレは走っているけれど、ゆったりとした気持ちを覚えながら、それに応じるべく麗菜の顔を見上げ――

ゾクッ

「……!?!」

その時だった。

「大したことじゃないんだけど……って？　どうしたのルミちゃん？」

「あ、いや……」

不意に立ち止まったオレを見て、不審げに麗菜も立ち止まる。

……まさか――

「んあ？　どつたの二人とも」

「なにかあった？」

先行していた愛梨と小夜も後列の異変に気づいてとことこと戻ってくる。

「いや、急にルミちゃんが立ち止まって……」

「どーしたふーちゃん？」

「早くしないとコーチの小言聞くことになるわよ？」

「……」

三人の呼びかけに応じず、オレは木々の生い茂る小さな林に続く、脇道の先を凝視する。

………今の感覚は――

さっきまでのゆったりとした気持ちは吹き飛んだ。オレは厳しい顔をして口をつぐむ。

そして――

「ちょっと、どうしたふーちゃ――」

「ごめん、先に帰ってて！」

オレは呆ける三人を肩越しに振り返りながら、脱兎のごとく林のほうに駆けた。

＋＋＋＋

「……さっきの感覚」

うつそうと茂る林の中の小道を走りながら、オレは注意深く辺りを警戒した。

「……間違いねえ。あれは魔力波だ」

普段の生活では、絶対に感じることでできない、押し寄せるような感覚。オレは林の奥からごくわずかだが、確かに感じた。

「生徒会の面子はみんな生徒会室の地下にいたはず。こんなところから魔力波が感じられるわけがない。……ということは、だ」

ザッ、と舗装されずに踏み固められた地面を削りながら、オレは立ち止まる。

「生徒会のやつら以外に、誰か魔法使いがいる……あるいは、魔物が潜んでいるってことだな……」

そしてオレは道の脇、つい最近踏み分けられたように見える獣道を凝視した。

「……………」

オレはうつむき一度両手を眺めた。少し意識を集中すると、両手に取り込んだ双剣の魔力が具現化する感覚がほんのりと現れる。

もしかしたら、一度生徒会の奴らに言いに行くのが得策だったかもしれない。だが、もうここまで来てしまった。

……一応、何かがあるかわからない。用心に越したことはないはずだ。

「……………よし」

オレはふっと集中を解いて顔を上げる。そして、その獣道に足を踏み入れた。

その瞬間、妙な壁……薄い滝のカーテンのような……を潜り抜けた違和感を覚える。

「……………これは——、っ!？」

その違和感に一度振り返りかけたオレだったが、突然前から緑色の光弾が迫り来ているのに気づき、反射的にさっと首を横に反らした。光弾はオレの横すれすれを横切り、バシンと空中で壁にぶち当たったような音を立てた後、小さな風を残して消えた。

「っ誰だ!?!」

オレは光弾の飛んできた獣道の奥に向かって怒鳴った。だが、返事は返ってこない。

代わりに四発の光弾が、まるで銃弾のようにまっすぐに飛んできた。「くっそ！ 一応のつもりだったのに！！」

オレは双剣の魔力を一気に開放する。すると両手に光の筋が飛び出し、次の瞬間には銀色に煌めく刀身を持った細身の双剣が具現化した。

「はあっ！」

オレは手に双剣の生の感触を感じた瞬間、下げていた右手の双剣を斜めに一気に振り上げた。先行していた二つの光弾が、小さなつむじ風を起こして掻き消える。それを確認する間もなく、オレは目にも留まらぬ速さで振り上げた右手を、今度は返しの刃で横に払う。残り二つの光弾が、先行していたものとコンマ数秒の差で同じ運命をたどった。

「なんのつもりだ！ 出てこい！！」

オレは左足を軽く前に出し、半身で構え——がむしやらの戦い方をするようになってオレの構えは、肩の力を抜き両手を下げ、両刃先を地面付近にまで下げるような、ごく自然体なものに変わった——ながら、林の奥をにらむ。木々が揺れる音以外にも異音のない空間だ。オレの声は届いているはず。

……嫌な沈黙が、あたりを支配する。

「……………久しぶりにいきのいい、獲物が来た」
と、不意に奥の暗がりの方から、その沈黙を破る声が出た。

謎の風魔法使い 2（後書き）

誤字、脱字、修正の指摘、感想をお待ちしています。

謎の風魔法使い 3

「っ、誰だてめえ！？ 姿を見せろ！！」

オレは慣れない実戦のおいを感じ、小さく冷や汗が出るのを感じながら、声を張り上げる。

「流れに沿ってこんなところまで来たが……正解だったのかもな……」

……
淡々とした口調で、少女のような声音だ。その声が林の奥から響いてくるが、肝心の姿が見えない。話ができるということは、人間なのか……いや、よく考えたらレオンのように人外でも言葉を話すものがあるのだ。

とりあえず、姿は見せないか。……こんな林の中だ。どこに潜んでいるか分からない。オレはぐっと双剣を握る。

どうする……あれだけ光弾が飛んできたんだ、オレの位置はあつちにばれてる。遠距離攻撃がやけに精確みたいだし……動いた方が得策か。

ちらと右横を見る。ほどよくすぐ横に木々の間隙が見て取れた。しめたとばかりに、オレはそこに一歩踏み出そうと――

「……………」

――踏み出そうとした直前に、ふとかすかに林の奥から声がするのに気が付き、動きを止めた。不審げに耳をそばだてる。
すぐにその声の正体に気が付いた。

これは……詠唱！？

「エアースラッシュ！」

「くそっ！？」

反射的にオレは、木々の隙間に転がり込む。一瞬後、今までオレの立っていたところの地面で轟音が上がった。転がった先で倒れたまま振り向くと、オレが先ほど立っていた場所に、まるで刃物を振り下ろしたかのような、深々と鋭利な溝が作られているのが見て取れた。ざざざつとあたりの木々が嵐を受けたかのように揺れる。

「エア……空気っ、風魔法か！」

オレは瞬時に起き上がり、林の中に身を隠しながら走る。逃がさんとはかりに、光弾が何発か足元をかすめていった。

「風か……初めて見た」

オレは出来るだけ音の立たないように走ろうと努めたが、それに反して辺りにがさがさと大きな音が立つ。苛立ちを覚えつつも、驚きに思わずつぶやきが漏れた。

風魔法については、実物を見たことがなかった。生徒会のメンバーに、風魔法を得意とした生徒がいないからだ。水穂が多少使うことが出来るのだが、『使えるだけ』なので見る機会はくれなかった。だから今見た魔法が、初めての風魔法だった。

「随分と威力がありそうだなオイ……っ！」

バシんと、すぐそばの木から光弾が弾ける音がした。オレは舌打ち

をして、走るスピードを上げた。木々はさほど密に並んでいるわけではないが、油断すると木々にぶつかりそうになる。問題はぶつかりそうになるだけではない。時々木の枝などが、抜身の腕などに容赦なく傷を作る。

「くそつ、走り辛いなつ——」

ばしんと目の前の枝を払い落しながら毒づいたところ、不意にガツと足先が木の根に引っかかってしまった。オレはなす術なく前のめに倒れた。先ほどのまでの走っていた時の草をかき分ける音とは違う音が辺りに響く。

それを聞き分けたのか、はたまたオレが走っている軌跡が見えていたのか、オレが体を起こす頃には、先ほどのまでのものよりも二回りほど大きな光弾が、木々の間のわずかな隙間をくぐり目前に迫っていた。

「このっ！」

オレは避けるのは無理と悟り、膝立をすると同時に左の双剣を光弾目掛けて切り上げた。すると光弾は、先ほどまでとは違い、切り口からぐにやりと歪み大きく拡散した。

「っがあ!？」

拡散した光弾は、とてつもない暴風としてオレに押し寄せた。やすやすとオレの体はその暴風に吹き飛ばされ、後ろにあった細木に叩きつけられる。ミシッと細木から軋みが聞こえた。

「く……」

すぐに立ち上がろうとしたが、腰を強く打ち頭が揺さぶられた影響で、しりもちをついた状態から起き上がれない。

バババツ

そこに割と近くから銃声のような音が響く。かと思ったら再び小さな光弾が三発飛んできた。

オレは上の方に来た光弾を頭を反らして避け、残り二つをなんとか右手で叩き落とす。そして小さく口元で言葉を紡ぎ、空いていた左の双剣を光弾の飛んできた方に向けて言い放つ。

「プティサンダー！」

言い終わると左手から魔力が放たれる感触がした。魔力は小さな筋状の光となり、槍のように林の奥に光弾以上の速さで伸びていった。

「……っ」

すぐ近くから、少女のうめき声がかすかに聞こえた。どうやら場所はあっていたらしい。ザツと草むらをかき分ける音がして、木々の間から一瞬向こうの姿が確認できた。

見たのは、長い緑色の髪、わずかに差し込むさやかな日の光の中で怪しくきらめく銃と……。

古宮高校の女子用制服であった。

「な……」

まさか、高校内に生徒会以外で魔法使いがいたのか！

オレが驚愕に包まれていると、不意にガラスを割ったような音が林に響いた。

謎の風魔法使い 3（後書き）

この話を投稿するのに合わせて、今までの話にサブタイトルを付けました。ちよつとは見栄えするといいなあ……。

誤字、脱字、修正の指摘、感想をお待ちしています。

謎の風魔法使い 4

「イエロスピアっ!」

謎のガラスの破砕音のようなものがしたすぐ後、今度は男の声が聞こえた。カチッと水が固まる音が聞こえ、次の瞬間には、それが弾けるような音がした。すると近くの木の一本が、ぐらっと傾いた。そしてがさがさがさ! とけたたましい音を響かせながら、ゆっくりとその木は倒れてしまった。

突然のことに、オレはしばし呆然とする。集中が解けて、シューインと両手の双剣が小さな音を立てて霧散した。

「な……にが、起こってるんだ?」

オレの口から思わずそんな言葉が漏れる。その時、バンバンと複数の銃撃音が響いた。その音にさっと現実に戻されたオレだったが、一向に弾が飛んでこないところを見るに、その音はオレの方に向けたものではないようだ。どうやら風魔法を使う相手は、突然乱入してきた男に集中しているのだろう。ほんの少し気の余裕ができたところで、オレはふと疑問を覚えた。

あの魔法
イエロスピアは……。

突然乱入してきた男の声のやつが使った魔法——イエロスピア。オレはそれを見たことがあった。

大きさはある程度自由に変えられるらしいが、氷柱氷柱を作り出し相手にぶつける……氷属性の初歩の魔法だ。氷属性を得意としている勦也が、試しに見せてくれた魔法であった。

「……まさか、勦也が?」

その時、がさがさと木々の上から大きな音がした。その音は、だんだんと遠ざかっていく。まるで、なにかが逃げるみたいに……。

「よう、大丈夫だったか雷牙？」

音のした方を凝視していたら、不意に聞いたことのある皮肉気な声と、日が少なく薄いが、大きな影がオレに落とされた。オレはそのまま視線を真上に向ける。

見えたのは、小さく口元に笑みを浮かべ、大剣を肩に担いだ勲也の姿だった。

「り、勲也。……やっぱりさっきの魔法はお前だったのか」

「イエロスピアか」

「そうそう」

「……残念ながら、外されちゃったがな」

そう言いつつ、勲也は何か——おそらくあの古宮高校の女子用制服を着た少女であろうが——が離れていった方向を眺めて、小さく嘆息した。

「なんだったんだろう、今のやつ……？」

オレも同じく少女の逃げた方向を眺め、つぶやく。

「さあな」

勲也はそっけなく答えた。おそらく彼もうまく状況が呑み込めていないのだろう。

「……ところで、どうして勲也はここに？ お前も近く通って魔力波を感じたのか？」

明後日の方角から視線を外し、オレは勦也の顔を見上げた。勦也は横目でこちらを見下ろしながら言った。

「いや、俺のほうはレオンがその魔力波を感じたらしくてな。確認がてら寄ってみたら、結界が張ってあった。切り破ったら、あいつとお前が戦ってたってわけだ」

「そうか……」

言いつつオレはなんとなく視線を下の方に下げる。

「……お前は、結構手痛くやられたみたいだな」

小さな光を放ちながら勦也の大剣が消える。大剣を魔力の粒子に還元して、体内に取り込んだのだ。そのまま勦也は腰をかがめた。

「……そんなやられてないし」

「強がんなって」

「強がつてなんか……むぐ」

不意に勦也がオレの口元を手の親指で拭う。赤くなって抗議の声を上げようとしたところで、オレはその勦也が拭った指先に血がついているのをとらえた。一体なんの血だと考え始めたところで、オレは口の中に血の味が広がっていることに初めて気が付いた。どうやらその一部が、よだれよろしく垂れていたらしい。

「あ……」

「さっきからお前の体が力が入ってなさそうだからな。おおかた木に叩きつけられでもしたんだろう？」

言いつつ勦也は、ズボンのポケットからシックなハンカチを取り出した。

「ま、拭いとけ。まだ残ってるから」

「あ、……ありがと」

オレは礼を言いつつ差し出されたハンカチに手を差し伸べる。ただ手を伸ばしているだけなのに、嫌に腕が震えた。

「あ——」

手をかけたハンカチがするりと落ちて、思わず声が出た。慌てて地面に落ちたハンカチを取ろうと手を伸ばし――

……伸ばせなかった。

「あ……、え」

腕の震えが激しく、震えが体全体にも伝播したからだ。

「ちょ、なんで……」

オレは驚きの表情を浮かべて震える自分の体を抱いた。傍^{はた}から見たら、青い顔で小動物のように震えるその様子は、ひどく脆い印象を受けるであろう。

「なんなんだよ、一体……」

自分の体に何が起こっているのか分からない。何故だが、震えは止まらなかった。

「……………」

勲也はさてどうしたものか、といった様子で頭を掻いた。

「……………恐怖、だな」

不意に、勲也がぼつんとつぶやいた。

「きょう……………ふ？」

「ようやっと体が——意識が気づきだしたのさ。自分が殺されそうだった、ってことにな」

勲也はほんと、呆けたように自分を見るオレの頭に手を置いた。

「昨夜の討伐のときも、もちろんそういうのがあったんだろうが、まだ『この世界』に慣れていないお前にとっては、どうしても『リアル感』が薄かったはずだ。それに対して今回の相手は人間だったし、魔法用に改造されたモンなんだろうが、武器は銃だった。魔物なんてファンタジックな存在よりも、ずっとリアルに恐怖したはずさ」

ぐしぐしと勲也がオレの頭を撫でる。

「ま、安心しろ。とりあえず相手は逃げて行った。もう怖いもんはねえよ」

勲也の撫では、オレの震えが落ち着くまで続いた。

謎の風魔法使い 4（後書き）

誤字、脱字、修正の指摘、感想をお待ちしています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8324w/>

虹色の電撃姫～いやだからオレは……～

2011年12月3日14時51分発行